ヒーローズ＆パンツァー

剣音レツ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〈注意事項〉

・原作よりも、シリアスなバトル要素が強いです。

・戦車道の設定などが、原作と大きく異なるところがあります。

・恋愛描写はあるかもです。

・色々とカオス＆チートな所もあるかもです。

〈あらすじ〉

謎の影法師の出現により、ガルパンの世界各地に、この世界に存在しないはずの怪獣・怪人たちが突如現れ、猛威を振るい始める！

次々に現れ猛威を振るう怪獣・怪人たちに対抗するため、戦車連盟などの検討により、本来女子を育成するための武芸『戦車道』を復活せざるを得なくなってしまう。

一方、自身の行き過ぎた正義感により命を落としてしまった、ヒーローに憧れる三人の若者は、おかしな神様により、ヒーローの力を授かり、危機に瀕するガルパンの世界に舞い降りる！

ヒーローの力を得た三人の勇者と、華奢な体で戦車を動かす少女たちが出会う時、そこから始まる運命の物語とは!?

※因みに本作は、私がウルトラマンオーブに影響されたという事も

あり、歴代ヒーローシリーズ（主にウルトラシリーズ）のサブタイトルが、毎回登場人物の台詞に隠されている、所謂『サブタイトルを探せ！』というちょっとした遊びもあります。

解答は各話のあとがきの欄に記載します。

目次

プロローグ～男子編＆女子編～
プロローグ～女子編～ ―― 1
プロローグ～男子編～ ―― 4
第1章『出会い、そして戦いへ』
第1話『舞い降りた光』 ―― 14
第2話『強く決めたこと』 ―― 62
第3話『冬を呼ぶ春』 ―― 126
第4話『ビー・アンビシャス』 ―― 192

プロローグ～男子編＆女子編～
プロローグ～女子編～

……全ては、約三か月前のあの日から始まった……。

……とある雲一つなく澄み渡るどこまでも続く青空。
そしてその下で静かにうねる海、気持ちよく吹き付ける風、綺麗にビルや民家などが並び立つ街。
見るからに平和な街であり、その平和がいつまでも続くかのように思えたその時、

〝ズオオオオオオオオン〟

突如、白昼堂々澄んだ青空に黒いフード付きのマントを着た人影のような姿をし、背後には紫のもやの様な物を発する霊体のようなもの『邪心王　黒い影法師』が無数に現れる。
黒い影法師。それは、人間の持つ悪意や恐怖や恐れなどの負の感情（マイナスエネルギー）から生まれた邪悪なエネルギーの集合体である。
その影法師が突如上空に大量に現れ彷徨っている……そのなんとも奇妙な光景を、地上の人々は「何？あれ。」と不思議そうにも、少し不安そうにも見つめていた。

と、その時！

〝ズドーン〟
〝グギャオオオオ!!〟
突如、とある山場の地面を勢いよく土砂や土煙を巻き上げながら突

き破り、一匹の怪獣『月の輪怪獣クレッセント』が現れる！

突然の怪獣の出現!!　はて、一体どうした事なのだろうか……？
これはもしや、突如現れた影法師の仕業なのだろうか……？

他にも熊本では『岩石怪獣サドラ』と『地底怪獣デットン』が戦い合いながら暴れ、
神奈川の横浜では『海象怪獣デッパラス』がベイブリッジの真下の海から勢いよく水しぶきを上げながら現れ、
長崎では『ミイラ怪獣ドドンゴ』が目からの怪光線などで街を蹂躙し、
青森では『しんきろう怪獣ロードラ』が長い鼻からの溶解液で自動車を溶かしながら暴れる、
など、何はともあれ、黒い影法師が現れたその日から世界各地で、この世界では存在しないはずの怪獣・怪人たちが一斉に現れ暴れ出したのだ！
人々は、突如現れて暴れ回る怪獣たちに成すすべなく、被害者は日に日に増え続けていく……！

今にも怪獣地獄となりそうなこの世界を守るため、日本戦車連盟などの判断により、長らく行われることのなかった武道を復活せざるを得なくなった。

その武道とは……『戦車道』！

戦車道とは本来、かつては華道、茶道と並び称されるほど伝統的な文化であり、世界的に女子の嗜みとして受け継がれてきた礼節のある、淑やかで慎ましく、凛々しい婦女子を育成することを目指した武芸である。
なんでも、戦車道を取った女子は、男子にモテモテになるんだとか。

……そう、即ちこれは本来は戦争のためではなく、女子を育成するための武芸なのである。しかし、この世界で怪獣に確実なダメージを与えられるものは、もうこの戦車道の戦車しか無かった。
まさかこんな形で戦車道が復活するなんて……数人は残念がったり、皮肉を感じる者もいたが、この世界を守るためとして、やむを得ない事だった。
実弾も、以前の戦車を走行不能にする程度ではなく、外国などの協力で戦車なら一撃で木っ端微塵にできる高威力の弾が使われる事になった。

かくして、各県の戦車道の少女たちは、その華奢な体で健気に戦車を動かし果敢に怪獣たちに挑んでいく……。

そして、とある茨城の飛び地である『大洗』という町の少女たちも、他の県よりも比較的奇抜な戦車で果敢に怪獣たちに立ち向かっていた。
「パンツァー・フォー!」
特に、デフォルメされたタラコ唇のあんこうの絵が刻まれた戦車に乗る五人の少女たちは、その臨機応変な戦闘スキルで怪獣たちと戦い、倒してきた。
だが、日を重ねるうちに敵も強力になっていき、次第にギリギリの戦いが続いていく……。

そして、やがて少女たちが怪獣・怪人の攻撃により絶体絶命の危機までに追い込まれた時……!
その微かな希望を求める瞳の先に、三人の戦士が立ち上がろうとしていた……!

文字が火を噴き、指輪が輝き、そして、希望に満ちた光が溢れる時、そこから始まる物語とは……!?
Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

プロローグ～男子編～

……ここはどこ？……。

ある日、僕は何処か薄暗い空間に立っていた……。
薄暗い以外に何もなく、突然の出来事に僕は混乱しつつもがむしゃらにその場を歩き続けた。

すると、やがて空間の薄暗さが段々と明るくなり、やがて真っ白な明るい空間にたどり着く。

……そこで僕は驚きの真実を自覚する。
その空間の上には、見た感じ直径2メートルぐらいの映像のビジョンが広がっており、そこに映されていたのは……、
道路で吐血して横たわる僕だった……！

その時、僕はひどく痛感した……。

……僕……死んだんだった……。

僕は『五代マドカ』（ごだいまどか）。スポーツ万能で皆から信頼を集めるモテモテの大学生だった…。
因みに僕は、〝ウルトラマン〟が大好きという個人的な趣味を持ってるんだ（笑）
いつものように登校し、授業に部活の掛け持ちと、多忙な日々を送る……はずだった。

ある日、いつものようにアパートを出て大学へ向かっていた。
でも、いつもの線路を通り過ぎようとしたその時、
〝ガタンゴトン、ガタンゴトン……〟
ああ、今日も電車が快調に走っているな。

呑気にそう思っていた時、僕はふと何かに気づく。
今にも電車が通ろうとしている線路のど真ん中に、一匹の猫が身体を丸めて眠っていた……！
なんて可愛い寝姿なんだろう……はっ、なんて思ってる場合じゃない！早く猫を移動させないと！
僕はガードレールを跳び越え、線路の真ん中へと駆けていく……。
待ってて。今助けるからね……！

が、その瞬間、

猫は駆け寄ってくる僕に驚いたのか、僕が目前まで近づいた瞬間、いずこかへと走り去って行った…！
え？ち、ちょ……⁉？
思わぬ事態により、線路には動揺する僕だけが残された……！

……ここから先は話したくもないな……ただ、これだけは言える。

これじゃあまるで自殺みたいじゃねーか⁉？

ヒーローに憧れるが故か、正義感が強すぎ、もしくは優しすぎたた僕は、それにより命を失ってしまうなんて……。
そんな自分が馬鹿みたいに感じ始めた。
マドカ「俺……一体何してんだ……。」
自暴自棄にまでなろうとしたその時、

「…あれ？……お前…マドカじゃねーか？」
「まさか……こんなところで三人揃うとは……運がいいのか悪いのか……。」
……え？

突然、聞き覚えのある2人の声が聞こえ僕は振り向く。
そして、僕は驚愕した……！
マドカ「……暁人……丈司……？」
そう、そこにいたのは、僕とは幼馴染みの『操真暁人』（そうまあきと）、『千葉丈司』（ちばたけし）だった！
僕らが揃ったのは完全な偶然である！幼馴染みとはいえ、それぞれ違う大学に通っているのに……。
暁人「いや～…久々の再会が死人の状態であの世とは……演技でもね。」
丈司「俺たちはそういう運命だったわけだ…受け入れるしかないだろう。」
暁人「おいおい…ったく相変わらず固いね～。」
堅物の丈司にお調子者の暁人はたしなめる。
マドカ「しかし、2人はどうして死んじゃったの？」
暁人「ええ？…あまり話したくはないが……その……女の子を助けて通り魔に刺されて…。」
丈司「俺は…幼児を助けて離陸中の飛行機の車輪に……。」

うわぁ……2人とも壮絶……まあ、僕も人のこと言えないけど（苦笑）

暁人「ん？何だ？その「うわぁ…2人とも壮絶…。」みたいな顔は？」
マドカ「へっ⁉？」
図星を突かれた僕は思わず裏声になる。最も、暁人は冗談で言ったんだけどね。
暁人「ほら、俺たちは言ったんだから、マドカも言いなよ。」
マドカ「へっ⁉？……それが……猫を助けて電車に……。」
暁人・丈司「……プッ……フフフフフ……。」
マドカ「っ、ちょっと～何笑ってんだよ～。」
丈司「だって猫とか…。」
暁人「マドカらしいな！」

マドカ「それ、どういうことだよ～。」
三人とも死んでるはずなのに、いつものペースで楽しそうに話し始めてしまっている。

楽しそうに話すこと約5分後、
マドカ・暁人・丈司「さ・て・と、問題はこれからどうするかだ。」
偶然にも三人の声が合わさる。
丈司「できたら、このまま元の世界に戻りたいところ。」
暁人「それが無理なら、別のものに生まれ変わるのかな？俺、女の子に生まれ変わっちゃったりして！」
マドカ「それに、置いてきた者たちのことを想うと……。」
マドカが気になることを呟き俯いたその時、

???「生き返りたいか⁉？　そりゃあ生き返りたいよなー！」
突如、どこからか気さくなおっさんの声が聞こえて三人は振り向く。
そこには仙人のような格好をした年配の男性が立っていた。
丈司「…誰だ？アンタ。」
???「俺か？俺は神であって、神でありたくなかった者だ。」
〝ガクリッ〟
神様らしきおっさんの意味不明な発言に三人は新喜劇のように同時にずっこける。
だが、すぐさま立ち上がって神に話しかける。
暁人「なんでもいい。おっちゃん、もしかして俺達を生き返らせることが出来ちゃったりして？」
神「おっちゃん？そりゃあねえだろう。せめて〝神〟と呼んでくれ。」
神のつかみどころ無い発言に動じる事無く話しかけ続ける。
マドカ「なんでもいいよ！早く俺達を生き返らｓ……、」
〝ビュン〟
マドカ「⁉うわっ！」

神は掌を突き出し不思議な力で、縋りつくマドカを吹き飛ばす。暁人、丈司も驚愕する。
神「馬鹿者めが…無駄な正義感のせいで落とした命だろ？　易々蘇らせる事は出来ないね。」
神は突如シリアスな発言をする。
だが、マドカは仰向けのまま語り始める。
マドカ「……そうだよ……僕は大馬鹿だよ……何が「ヒーローに憧れる」だよ……いくら身体能力あっても…学校で活躍できても……死んでしまったら元も子もないのに……大丈夫なはずの猫にも、無意識に体が動いてしまうなんて……！」
マドカの発言に神は何やら反応する。
神「お前……もしかして憧れのヒーローの影響であんな事を……？」
その時、神の目にはマドカの心中に微かな光らしきものが見えていた。それは暁人と丈司も同じだった。
暁人「俺達も、無意識に動いて命を落としちゃったんだっけ……だって放っとけなかったんだもん。」
丈司「人として当然なことをしたのみ。例え人間だろうとそうでなかろうと、自身を犠牲にして守る。それがヒーローだからな。」
マドカがウルトラマンに憧れる様に暁人は〝仮面ライダー〟、丈司は〝スーパー戦隊〟にそれぞれ憧れており、その影響で強い正義感を持っていた。
それを知った神は三人にある試練を課すことになる。

神「そんなに止められない正義感を持つのなら、お前らにやってもらいたいことがある。」
マドカ・暁人・丈司「え？」
神「これからお前らは、『ガルパン』の世界に転生する事にする。」
暁人「……ほえ？」
丈司「何だ？それは……。」
マドカ「転生って……？」

三人の困惑は止まらない。神は語り続ける。
神「そこは簡単に言えば、少女たちが戦車に乗って戦う世界だ。」
なんかちょっと違う気がする神のざっくりした説明だが、三人は大体理解した。
丈司「大体分かった。」
暁人「戦車に女の子って……なんかミスマッチ感がパないんだが…。」
マドカ「まさか、その世界の少女たちに危機が迫ってるとか？」
神「お！理解早いね～。そうだ。ある侵略者により、その世界は偉い事になっている。そこで、お前達三人に、その世界を救う事をやってもらいたいと思ってね。」
神の言葉を聞いた三人は、持ち前の正義感故に、即座に引き受ける気になった。
暁人「…まあ、何はともあれ、絶望に染まろうとしてるなら、俺達が希望にならなくちゃな。」
丈司「ああ、命を懸けて女子（おなご）を守る……それが侍であり、ヒーローであるからな。」
暁人「ったく、丈司は相変わらず堅物だな～。」
マドカ「一つ聞きたいことがあります！その世界を守り抜いたら、俺達を元の世界に戻してくれますか？」
神「……まあ、その辺は検討する事にすよう。」
マドカ「ありがとうございます！じゃあ、今すぐ俺達を転生してくれますか？」
神「そうだよ☆でもね！そのまま転生させるワケにはいかないんだ☆あそこの世界には、暴れ回る怪獣や怪人たちが、たーくさんいるからね☆」
神は突然軽い声色に変えて話す。
マドカ「……じゃあ…どうすれば……。」
三人が途方に暮れそうになったその時、神は思わぬことを言い出す。

神「…ヒーローの力を得れば、怪獣や怪人たちと戦うことが出来る。やるか？」
三人は少し困惑する。
暁人「つまり……俺達がヒーローになって戦うと言うことですか？」
神「そうだ。自分がどんなヒーローになりたいか、アイテム等はどんなものが必要か、思う事なんでも言うがいい。俺がその通りにしてやる。」
三人は少し戸惑い始める……何しろ憧れとはいえ、ヒーローも怪獣も架空の存在である世界で育った彼らにとって、それなりの覚悟が必要であるからだ。

やがて、しばらく俯き考えた三人は顔を上げる。その表情はまさに決意に満ちたものだった。
丈司「…いいだろう。男たるのも、女（おなご）を守るためなら当然の覚悟だ。」
暁人「あそこの世界の彼女たちも頑張ってんだろ？なら、俺達がその彼女たちの希望になってやらないとな。」
マドカ「これも何かの運命なのかもしれません……行きます……行かせてください！神様！」
正義感溢れる三人は遂に決心した。
神「よし！決まりだ。それぞれ自分がどういう風になりたいかを言うがいい。じゃあまずは～…そこのクールな君！」

丈司「俺か。まずは容姿を『侍戦隊シンケンジャー』の『池波流ノ介』みたいに。次に、変身するヒーローは『シンケンレッド』だ。」
戦隊好きの丈司はシンケンレッドになることにした。
丈司「次にアイテム等についてだが……他のシンケンジャーのメンバーの武器、それから全『折神』も使えるようにしてほしい。あと、秘伝ディスクも頼む。以上、こんな感じかな。」

神「よし！丈司君オッケー！次はお調子者の君！」

暁人「そうだな～…俺の場合、容姿は『仮面ライダーウィザード』の『操真晴人』で。ヒーローは『仮面ライダーウィザード』で、体内にドラゴンとか無く、本家にある全てのフォームに変身できるようにしてほしい。」

仮面ライダー好きの暁人は仮面ライダーウィザードに決めた。

暁人「アイテムはそうだな～……全てのウィザードリングを頼む。あ、プラモンスターやドラゴタイマーも忘れずに。俺はこれで以上かな。」

神「よし！暁人君オッケー！最後はマイルドな君だ！」

マドカ「僕は…ヒーローは『ウルトラマンティガ』でお願いします。容姿についてですが、顔は『ウルトラマンメビウス』の『ヒビノミライ』で、服装は黒と白のストライプのシャツの上に赤のスタジャン、そしてジーパン姿で。」

ウルトラマン好きのマドカはその中でも大好きな『ウルトラマンティガ』に決めた。

マドカ「アイテムについてですが……『トライガーショット』に『ウルトライザー』を装備できるような状態でお願いします。以上です！」

神「それだけでいいのか？」

マドカ「はい！僕はウルトラマンと言う強大な光を手に入れていますから……それに、いざと言う時は暁人たちがいます！」

暁人「（嬉しそうに）マドカお前……。」

神「そうか……じゃ、マドカ君もオッケーだな！　しかし、三人とも超イケメンだね～。」

暁人「まあ、人々の希望になるヒーローは容姿も大事だからね。」

丈司「男が、女（おなご）の前でかっこよくするのは当然だ。」

マドカ「ありがとうございます！神様。」

神「お前ら、良い奴らだから、向こうの世界に着いたらご褒美が待ってるよ☆」
丈司「ご褒美？何だそれは。」
神「まあまあ、今から向こうの世界に行ける様にしてやっから焦るなって。」
神は相変わらずの軽い口調で三人を宥める。
神「んじゃ、三人ともいいかな？」
三人は既に決心していた。

丈司「ああ、いつでもいいぞ。」
暁人「右に同じだぜアミーゴ☆」
マドカ「お願いします！」

神「それじゃ、三人とも……健闘を祈る。」
マドカ「はい！」

マドカ・暁人・丈司「心臓を捧げよ!!（右拳を左胸に当てる）」

三人の決心を確認した神は目をつぶり、そっと三人に右の掌を向ける。

いよいよガルパンの世界に行くのか……三人が初めて行く世界の事でワクワクやドキドキを感じ始めたその時、

神「ちぇいさっっ!!」
〝ドオオオオン〟
神は右の掌を三人に向けて突き付け、不思議な力で吹っ飛ばす……。

だが、気が付いた三人は思わぬ事に驚く。

〝ザザザザザザザ……〟

マドカ・暁人・丈司「な・ぜ・な・ん・だ⁉」

なんと三人は、褌一丁の裸姿で滝に打たれていたのだ！

暁人「ガボガビオガボ……なんドゥエ…ガボガボ…なんドゥエこうなるんドゥアァァ⁉」（訳：何でこうなるんだー⁉）

丈司「ガボガボガボ……たビュン…ガボガ…ここがその世界じゃないガバガバ……！」（訳：多分、ここがその世界じゃないのか！）

マドカ「いビャ…ガボガボガボ…たビュン違うとおビョビュけジョ…。」（訳：いや、多分違うと思うけど…。）

頭から滝に打たれてるために、呂律が上手く回らない状態で三人は驚きや困惑で騒ぐ。

その時、何処からか神の声が聞こえる。

神「だっておめーら、初めてヒーローになって戦うんだろう？精神統一ぐらいしとくもんだな。ハイ！あと十分！」

マドカ・暁人・丈司「なぁぁぁにいいいいぃ⁉⁉⁉」

三人は、「そんな事聞いてないぞー!!」とばかりに驚く。

神「安心しろ。俺のメニューを突破したら、ガルパンの世界に行けっからさ☆」

マドカ「こうなったら行くしかないか……ファイトー!!」

マドカ・暁人・丈司「いっぱーつ!!」

その後、三人はサウナに二十分、片足立ち二十分という妙なメニューを突破したんだとか……。

果たして、彼らを待ち受ける運命の物語とは⁉

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

（ＥＤ：ＤｒｅａｍＲｉｓｅｒ）

第1章『出会い、そして戦いへ』

第1話『舞い降りた光』

（OP：TAKE　ME　HIGHER）

上に学校が存在する大きな『学園艦』が青く鮮やかな海に浮かぶ茨城県大洗町。その町の砂浜の横に一軒の豪邸が建っている。

その豪邸の二階ある寝室で、三人の若者が眠っている……。

そう、その三人こそ、神の力でここ『ガールズ＆パンツァー』の世界に転生してきた『五代マドカ』、『操真暁人』、『千葉丈司』の三人である。

この豪邸も、神がこの世界での三人の住居として新しく設置したモノなのである。

三人は昨夜神の試練を越えてようやく転生された後、余りに疲れてたため倒れ込むように眠りについたんだとか。

因みにそれぞれの寝姿についてだが、マドカは仰向けで首まで布団をかけていてとても整っていた寝姿なのに対し、

暁人はうつ伏せで、しかも寝相が悪かったのか布団が完全に捲れており、

丈司は夢でチャンバラでもやったのか、仰向けでおかしな格好であり、暁人と同じく布団が完全に捲れていた。

何はともあれ、三人が気持ちよさそうに寝ていたその時、

〝ビーッ、ビーッ、ビーッ……〟〝ウウウウゥゥゥ～ゥウウウウゥゥゥ～……〟

突然、サイレンのような大きな音が鳴り響く！それはマドカの目覚まし時計のアラーム音だった。

外にまで響くのではないかと言うほど大きい音で三人は目覚める。

マドカ「（背伸びをしながら）んんん～よく寝た。」

暁人「そうだな。しっかしマドカ、お前の目覚ましは小さいくせにうるさ過ぎるんだよな～。」
丈司「あの大きさだと近所の人もみんな起きるんじゃないのか？」
マドカ「あはは…でも、その方が確実に目覚めるし、いざと言う時は音量調節もできるからね。」
暁人「しっかし、まさかこの世界での俺達の住居が、こんなにも豪邸だとはな。」
丈司「俺達は戦士の力を手に入れ、命を懸けると誓ったんだ。それなりの報酬じゃ何かじゃないのか？」
マドカ「ちょっと違う気がするけどね……ん？」

起きて早々、いつもの様に陽気な会話をしていたマドカたちは、自分たちの目前にある何かに気付く。

そこには正方形の一辺が一メートル以上あるのではないかと言うほど大きな箱とその横の宝箱のような大きな箱、そして巨大な箱の上に小さな一つの箱が置いてあった。
丈司「……あれはもしかして、」
暁人「俺達が注文した、」
マドカ「アイテムなのかな？でも何で不自然に一つ小さい箱があるんだろう？」
すぐさま、〝あの世〟での神とのやり取りを思い出したマドカたちは箱に近づく。
暁人「もしやこれ開けたりしたら、俺たちおじいさんになったりしてな。」
丈司「よせよ、浦島太郎じゃあるまい。」
暁人は小さな箱を手に取って軽口を言い、丈司はそれにクールに突っ込む。
マドカ「あはは…とりあえず開けてみようよ。」
暁人「おお、んじゃ、とりあえずこれから開けてみっか。」
暁人は持っていた小さな箱を開けた。

〝ビュビュビュビュビュ、プアーン〟
暁人「うわっ⁉?」
開けた瞬間、その箱の中から真上に光が広がり、やがてディスプレイのような形になり、そこにあの神の顔が映る。
神「お前たちがこの箱を開けたということは、俺の試練を越えた証だ。さあ！この箱の中のアイテムを受け取るがいい！そしてそれでこの世界で活躍し、モテまくるがいい！ハーッハッハッハー！……あ、あと、約束した例のご褒美も入ってるよ☆じゃあね～。」
〝ビュッ〟
映った神が喋り終えると、そのディスプレイと光は消え、小さい箱はただの箱となった。
マドカ「……か、神様のメッセージを伝えるためだけの箱だったんだね。あはは…。」
三人は困惑しながらも、今度は一番大きな箱の蓋を三人で掴む。
暁人「それじゃ、いくぜ？」
マドカ・暁人・丈司「いーち、にーの、さんっ！」
三人は大きな箱の蓋を開けて中を確認する。そして、驚く。
丈司「これは！……全ての『折神』や『秘伝ディスク』。それから『ショドウフォン』に『シンケンマル』も。」
暁人「おお！間違いない。全『ウィザードリング』に『プラモンスター』、『ドラゴタイマー』、そして『ウィザードライバー』だ！」
マドカ「おお、本物の『スパークレンス』だ。それに『ウルトライザー』、そしてウルトライザーを装着できる作りになっている『トライガーショット』が入ってる。」
三人は驚き喜ぶ。その様子はまるでクリスマスの日にプレゼントを開けて喜ぶ子供のようでどこか微笑ましい。
箱に入っていたのは紛れもなく、三人が神様に頼んだ、『英雄（ヒーロー）』に変身するための力およびアイテムだった。三人は見つめ合い頷き合う。
しかし、三人が特に気になってたものの一つは、神様が言ってたご褒美の事だった。

丈司「！……こ、これは。」
暁人「マジで……。」
マドカ「凄いものだよ……！」
そのご褒美を見た三人は驚く。
入っていたのは、『ギンガスパーク』、『ディケイドライバー』、『モバイレーツ』！それぞれ三人分あった！
暁人「おっちゃん……（嬉しそうな顔で）太っ腹にも程があんだろ！」
そして、その驚きのご褒美を見た三人はもう一つの宝箱のような箱に目が移り、「もしや」と思いそれも開けてみる。
案の定、その宝箱のような箱には『スパークドールズ』、『ライダーカード』、『レンジャーキー』がぎっしり入っていた！
マドカ・暁人・丈司「なんじゃこりゃあああぁぁぁ‼？（嬉しそうな顔で）」
三人は、予想してたよりも素晴らしいご褒美に声を揃えて叫んだ。
すると、先ほどの小さい箱から再び光が広がり、ディスプレイが映る。
神「どうだーい！おっちゃんサービス精神旺盛だろ～♪あ、因みにスパークドールズもライダーカードもレンジャーキーも、本物の戦士が変形したり、本物の戦士の力から作ったのではなく、俺が各戦士の戦闘データでじっくり作り上げたモノだ。だから、遠慮なく使うがいい。あ、あとマドカ君！君のティガには特別なある力を与えておいた。」
マドカ「ある力……ですか？」
神「そうだ。怪獣退治と言えど、悪くない怪獣だっているだろ？そいつらを救うための力だ。君のティガには、『ウルトラマンコスモス』の力を加えておいた。そなティガは、『フルムーンレクト』や『ルナエキストラクト』などが打てるぞ。」
……マドカは嬉しくてたまらなかった。なぜなら、大好きなティガに、コスモスの力が加わっているのだから、ある意味チート級のティガである。そんなティガの力を自身が使うのだから。

丈司「これでおかげで怖いもの無しです。」
暁人「サンキュー、おっちゃん。」
マドカ「ホントに、ホントにありがとうございます！この力、ありがたく使わせてもらいます！」
神「ああ。しっかりやれよ。道はおそらく険しい。だが、お前たちが力を合わせ、また、この世界の戦車乗りの少女たちと力を合わせて頑張れば、必ずどんな困難も越えて行ける！健闘を祈るぞ！　じゃ、俺はそろそろこの辺で。」
〝ピシャッ〟
またしてもディスプレイは消え、小さい箱はただの箱となった。
丈司「……なんかちょっと、いいもの貰いすぎて申し訳ない気もするが、神様が用意してくれたものだ。受け取らないのは野暮うだろう。」
暁人「だな。ありがたく頂くとしようぜ。」
マドカ「そうだね。でも、ただ戦力が多くあるだけじゃ意味がない……その戦力を、戦いの状況に合わせて正しく使ってからこそ意味があると思うんだ。」
丈司「ああ、そうだな。」
暁人「俺たちは基本授かった英雄の力で、そして、状況によってはこのディケイドライバーとかを使うことにしよう。」
三人は、自分たちが授けられた英雄の力、そして、ご褒美でもらったギンガスパーク、ディケイドライバー、モバイレーツを有効に使って戦っていこうと決心した。

と、その時！

神「あ！それともう少し……、」
〝ズコッ〟
マドカ・暁人・丈司「まだあるのかよー！」
突然神の声が響き三人はずっこける。
神「マドカ君、君のスパークレンスは〝ガオディクション〟という

機能であらゆるものを解析することも出来る。側面のトリガーを引けば可能だ。」
マドカ「あらゆるものを……ですか？」
神「ああ。人間はもちろん、動物、更には物など、調べたい、様子を知りたいものに向けてトリガーを引くと解析可能だ。」
マドカ「そうですか。ありがとうございます！」
神「あ～あと、お前らの各財布には既に７万円もの大金が入っている。それと、お前らはこの世界ではフリーターだ。」
マドカ・暁人・丈司「え？」
丈司「フ…」
暁人「リー…」
マドカ「ター？」
神「そうだ。マドカはビルの窓拭き、暁人は工事現場、丈司は食肉工事でとそれぞれバイトをする事になっている。シフトは週に三回だ。因みに今日、早速シフトが３時間後にある。せいぜい頑張って稼ぐんだぞ～。じゃあな～。」
〝ピシャッ〟
因みに今現在ＡＭ．７：００だから、バイトはその３時間後の１０：００からとなる。
丈司「……最後の最後に面倒な…。」
暁人「まあ、でも、金を稼げるならいいじゃねーか。頑張ろうぜ。」
マドカ「そうだね。じゃあ、とりあえず……このアイテムの中で幾つか試しに使ってみる？」

三人はとりあえず、アイテムの幾つかを試しに使ってみることにした。
暁人は早速ウィザードライバーを装着してみる。ウィザードライバーは普段、中央に右手の手形が付いた普通のベルトの姿に擬態しており、魔法リングならこの状態でも使用可能なのだ。
暁人「うおおぉぉぉ！いい、チョーイイネ！さあ、早速どの魔法リングを試そうかな～♪」

暁人は、初めてウィザードライバーを装着した嬉しさから興奮気味である。
マドカ「とりあえず、危害を加えないのがいいんじゃない？」
暁人「そうだな。んじゃあ～……これだ。」
暁人は一つのウィザードリングを取り出し、右手の中指に填める。そのリングの絵柄は、ドラゴンの鼻から何やら煙のようなものが出ているようなものだった。
マドカ「それは…煙か何かかな？」
暁人「んじゃ、いきまーす。」
暁人は魔法リングをはめた右手をバックルの手形にかざす。

《スメル・プリーズ！》

〝プシュ～〟

魔法陣とともにリングの絵柄に応じた魔法が発動された。その瞬間、暁人からは何やらガスのようなものが放出される。それを吸った瞬間、三人は鼻をつまみ真っ青になる。
丈司「⁉ブヘッ!!何だこの臭いは！」
マドカ「鼻が曲がる……それって悪臭を放つ魔法？」
暁人「（鼻声で棒読み気味に）……しまった。」
暁人が使ったウィザードリングは、装着者から強烈な悪臭が放出される効果を出す『スメルウィザードリング』だった。
悪臭はたちまち部屋中に広がり、三人はその臭さに苦しむ。
丈司（……はっ、そうだ。）
丈司はふと何か思いつき、そしてショドウフォンを手に取る。
丈司「マドカ！窓を開けろ！」
マドカ「え？…分かった。」
丈司に言われたマドカは近くの窓を開ける。そして丈司はショドウフォンを構える。
〝キュッキュイッキュッキュイッ〟（↑所謂ショドウフォン

の書く音）
丈司「はっ！」
丈司はショドウフォンの『筆モード』で『風』という文字を宙に書き、ショドウフォンを振るう事で書いた文字を具現化させる力『モヂカラ』を発動させる。
〝ビューッ〟
風のモヂカラによって強い風が吹き、悪臭を全て外へ吹き出した。
悪臭から解放されたと同時に、外から入って来る朝の新鮮な空気を吸った事で三人は楽になる。
丈司「ったく、ある意味危害を加える指輪だったな。」
暁人「ふぃ～…サンキュー、丈司。」
マドカ「でもこれで、ウィザードライバーもショドウフォンも使える事が分かったね。」
マドカは窓に縋りつくように外の景色を眺めながら言った後、そこから大洗町の景色を眺め始める。
マドカ「……綺麗な町と海だな～。」
マドカはあまりにも綺麗な大洗町の景色に思わず見入ってしまっている。その時、マドカはふと手に持っているスパークレンスへと目が移る。
マドカ「……このスパークレンス、いろんなモノの様子などを解析できるんだよね…。ちょっと試してみよっと。」
マドカはスパークレンスを大洗町の方へ向け、下部のトリガーを引く。

〝ピルルピルピルピル〟
《ガオディクションを起動します。大洗町、解析中》
マドカ「へえー、こんな感じなんだ。しかも音声が女声とはちょっと意外（笑）」
〝ピルルピルピルピル〟
マドカ「お、解析が完了したかな。」

《解析完了しました。

脅威、不安、警戒》

大洗町の解析が完了した。しかし、何やら三つの不吉なワードが並べられる。マドカは理解できず首をかしげる。

マドカ「？一体何の事だろう……。」

マドカはスパークレンスから発せられた三つのワードが気になり始めるが、見た感じ今のところ平和そうな町の様子から、何も起こらないようにも感じていた。

暁人「おーいマドカ、どうせなら新鮮な空気を外に出てたっぷり吸わないか？」

マドカ「え……うん。いいかもね。」

マドカはとりあえず考えるのを止め、暁人たちと外に出る。

三人が外を出るとすぐそこは砂浜で、早朝の新鮮な空気が、青く広がる海からの潮風と共に彼らにそよそよと吹き付ける。

その空気を吸った三人は自然と元気が湧いてくるようであった。

暁人「くう～、この世界は酸素が美味いぜ！なあ。」

丈司「ああ。この世界の人たちは、きっといい人たちだろうな。」

マドカ「絶対に守らないとね……この素晴らしい朝が、いつまでも繰り返し来るように。」

暁人「おうよ！いざと言う時は、俺達が最後の希望になるかもしれないしな。」

丈司「隙を見せたら明日は無い。心して挑まないとな。」

マドカ「そうだね。僕たちが、光を継ぐものだから、、、力を合わせて頑張ろう。」

三人は砂浜で、昇ったばかりの日の光を受け光る海を見つけながら改めてこの町を守る決心をした。

マドカ「じゃあ、そろそろ朝食を済ませてバイトに行く準備をしますか。」
丈司「そうだな。」
三人は、朝食を済ませようと豪邸の中へと入って行った。

場所は変わって、大洗町の海上に浮かぶ『翔鶴』型空母に近似する形状の学園艦。その上には『県立大洗女子学園高等学校』という学園が存在している。
この学園も戦車道が存在するが、他の学園と違い、２０年も戦車道が廃止されており、生徒数の減少と目立った活動実績が無いことを理由として、今年度（西暦２０１６年）限りの廃校が決定していたが、謎の影法師と怪獣たちの出現により戦車道を復活せざるを得なくなったため、皮肉にもその事により現在は廃校を保留している状態である。
戦車も、戦車道廃止後に学園予算確保のため多くを売却してしまったため、売れ残った旧式車両しか残っていなかった。
所謂弱小校でもある大洗女子学園。しかし、本校の戦車道に所属する生徒たちは他校に負けず、日々全力で怪獣たちに立ち向かう日々を送っていた。

ＡＭ１１：３０、そんな大洗女子学園の戦車道の生徒である５人の少女たちは、一緒に食堂で昼食を摂っていた。
『西住みほ』、『武部沙織』、『五十鈴華』、『秋山優香理』、『冷泉麻子』の、二年生五人から成る『あんこうチーム』である。
みほ「ここ最近いい感じに討伐が進んでるよね。」
沙織「最近は等身大の怪人が多いから、戦車の砲撃一撃だからね。」
華「等身大の敵にピンポイントで当てるのは結構難しいですけどね。」
優香理「たまに出る怪獣も、攻撃に気を付ければ倒せますしね。」
麻子「しかし、怪獣も怪人も早起きし過ぎだ。」

みほ「えへへ…いつ襲って来るか分からないもんね。確かに麻子さんにとってはきついかも。」
華「朝の方が狙いやすいのでしょうか？」
沙織「男と怪獣は突然やって来るものだからね。」
華「男が来たこと、あるのですか？」
沙織「ぶー（ふくれっ面）。」
優香理「まあまあ、とりあえずこの調子で、今日は昼からの授業ありませんから、昼食の後新たな戦法の練習しましょうよ。」
みほ「うん、そうだね。」
麻子「その前に昼寝したい…。」
沙織「も～麻子ってば、牛になるよ？」
（麻子以外の四人は笑い合う。）
……とまあこんな感じで、最近の戦況などのガールズトークで盛り上がっていた。

と、次の瞬間！

〝ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……〟

みほ「きゃっ！地震⁉」
優香理「机の下に隠れましょう！」
突然大きな地震が襲って来て、四人は咄嗟に机の下に隠れる。

同じ頃、バイトをしているマドカたちにも……。
マドカ「うわっ⁉わっ！こんな時に地震かよ！」
高層ビルの窓ふきをしているマドカにとっては、思いもしない恐怖だった。
丈司「久しぶりの大きい地震だ……！」
マドカと丈司は揺れを感じていた。が、一方の工事現場でバイトしている暁人はと言うと……、

〝ゴゴゴゴゴ……〟
暁人「ん？やけに揺れが大きいな……ここのショベルカー、よっぽど力強いんだな～。」
…てな感じで、場所が場所ということもあり、まるで揺れに気付いていなかった。

約３０秒後、地震の揺れは治まった。みほたちは恐る恐る机の下から出る。
みほ「ふぅ～…びっくりしたね。」
沙織「ほんと、今日でもう三度目だよ。」
なんと、みほたちは既に先ほどのような強い地震を、同日でもう既に二度も受けていた。恐らく残りは、マドカたちが眠っている夜中か早朝に起こったのであろう。
とするとあの三人、どれだけ眠りが深いのだろうか（笑）

マドカたちも同じく、揺れが治まった事で安心する。
マドカ「びっくりした～……あんなに大きな揺れは久しぶりだ。しかもこんな時（高層ビルの窓ふきをしている最中）に……。」
その時、マドカはふと何かに気付いたような反応をする。
マドカ「はっ……もしかしてこれは……。」
そう、マドカは今朝のスパークレンスの述べたワードが再び気になり始めた……。

「これは何かの前兆かもしれない」……と。

場面をみほたちに戻す。
華「自然発生でしょうか？それとも怪人たちの仕業？」
麻子「怪人が起こしたにしては大きすぎだ。」
優香理「これはもしかすると…。」
その時、校内の放送が鳴り始める。
《あんこうチームとカメさんチームは、昼休憩後、町内をパトロール

する事。　繰り返し、あんこうチームとカメさんチームは、昼休憩後、町内をパトロールする事》
優香理「突然のパトロール命令ですね。」
みほ「うん。生徒会も遂に警戒し始めたのかな？」
優香理「もしや久々の大怪獣かも…今日は戦車の本領が発揮される日かもしれませんね！」
沙織「はぁ～彼氏とデートする前ぐらい緊張するよ～。」
華「デートした事、あるのですか？」
沙織「んもう、いちいちうるさいな～！」
（沙織と麻子以外の三人は笑い合う。）
みほ「とにかく、この後残りの昼休憩時間で、戦車の準備をしましょうよ。」
華「そうですね。冷めないうちに早く食べてしまいましょう。」
四人はガールズトークをしながらの昼食を再開する。

そのちょっと後の正午、バイトを終えたマドカたちは合流し、近くのファミリーレストラン『ＴＩＧＥＲ　ＢＯＹ』で昼飯を摂ることにした。
店員「いらっしゃいませ……ワオ！三人とも超イケメン！」
マドカたちから注文を取りに来た女性店員は、マドカたちのイケメンぶりに思わず素を出して驚く。
無理もない。なんせそれぞれヒビノミライ、操真晴人、池波流ノ介似のイケメン三人組が客として来たのだから。
暁人「サンキュー、嬢ちゃん。ん？」
暁人は店員の首から下げている名刺に目が行く。そこには『アミィ結月（アルバイト）』と書かれていた。
暁人「へぇ～、お嬢ちゃんもアルバイトなの。」
アミィ「え？……ええ、そうですが。」
マドカ「実は僕たちも、バイトを終えたばかりなんですよ。」
暁人「いや～ホント疲れたよ。お嬢ちゃんも頑張ってね。」
アミィ「ええ……サンクス！」

暁人「どいたま（敬礼ポーズをしてキラーンという音が鳴る）。」
丈司「暁人！…長い。」
暁人「ちぇっ、いいじゃんかちょっとぐらい話したって。丈司は堅物なんだから。」
アミィ「へへへ…では、ご注文はどうなさいますか？」
マドカ「僕オムレツで！」
丈司「俺はお茶漬け。」
暁人「俺は～…このラム丼ってやつにしよっかな。」
アミィ「かしこまりました。」
注文を受けたアミィは厨房の方へ行く。
暁人「いや～あんなかわいい娘も働いてるなんてな～。」
丈司「鼻の下伸びてんぞ。このラッキースケベ。」
マドカ「暁人って誰とでも仲良くなれる所が長所でもあるけど…女の人だと何かたまにナンパに見えるよね。」
暁人「ちょ…そりゃねえッスよ～！」
三人は笑い合う。
……とまあ、こんな感じで楽しそうに会話をしていた。

やがて頼んだ料理が運ばれ、三人はいただく。
暁人「しかしなぁ～、マドカってホントにオムレツ好きだよな～。」
マドカ「だって大好きなんだもん。」
丈司「しかし、今日は特に大きいな。」
マドカ「何しろ、この世界に来るまで散々だったからね。その分お腹も空いてたの。」
丈司「確かに……剣道部の地獄の特訓以来の、地獄の特訓だったな。」
三人はこの世界に来るまでの経緯を振り返る。

なんとガルパンの世界に来る前に、三人は英雄の力を引き出せるために神から様々な地獄の特訓を受けていたのだ。
三人は滝やサウナ、片足立ちで精神統一した後……、

（ＢＧＭ：Ｇｉａｎｔ　Ｓｔｅｐ）
ジープ特訓。
神はなんと、ジープに乗って胴着姿の三人を追いかけまわす！
神「おめーら！逃げるな！向かって来い！」
暁人「無茶ッスよこんなの～!!」
この特訓は、向かって来るジープに向かって行き、跳び越える特訓である。
猛スピードで砂煙を巻き上げながら容赦なく走り向かって来るジープにたまに撥ねられ（※この時はまだ死人なため、死ぬことは無い。）たり、必死に懇望しながら横に回り込むと杖でぶっ叩かれたりなど、とにかくいろんな意味で生きた心地がしない滅茶苦茶な特訓だった。

ブーメラン特訓。
神がとにかくブーメランを投げる　投げる！　投げる!!
次々と飛んで来るブーメランを全て弾き返すという特訓だ。
顔を直撃したり、体中に次々とブーメランを打ち付けられても、神は容赦なくブーメランを投げ続ける。
そう、たまにこんな事を言いながら。
神「男は強くならなければならん。何のためだ⁉　最近は、女も同じくらい強くなりつつあるからだ。男だけ、持ち前の強さで浮かれてヒーローごっこばかりやってて女に抜かれでもしたら、一体どうなるー!!立て！」
筋が通ってるようで滅茶苦茶にも思える理屈である。
神「意気地無しーっ!!」
……神のくせに地獄の鬼のようである（笑）
他にも体中に着いた泡を空中回転で振るい落とす特訓、両手両足を封じられた状態での逆転など……、
暁人「もうやめよーよ！その話は！　はぁ、思い出すだけで辛い

ぜ。」
暁人が話を強引に止めてしまった。
まあ、このように、彼らは地獄の特訓メニューを突破した上でようやくこの世界に来れたのである。なるほど、これなら来た直後過労により爆睡し、地震が起きても起きないワケだ（笑）
マドカ「でも、そのお陰でより英雄として戦える自信が付いたように思えるんだ。」
丈司「そうだな。もしあの特訓が無かったら、今頃不安で一杯だったかもな。」
三人は、地獄だったと思いながらも神へのありがたさを感じていた。
三人が話しながら食事していたその時、ファミリーレストラン内のテレビのニュースが気になる事を語り出す。
キャスター「続いて。本日午前５時頃、東京Ｋ点で、マグニチュード８の大地震が起こり、道路数か所が陥没すると言う事故が起こりました。警察と消防の調べによりますと、陥没によりできた穴は直径１５メートル、深さは２０メートル前後であり、それにより巻き込まれた車は５両以上で……」
三人は大事故を語るニュースに見入っていた。
暁人「な～んか物騒な事件が起こってんな。」
暁人は陽気に呟くが、マドカと丈司は何やら深刻な顔になっていた。
暁人「ん？どったの？二人とも。」
丈司「もしかして……さっきの地震も関係しているのか？」
さらに、こんなニュースが。
キャスター「さらに、東京Ｊ地点では、謎の飛行物体の通過により数件の建物が大破するという事故が起こりました。この事故による死傷者の数は２４０人以上で……」
暁人「……まーじか？」
丈司「もしかしてこれは、新たな脅威の前兆かもしれない……。」
マドカ「新たな脅威の前兆……もしやスパークレンスはその事を

？」
マドカは今朝のスパークレンスのワードを再び思い出す。
脅威、不安、警戒……。
あのワードは、この大洗町に新たな脅威が接近していると言う知らせだったに違いない……！
丈司「これは、警戒が必要かもな。」
暁人「ああ。飯が済んだら、ちょっくら大洗を探索してみるか。」
マドカ「うん。決めたもんね。この町を守るって。」
三人は警戒心を強くした。

場面は変わって、昼休憩を終えたみほたち大洗女子学園戦車道の生徒たちは、戦車に乗り込み、スタンバイが完了していた。
そして今、戦車出動のためのゲートが開こうとしている。
アナウンスは、陸上自衛隊富士学校富士教導団戦車教導隊の１等陸尉で戦車道の教官『蝶野亜美』である。
亜美「フォースゲートオープン、フォースゲートオープン……」
やがて、ゲートが完全に開いた。戦車に乗って構える少女たちは緊張で息をのむ（呑気に干し芋を食べている一人は除いて）。
亜美「それでは各戦車、パンツァー・フォー！」
亜美教官の掛け声と共に、みほたちの戦車『ＩＶ号戦車Ｄ型』と、生徒会チーム『カメさんチーム』の戦車『３８（ｔ）戦車Ｂ／Ｃ型』が出撃する。警戒パトロールが始まった。
因みに『パンツァー・フォー』とは『戦車前進』という意味であり、決してどこかの懐かしのお笑い芸人の言葉ではない（笑）
町に出た２両の戦車は、とりあえず周囲の探索する事にした。

同じ頃、レストランで昼飯を終えたマドカたちは町の探索をしていた。
暁人「さあ、怪獣ども、怪人ども、見つけたらすぐさまやっつけて

やる！」
丈司「油断はするな。相手はどんな奴か分からないからな。」
マドカ「そうだね。警戒心を忘れずに探索を続けよう。」
と、その時、スパークレンスが一定の音と共に光はじめ、それに気づいたマドカはスパークレンスを取り出す。
マドカ「……これは…もしかして……？」
暁人「ああ、何かあるかもな。」
丈司「行ってみよう。」
三人はスパークレンスの光が差す方向へと足早に歩き始めた……。

みほたちは町の探索として戦車を走らせ続けた。
だが、今のところ走っても何か変化が起こりそうにない。
そこで、しばらく走ること約３０分後、二手に分かれて一旦停車し、センサーで怪獣の位置を探ることにした。
因みに戦車道の戦車には、主に怪獣たちの位置を探るためのセンサーが新たに組み込まれているのだ。
センサーの画面には、自分たちの戦車のマークの他に、怪獣らしき赤い点のマークが高速で移動しているのが確認できた。
みほ「やはり何かが大洗町の地下に潜んでいるね。」
優香理「あれほど地面の中を高速で移動できるなんて。」
華「よほどの大物かもしれませんね。」
沙織「会長さん、そちらの状況は？」
杏「良い感じだよ～。此方の車両接近まであと約２キロだね～。」
柚子「すごい速さですね、ドキドキします。」
桃「怪獣め、出てきたらすぐに仕留めてやる。」
カメさんチームの車両の中には、学園の生徒会長『角谷杏』、副会長の『小山柚子』、広報の『河嶋桃』が乗り込んでいた。
怪獣をサーチしながら、杏は呑気に干し芋を食べてくつろいでいる。
杏「ねえ、怪獣さんも干し芋気に入ってくれるかな？」

柚子「食べさせてみてはどうでしょう？案外仲間になってくれたりして。」
桃「んなわけないだろ？桃太郎じゃあるまい。」
杏「お？〝桃〟だけに？座布団一枚！」
桃「別にそんな意味で言ったんじゃない！…それに、強烈な地震を起こすやつなんだぞ？悪いやつに決まってる。」
冗談半分で言う杏と柚子に桃はストイックに答えた。
と、その時、
みほ《現在、怪獣らしきものはこちらまであと2～3キロぐらいです。》
杏「……ん？」
みほからの通信を聞いた杏は何やら不吉な感じになる。
杏「妙だなぁ…こちらのセンサーもあと2～3キロぐらいのところにいるぞ？私達、みほたちとは離れたところにいるのに…。」
柚子「会長……もしかして間違えてるんじゃ……。」
杏「‼？アカン、よく見たらそうだった～！」
なんとカメさんチームは、センサーの画面を間違えてしまっていた！自分たちの現在地ではなく、みほたちの現在地を映していたのだ！
その時、
〝ゴゴゴゴゴ……〟
桃「……なんか、ヤバくないか？」
突然、大きな地震がカメさんチームの場所に起こる。ちょっと離れたところで待機しているあんこうチームも揺れを感じていた。
杏は慌ててセンサーを自分たちの現在地に変える。
すると、なんと自分たちの戦車のマークと赤いマークが重なっており、一定の音とともに『警戒』という文字が大きく表示されていた！
怪獣らしきものは、カメさんチームの真下の地面まで来ていたのである！
桃「てかもう真下じゃない‼？」
〝ゴゴゴゴゴゴ〟　〝ビキビキッ〟
地震とともに、カメさんチームの真下の地面がヒビ割れ始める。

柚子「ひゃっ！なんか、下から出てきそうです！」
みほ《！急いでその場から離れてください！》
カメさんチームの車輌は慌ててその場から逃げるように走り始める。

杏「ごめ～ん！ミスっちゃった～！」
桃「ごめんじゃねーよ!!？」

〝ズゴガーン〟

〝ギイイイィィィィ!!？〟

（ＢＧＭ：怪獣復活）

カメさんチームが離れた瞬間、その地面が激しく土砂や土煙を上げながら大破し、その中から一匹の巨大生物が現れた！
自身の体の土砂を振るい落とし、不気味な咆哮を上げながらそのおぞましい姿を露わにする。
その巨大生物は、ショベルカーのような力強い両腕、赤く爛々と光る目、大きく裂けた口に三本の巨大な牙、がっしりした体つき、太く長い尻尾、そして何より首元の三日月のような模様が特徴の怪獣『月の輪怪獣クレッセント』である！
桃「ギャ～！出た～！」
クレッセントは地面を砕いて地上に現れ、すぐさま手前のカメさんチームの車輌を追いかけ始める。
優香里「遂に現れましたね。」
沙織「なんか、結構強そうだよあの怪獣。」
華「久々の激戦になりそうですね。」
麻子「相手が誰だろうと全力でやるだけだ。」
みほ「カメさんチームは落ち着いて我々のところに向かってください。その後、作戦を開始します。」

柚子「分かったわ。」
桃「しかし、なぜ我々を執拗に追いかけるのだー⁉？」
杏「(干し芋を食べながら)そりゃ手前に戦車があったら目立つよね～。」
桃「てかそもそもお前の責任だろ！」
咆哮や地響きを立てながらなおもカメさんチームを追いかけるクレッセント。カメさんチームは騒ぎながらもなんとかみほたちあんこうチームと合流する。
みほ「ではこれより、『ぺったん作戦』を開始します。」
みほの指示により、２両の戦車はクレッセントから逃げるように走り始める。
いかにも迫力ない作戦名だが、果たしてぺったん作戦とはどんな作戦なのだろうか？
……それに、二年生のみほがなぜ三年生である生徒会を差し置いて仕切っているのであろうか？まあ、そこはとりあえず置いておこう。
クレッセントは、目から赤い破壊光線『クレスト・エンド』を放ちながらみほたちを追いかける。
２両の戦車は光線を避けながらも逃げ続ける。そんな中、車長のみほは、戦車の上部から上半身を出して様子を伺っている。
その様子はまるでクレッセントをどこかへおびき寄せているようにも見えてきた。
やがて、しばらく１０分ぐらあた走った後、両戦車右折する。
みほ「止まってください！」
みほの指示により、両戦車は停車する。そして、砲撃の準備に入る。
だが、砲撃を放つまで若干タイムラグがあった。
クレッセントはチャンスとばかりに破壊光線を放とうと目を光らせる。
と、その時、
〝バン〟　〝バン〟　〝チュドーン〟
〝ギイイイイィィ⁉？〟

突如、クレッセントは背中に何かの爆撃を受けてふと振り向く。
その背後にはなんと2両の戦車が止まっていた！
梓「待ってましたよ先輩。」
あや「ここからが作戦本番ですね。」
あゆみ「そーれやっちゃえー！」
典子「怪獣め、強烈なスパイクをお見舞いしてやるぞ！」
妙子・忍・あけび「おー！」

華「皆さん…。」

待機していたのは、バレー部チームの『アヒルさんチーム』と1年生チームの『ウサギさんチーム』であった。
たちまち前後2両ずつの戦車に挟み撃ちにされるクレッセント。みほの言うぺったん作戦とは、サンドイッチの具をぺったん挟み込むように、相手を前後から同時に攻撃しようということなのである。
実はみほは、パトロール前に怪獣の出現を予想して、その時学園に残っていたアヒルさんチームとウサギさんチームと前もって作戦の打ち合わせをしていたのである。
このようにみほは戦術立案能力や臨機応変な戦術変更能力に長けているため、皆からは信頼される存在でもあり、隊長を務められるのである。
そのスキルはまるで彼女が戦車経験者であるかのようだが…もしかすると……。
みほ「全車輌、砲撃開始！」
〝バンッ〟〝バンッ〟〝ドーン〟〝ズゴーン……〟
遂に、全車輌による一斉砲撃が始まった！
両方向からの砲撃を受けるクレッセント。砲撃を受けながらも負けじと目からの破壊光線で反撃する。
破壊光線が側で爆発し車体が揺れても、戦車はなおも砲撃を続ける。
妙子「先輩…相手も、凄いスパイクです…！」

典子「諦めるな！こんなの、強豪校の殺人スパイクに比べれば…」
〝ガターン〟
典子「うおわっ!?」
優季「頑張って！桂利奈ちゃん！あなたはやればできる子よ！」
桂利奈「アイ！」
〝ガシャーン〟
ウサギさんチーム「きゃーっ！」
クレッセントの猛反撃に、ぺったん作戦は今にも崩れようとしていた。
みほ「このままでは……アヒルさん、ウサギさん、一旦さがってください。我々あんこうがそちらに回り込みます。カメさんはそのまま砲撃を続けてください。」
柚子「分かりました。」
杏「（干し芋を食べながら）みんな頑張ってね～。」
柚子「会長も頑張ってくださいっ！」
みほ「麻子さん、怪獣に気づかれないようにアヒルさんたちのところに回り込んでください。」
麻子「はーい。」
みほたちあんこうチームは回り込みを始めた。

梓「頑張ってください先輩…。」
その時、梓は左側から誰かに肩を指で突かれるのに気づき振り向く。
肩を突いたのは、ウサギさんチームで梓の左脇という一番窓に近い所に位置している『丸山紗希』だった。
彼女はいつもぼんやりしておりあさっての方向を向いていることが多いため、しゃべることが極めて少ないのである。
そんな紗希が何かをしゃべろうとしていた。
梓「どうしたの？紗希こんな時に…、」
紗希「……鳥が……。」
梓「ん？」

先が一言喋って上を指差す。梓も同じく上を振り向くと、確かに空の彼方から鳥のような一つの物体が飛んで来ていた。
だが、その物体が近づいて来るうちに違和感を感じ始める。
梓「あれ……鳥じゃないしー！」
梓はその物体が鳥ではく巨大生物である事に気付いた。だがそれも束の間、その巨大生物が近づいてくるにつれ、それにより起こる強風が彼女たちを襲う！

〝ビュビュン、ゴゴゴゴゴゴ……〟

梓「ひゃっ！…何これ……飛ばされちゃう～！」
〝ガシャーン〟
やがて、強風に飛ばされたウサギさんチームは、アヒルさんチームと激突した。
〝ビュッ〟　〝ビュッ〟
激突のショックによりアヒルとウサギの車輌は行動不能になり、旗が突き出る。
クレッセントの後ろに回り込もうとしたあんこうチームもバランスを崩してしまう。

〝ズドーン〟

〝ギシャアアアアア‼？〟

飛んで来た巨大生物は土砂を巻き上げながら着地し咆哮を上げる。
その巨大生物は、青っぽい黒の巨体に、顎髭が生えた大きく裂けた口、瞳の無い赤く光る目、長い尻尾、そして何より大きな翼が特徴の怪獣『羽根怪獣ギコギラー』である！
驚愕するみほたち。
（ＢＧＭ…大怪獣の咆哮）
優香里「そんな、一度に二体出てくるなんて…。」

華「こんなの初めてです。」
沙織「あーもう！怪獣じゃなくていい男が続々来ればいいのに～！」
優香里「言ってる場合ですかー！」
みほ「そんな……、」
みほ（どうしよう……こんな事になるなんて思いもしてなかったから……。）
流石のみほも策が尽きてしまった。彼女たちはこれまで一度に一体という感じで怪獣たちと戦ってきたみたいであり、一度に二体襲って来るとは予想も出来ていなかったのだ。
柚子「そんな、もう一体来るなんて…、」
杏「……流石にやばいかも…。」
流石の杏も、干し芋を食べる手が止まってしまっている。
桃「えーい！そんなの関係ない！こうなったらどちらに当たってもいい。打つぞー！」
桃はややけっぱち気味になり砲撃を連発するが、ほぼ当たってなくて外してしまっている。
彼女の射撃技術はもともと低いが、今回は予想外の展開によほど取り乱しているのか、闇雲に発射した砲撃はほとんど当たらず外してしまっている。
そんなカメさんチームをあざ笑うかのように、ギコギラーは大きな翼を羽ばたかせて突風を巻き起こす！
〝ビュウウウウン〟
〝ガシャーン〟
〝ビュッ〟
杏「やーられーたー！」
強烈な突風にカメさんチームの車両は成す術なく飛ばされ建物に激突し行動不能になってしまう。
これで残ったのはみほたちあんこうチームのみとなってしまった。こんなにも早く脱落していくなんて……みほたちは怪獣たちの恐

ろしさを強く感じ始めていた。
みほ「とりあえず……カメさんは早く戦車から降りて安全な場所へ……アヒルさん、ウサギさんも早く安全なとこへ避難してください。」
みほはとりあえず脱落したチームの安全を考え指示を出した。
カメさんチームは急いで車輛から降り、アヒルさんチームもウサギさんチームを気に掛けながら比較的安全なあんこうチームの後ろ側のビルの側に移動を始める。
だが、そうしてる間にも二体の大怪獣は邪魔者がほとんど消えたとばかりに我が物顔に暴れ始める。
クレッセントは剛腕、ギコギラーは翼の突風でビルを崩し始める。
みほ「私たちの町が……、」
〝ドガーン〟　〝ガシャーン〟　〝ズドーン〟
「キャーッ!!」
大地を揺るがすような咆哮、激しい地響き、ビルやガラスの砕ける音、それにより飛び散る破片が彼女たちの恐怖をさらに煽らせる。
残ったあんこうチームも攻撃を続けるが、二体にはまるで通用してなく、二体は気にも留めずに暴れ続ける。
沙織「一体どうすれば……ん？」
その時、沙織は何かに気付く。
桂利奈「ふぇ～ん！怖いよ～！」
それは逃げる際に転んでしまい、そのまま恐怖で動けなくなって泣いているウサギさんチームの『阪口桂莉奈』の姿だった。
沙織「桂莉奈ちゃん！……みぽりんどいて！」
みほ「はっ、沙織さんどこへ⁉」
沙織は戦車から降りて桂莉奈の元へ駆け寄る。
沙織「大丈夫⁉ほら肩に手を回して…」
沙織が桂莉奈を立たせようとしたその時、
「お～っと！そのまま動くんじゃねー！」

突如、何者かに刃物のような物を突きつけられ思わず動きが止まる。
その現れた者は、妙なマスクを被った顔に、体は黒いタイツのようで胸には何やら鍵のようなマークか付いており、右腕には細長いサーベルが装着されている。
そいつはかつて『ウルトラマンレオ』の故郷『獅子座Ｌ７７星』を滅ぼした邪悪な宇宙人『サーベル暴君マグマ星人』の同族であった！
今回はあの影法師の力により、この世界を滅ぼすためにやって来たのであろうか……？
「キャーッ!!」
あんこうチームの後方から悲鳴が聞こえ、みほは振り向く。
するとそこには、鎖で束になって絞められている残りのウサギさんチームとアヒルさんチーム、カメさんチームだった！
そしてそこにはなんと、もう一人のマグマ星人がいた！
沙織たちを止めた個体は金髪に青い目、アヒルさんたちを絞めているのは銀髪に赤い目をしている。
そう、今回のマグマ星人は兄弟で攻めて来ており、青い目は兄の『ブラザーブルー』、赤い目は弟の『ブラザーレッド』なのだ。

沙織「……あんたたち何者？」
マグマ星人（ブラザーブルー）（以降：マグマＢＢ）「我々はマグマ星人。あの二体の怪獣たちも我々が引き連れた物なのだ！」
沙織「何でこんな事をするの⁉今すぐやめて！」
マグマＢＢ「そうはいかないねえ！俺たちは最近、兄弟そろってローランちゃんに振られてきたばかりなんでね、腹いせにこの町をめちゃめちゃにしてやろうと思って来たら……どうした事か、君達みたいなかわい娘ちゃんがいっぱいではないか！」
マグマ星人（ブラザーレッド）（以降：マグマＢＲ）「なあなあ兄者！こやつらローランちゃんよりずーっと可愛いじゃないっスかー！」
マグマＢＲは縛ったアヒルさんたちを自分のところに引き寄せて嫌がる彼女たちの頬を一人ずつ指で突いていく。

マグマ星人の言った事を聞いた沙織は、今も泣きじゃくる桂莉奈、怯えるアヒルさんたち、そして怪獣の蹂躙から逃げ惑う人々を見渡して怒りを感じる。
沙織「酷い……なにも腹いせでここまでする事ないじゃない！」
マグマＢＢ「うるせー！……そんなに止めてほしけりゃ俺達の女となれ。」
沙織「何ですって？」
マグマＢＢはしゃがんで沙織の顎を掴んで自身の顔に近づける。
マグマＢＢ「おめーらが俺達と結ばれ、俺達の言う通りにしてくれりゃあ許してやるよ。」

沙織「……なるわけ…ないじゃない。」

沙織は恐怖を感じながらも震える声で負けずに言う。
沙織「言っとくけどね、恋愛の男女は親分と手下の関係じゃないんだから！　それに……初恋の相手があんたみたいな最悪な人ぐらいなら死んだ方がましよ！」
マグマＢＢ「……ッ！うるせー!!」
マグマＢＢは桂莉奈を抱く沙織を突き倒す！
マグマＢＢ「抵抗するとこうだー!!」
〝ギュイーン　ギュイーン〟（↑所謂サーベルを振るう音）
マグマＢＢはサーベルを振るい、近くの鉄塔や気を瞬く間に斬り倒し、沙織の左頬すれすれのところでサーベルを止める！
サーベルをゆっくり離すと、沙織の左頬には二センチぐらいの切り傷が出来、そこから血が垂れる。
流石の沙織も恐怖で何も言えなくなっていた。
みほ「沙織さんっ！」
みほたちが沙織たちの危機に動揺している隙に、ギコギラーは口から破壊光線を放つ！
〝ドカーン〟
麻子以外のあんこうチーム「きゃあぁぁぁぁ!!」

直撃はしなかったものの間近で光線が爆発し、あんこうチームの車両はひっくり返ってしまう。
マグマＢＢ「おめーら……可愛いくせに生意気なんだよな～。」
マグマＢＲ「兄者、こやつら一度痛い目に遭わせた方がいいかもしれませんねー！」
マグマＢＢ「ふっふっふ、そうだな。その後、どの女をもらうかはゆっくり考えようではないか。」
車両は全機行動不能になり、マグマ星人たちに拘束されている……みほたちの現状は絶体絶命以外に何も無かった……。

みほ（……誰か、助けてください……神様…仏様……実在しない何かでもいいので……どうか私たちを…私たちの町を助けて！）
みほは心の中で必死で助けを求めた。多分叶うはずもないと分かっていながらも、僅かな希望を信じて願い続けた……。

だが、今そんな彼女の願いが叶いそうになっている。
みほたちから少し離れた場所まで、怪獣たちの出現に気付いたマドカたちが駆け付けて来たのだ！
マドカ「……光るスパークレンスに導かれて来たけど……あんなに壮絶な事になっているなんて……。」
暁人「おいおい、あのお嬢ちゃん達、なんかヤバくないか？」
丈司「すぐさま行く必要があるな。　いよいよか……。」
三人は戦いの時がいよいよ来たと感じ、激しい緊張を感じ始める。
破壊されていく町、そしてマグマ星人兄弟の脅しで怯えるみほたちを見つめながら……。
その時、マドカはスパークレンスを手に、数歩前に出、暁人たちもそれに気づく。

暁人「マドカ……お前、行くのか？」
マドカは深呼吸した後暁人たちの方へ振り向く。

マドカ「……僕だって怖いよ。でも……あんな奴らのために、彼女たちの笑顔を汚されてたまるか！」

マドカの熱い言葉に暁人たちは安心の表情になる。

マドカ「僕たちは選ばれたんだ……行こう！」

暁人「おうよ！」

丈司「ああ。」

マドカ「今こそ、神様のトンデモ特訓の成果を出す時だ……ファイトー!!」

暁人・丈司「いーっぱーつ!!」

三人は遂に戦う決心をした！三人はマドカをセンターに横に並び立つ。

マドカ、丈司はそれぞれスパークレンス、ショドウフォンを構える。

《ドライバーオン・プリーズ》

暁人はベルトの手形に『ドライバーオンウィザードリング』をかざす。すると光と共に本来の姿のウィザードライバーが現れる。

〝スパンッ〟

《シャバドゥビタッチヘーンシーン！　シャバドゥビタッチヘーンシーン！……》

暁とはバックルの横のレバーを、手形の意匠を持つ『ハンドオーサー』を左手側に傾くように操作し変身待機状態にする。そして音声コールが繰り返し発声される。

そして、左手の中指にウィザード（フレイムスタイル）の頭部の形状を取った変身リング『フレイムウィザードリング』を填めて構える。

丈司「ショドウフォン、一筆奏上！」

〝キッ　キッ　キュイッ　キュイッ〟

丈司はショドウフォンで受け継いだ属性のモヂカラの文字『火』を宙に書き構える。

暁人「変身！」
丈司「はっ！」
暁人は変身リングをベルトにかざし、丈司はショドウフォンを振るって通話ボタンを押し、火のモヂカラを発動させる。

《フレイム・プリーズ　ヒーヒー　ヒーヒーヒー！》

暁人は現れた火の魔法陣を潜り、丈司は火のモヂカラを身に纏ってそれぞれ姿を変える。
そして、マドカもスパークレンスを高く上げる！
マドカ「ティガー!!」
〝キャイイーン〟（↑所謂スパークレンスの発光音）
スパークレンスから溢れ出る光が3人を包んでいく！
文字が火を噴き、指輪が輝き、そして希望に満ちた光が溢れる時……今まさに3人の勇者が立ち上がる瞬間である！

暴れるクレッセントは、ひっくり返っているみほたちの戦車を鷲掴みして持ち上げる。まだ中にはみほたちが！
沙織「！みぽりん、みんな！」
沙織はみほたちの危機に気づくが、それも束の間マグマ星人にサーベルを突きつけられ動きを封じられる。
マグマＢＢ「他人より自分の心配したらどうだ？え？」
マグマＢＲ「兄者、そろそろやっちゃいましょうよ！」
マグマＢＢ「そうだな。俺たちの女になるまで、徹底的に可愛がってやんよ！」
マグマ星人兄弟はサーベルを振り上げる。沙織もウサギさんたちもほぼ諦めかけ目を瞑る。
みほたちの戦車も、徐々に上へと持ち上げられていた。
優香里「うおわー！ちょっ、何する気ですかー！」
華「私たち、もうここで終わりなの？」

麻子「もはやジ・エンドだな…。」
優香里「言ってる場合ですかー！」
遂にみほたちの戦車はクレッセントの顔の真ん前まで持ち上げられていた。もしかして食べるつもりなのだろうか⁉？

みほ（……お願い……誰か……！）

みほはなおも諦めず、心の中で強く願い続けた。だが、流石に死の恐怖を感じ始めたのか、みほを始め、涙を流す者も多数現れ始めた……。

私たち、もうここで終わりなの⁉？

が、その時！

「その涙、全て宝石に変えてやるぜ。」

突如、どこからか声が響き、何人かそれに気づく。
みほ（？この声は……？）
沙織（一体どこから……？）

《コネクト・プリーズ》
〝バン　バン　バンッ〟
次の瞬間、ある者が魔法陣のような光の中から特殊な形状の銃を取り出し数発弾を打つ。
〝ズガガガンッ〟
マグマＢＢ「⁉？ぐはっ！」
なんとその弾丸はまるで生きているかのように手前にいた沙織を避けて飛びマグマ星人（ブラザーブルー）に命中した！
弾丸の直撃を受けたマグマ星人（ブラザーブルー）は吹っ飛ぶ。
沙織「⁉？……一体何なの？」

マグマＢＲ「兄者っ⁉？」
マグマ星人（ブラザーレッド）が驚いたその時、
〝ジャキーン〟　〝ズパーン〟
マグマＢＲ「⁉？うおあっ！」
突如、ある者が刀のようなものでウサギさんチームたちを縛っていた鎖を断ち切る。それにより自由になれた彼女たちはすぐさま安全な所へと移動する。
「はっ！」
〝ズパーン〟
マグマＢＲ「ぐはっ！」
そして、その鎖を切った者は横一直線にマグマ星人（ブラザーレッド）に斬撃を決めて吹っ飛ばす！

マグマＢＢ「大丈夫か弟よ！」
マグマＢＲ「もちろんですぜ兄者！」
マグマ星人兄弟はすぐさま立ち上がり警戒態勢に入る。
そして、戸惑う彼女たちの前に二つの影が立っている。
それは見たところ人間ではないが、マグマ星人たちとは違い邪悪な感じはせず、むしろその二人の赤い輝きからは希望を感じていた。

一方はルビーの宝石を模した形状のマスクに、全身に黒いローブのような衣を着ており、そして左手には自身の頭部の形状を取った赤い指輪を填めている。
もう一方は侍のような赤いスーツに、腰に下げた刀、そして顔には『火』という文字が刻まれている。
この二人こそ、操真暁人が変身した魔法使いの英雄『仮面ライダーウィザード（フレイムスタイル）』、そして千葉丈司が変身した侍の英雄『シンケンレッド』である！

暁人「大丈夫かい？嬢ちゃんたち。」

ウィザードは沙織の方を振り向く。一緒にいる桂莉奈も泣き止んでいた。
沙織「あの……あなた達は？」
丈司「説明は後回しだ。こいつらは俺達に任せて、女子（おなご）は下がってろ。」
暁人「おいおい、そのセリフ古臭いぞ。」
丈司「〝侍の言い方〟って言ってくれ。」
二人の漫才のようなやりとりに沙織たちは自然と笑顔に戻りつつあった。

同じ頃、みほたちの乗る戦車を持ち上げたクレッセントは、光線で戦車を爆破しようと目を赤く光らせる。
その時、
〝ズドーン〟
突如、何処からか飛んで来た光弾がクレッセントに命中し、驚いたクレッセントは思わず戦車を手放してしまう。
すると、同じく何処からか飛んで来た光が落下する戦車をキャッチし地面に着地する。
その光は徐々に形を変えていき、やがて巨人の姿に変わる。そして全身を包んでいた光が徐々に消えていく。
みほはその光の巨人を戦車の窓から見上げる。徐々に姿が明らかになっていく巨人を見て何かを察し始める。
（ＢＧＭ：ティガ！）
みほ「……私の想いが……届いてくれた……。」
みほはふと笑顔を見せる。他の彼女たちも巨人を見上げる。
その巨人は戦車を下した後一回頷く。まるでみほたちに「もう大丈夫だよ。」と語り掛けているようだ。
そして巨人はゆっくりと立ち上がると、その場から跳躍して二体の怪獣の前に着地する。

赤・青紫・銀の体色に、頭部の結晶『ティガクリスタル』、胸の青い

ランプ『カラータイマー』、肩から胸にかけて付いている金と銀のプロテクターが特徴の光の巨人は、五代マドカが変身した『ウルトラマンティガ（マルチタイプ）』である！

今ここに、彼女たちの危機に三人の英雄が参上した！
三人は構えを取る。
マグマＢＢ「何なんだ貴様ら！」

暁人「俺達は……彼女たちの希望だ。」
丈司「貴様らのような外道は…俺達が斬る！」

マグマＢＲ「ほざけ～！殺りましょうぜ兄者！」
マグマＢＢ「ああ！弟よ～！」
マグマ星人兄弟は駆け始める。
マドカ「俺たちも行くぞっ！」
暁人・丈司「ああ！」
三人の勇士は構えを取り敵目掛けて駆け始める。
ウルトラマンティガＶＳクレッセント＆ギコギラー、仮面ライダーウィザードＶＳマグマ星人（ブラザーブルー）、シンケンレッドＶＳマグマ星人（ブラザーレッド）の戦いの火蓋が切って落とされる！
一方、戦車から降りたみほたちは沙織たちと合流する。
沙織「みぽりん、みんな怪我はない？」
みほ「ええ。沙織さんも、頬の傷大丈夫？」
みほは沙織にポケットティッシュを手渡す。
沙織「ええ、ありがとう。」
華「あの二人…それにあの巨人は何なんでしょう？」
みほたちは不思議に思いながらも三人の英雄を見守り始める。

（ＢＧＭ：蘇る巨人）
ティガは駆け寄りながら跳躍し、クレッセントの頭部に右の手刀を叩き込み、怯んだ隙に一回転しての水平右チョップを胸部に打ち込

む。
巨人と怪獣の戦いは、周りの地面が爆発を起こし土砂や土煙が巻き上がるほどである。
次に両手で頭部を掴んで腹部に膝蹴りを二発打ち込んだ後、そのまま横方向へと投げて地面に叩き付ける。
今度はギコギラーが背後から接近するが、ティガはすぐさまカウンターの後ろ蹴りを胸部に打ち込み、怯んだ隙に振り向き様に右回し蹴りを頭部の側面に叩き込んで吹っ飛ばす。
クレッセントはティガに突進するが、ティガはそれを跳躍して背中をチョップしつつ避け、続いて繰り出して来た右フックをしゃがんで避けると同時に腹部に右横蹴りを叩き込む。
マルチタイプはスピードとパワーのバランスが優れており、多彩な光線技と格闘術を駆使した戦いを得意としているのだ。
だが、ギコギラーは地上戦では不利と見たのか翼を羽ばたかせ空を飛ぶ。そして地上のティガ目掛けて体当たりを繰り出すが、ティガは咄嗟にそれをしゃがんで避ける。
だがその隙に背後からクレッセントの光線を受けてしまい、続けて上空からのギコギラーの光線を左肩に喰らい地面に膝を付いてしまう。
その時、ティガが状況を察知したかのように顔を上げた時、額のティガクリスタルが光を放つ。
〝キュビーン〟（↑所謂ティガクリスタルの発光音）
そしてティガは額の前で腕を交叉させる。
「んん～～～……はっ！」
〝トゥララララッ〟（↑所謂タイプチェンジ音）
交叉した両腕を左右に振り下ろした時、光を放ちながらティガの体色は赤と青紫から青紫一色に変わり体格もよりスマートになる。
ティガはスピードやテクニックに優れた俊敏形態『スカイタイプ』へとタイプチェンジした！

華「！青くなりました。」
姿を変えるティガにみほたちは驚く。

クレッセントはティガに接近し再び右フックを繰り出すが、ティガはそれを左腕で受け止めると同時に腹部に右肘を打ち込み、そのまま右腕をひねることでスピンさせて地面に叩き付ける。
その後ティガは上空に飛び立ち空を飛ぶギコギラーに挑む。
まずは追撃戦から始まり、ティガは手から『ハンドスラッシュ』を連射しつつギコギラーを飛んで追いかける。光弾はいくつかギコギラーに命中するが怯む様子はない。
ティガは更に飛ぶスピードを上げ難なくギコギラーの前方に回り込む。そして両者は組み付いて数回回転した後一旦離れる。
ギコギラーはティガ目掛けて口から光線を放つがスカイタイプであるティガはそれを難なくかわし、ギコギラーの背後に回り込んで蹴りを放つ！
蹴りが当たると同時にその部位に爆発が起こり、弱点でもある背中を攻撃されたギコギラーはたまらず地面に落下する。
スカイタイプは俊敏さを活かしたスピーディーな格闘戦や空中戦を得意としているのだ。
着地したティガはクレッセントと交戦する。

みほ「……麻子さん、戦車はまだ動かせる？」
麻子「問題ない。」
みほたちの戦車は痛手を負っていたが、奇跡的にまだ行動不能になっていなかった。
みほ「あの巨人を援護しましょう。」
皆は少しためらったが、やがて援護する事を決めた。
華「……そうですね。やりましょう。」
麻子「助けられた借りを返さないとな。」
優香里「やりましょう、西住殿。」
みほ「沙織さんは桂莉奈ちゃんの手当てをお願い。」

沙織「任せて。」
沙織を残し、みほたちは戦車に乗り込む。
みほ「では……パンツァー・フォー！」
みほの掛け声で戦車は前進する。
ギコギラーはクレッセントと交戦するティガに背後から光線を打とうとするが、背後からみほたちの戦車の砲撃を喰らい振り向く。
優香里「こっちだー！」
みほ「可能な限り避けつつ攻撃を続けてください。」
ギコギラーは反撃として光線を放ち、戦車はそれをややギリギリではあるが避けつつ砲撃を続ける。
ギコギラーは今度は翼を羽ばたかせて突風を巻き起こし吹き飛ばそうとする。このままではみほたちの戦車が危ない！

それを見たティガは、クレッセントを後ろ蹴りで後退させると、ギコギラーに駆け寄りながら両腕を額の前で交叉させて左右に振り下ろす。
〝キュビーン〟
「んんん～～～……はっ！」
〝トゥララララッ〟
ティガは今度は体色が青紫から赤一色に変わり、体格もより筋肉質になる。

ティガは、パワーや耐久力に優れた剛力形態『パワータイプ』へとタイプチェンジした！

沙織「今度は赤くなった！」
ティガは背後からギコギラーの翼を掴み、背中に右膝を当てて力一杯引っ張る！
〝ズバ　ズバ　ズバッ〟

ティガ（パワータイプ）は怪力でギコギラーの翼を引き千切った！
翼は爆発を起こしながら千切れる。
そしてギコギラーが怯んだ隙に腹部に右拳を打ち込み、そのまま持ち上げて遠方へと投げ飛ばす。

ティガはみほたちの方を向き頷く。まるで「ありがとう。」と言っているみたいである。
それを見たみほは、ティガの力になれたと実感したのか笑顔になる。

（ＢＧＭ：光を継ぐもの）
ティガは再び二体に挑む。二対一とはいえギコギラーの方は翼を失っている。勝負はもうほぼこっちのものだ！
ティガは接近しながら二体同時に腹部にパンチを決める、その後も力強い強烈なパンチ、キックを次々と決めていく。
二体も負けじと腕を振るって反撃するが、ティガはそれを難なく腕で弾き、さらに打撃を加えていく。
そしてクレッセントの右フックを左腕で受け止めると、そのまま右腕で脚を掴んで担ぎ上げ、地面に頭から落として叩きつける。
パワータイプは凄まじい怪力を活かしたパワフルな肉弾戦を得意としているのだ。

（ＢＧＭ：侍戦隊シンケンジャー）
シンケンレッドはプラキシノスコープになっている鍔が特徴の刀『シンケンマル』を肩に担いで構える。

丈司「シンケンレッド・千葉丈司、参る！」

マグマＢＲ「ほざけええええ！」
マグマＢＲが逆上して駆け寄るのに対し、シンケンレッドはシンケンマルを肩に担いだまま余裕そうに歩く。これだけでもまるで両者

の差が出ているようだ。
マグマＢＲはサーベルを振り回すが、シンケンレッドはそれを動きが読めているかのようにことごとく弾いていく。
そしてマグマＢＲの斬撃をシンケンマルで受け止めると、そのまま受け流す様に火花を散らして擦りながら接近し、やがて横一直線の斬撃を決めて吹っ飛ばす。
マグマＢＲは悔しそうに地面をサーベルで叩いて立ち上がりまた襲い掛かる。
激しいチャンバラを繰り広げる二人。しかし、戦いはシンケンレッドの方が優位に進めていた。
逆上し荒々しくサーベルを振るうマグマＢＲに対し、余裕で大胆かつ流麗な剣技でそれを撥ね返すシンケンレッド。両者の差は歴然としている。
シンケンレッドはマグマＢＲの斬撃を、背を向けたままシンケンマルで受け止め、そのまま『獅子折神』の『火』のモヂカラが折り込まれた秘伝ディスク『獅子ディスク』を装填する。そして後ろ蹴りを腹部に打ち込んでマグマＢＲを引き離す。
シンケンレッドはシンケンマルにセットした獅子ディスクを回転させる。するとディスクに描かれた駆ける獅子の模様がアニメーションになり、刀身が炎に包まれる。
丈司「火炎の舞！」
シンケンレッドは炎を帯びたシンケンマルを手にマグマＢＲに駆け寄る。炎の斬撃『火炎の舞』を決める時だ！
まずはマグマＢＲのサーベルを叩き落とした後、斜め上、そして横一直線に斬撃を決めながらすれ違い、そして上から振り下ろす斬撃を背中に決める！
炎の斬撃を連続で受けたマグマＢＲはたまらず吹っ飛び地面に転がる。
マグマＢＲ「くっ……くそっ！何故だ⁉何故俺が押されるのだー！」

丈司「教えてやろう。侍とは、裏切らない。一度守ると誓った人の事を。それに……、」
シンケンレッドはシンケンマルをマグマＢＲに突きつける。
丈司「侍たる者、か弱き女（おなご）を汚す者を、許すわけにはいかない！」
マグマＢＲ「何を小癪な～!!」
マグマＢＲは右腕から鉤爪付きのチェーンを伸ばし、シンケンマルに巻き付ける。
丈司「！くっ……。」
マグマＢＲ「ははははは！どうだ！これで剣は振るえまい!?」
丈司「……フッ。」
丈司は少し笑うと、再びディスクを回転させる。すると、シンケンマルは赤い光に包まれ徐々に大きくなっていき、巻き付いていたチェーンを破壊する。
やがてシンケンマルは、２メートル程あり幅も広く、刀身には金色に噴火する火山が描かれ噴煙に赤い『火』の文字が入っている巨大な太刀に姿を変える。
丈司「烈火大斬刀！」
これぞシンケンレッド専用の強力太刀『烈火大斬刀』である！
シンケンレッドは大きな太刀と手にマグマＢＲに駆け寄る。マグマＢＲは手からの光線で迎え撃つが、シンケンレッドは烈火大斬刀を盾のように使ってそれを防ぐ。
マグマＢＲは烈火大斬刀を掴んで止めようとするが、それでも勢いは止まらず、マグマＢＲはそのまま軽々と押されていく。
そしてその先にあった鉄塔に思い切り叩きつけられる！マグマＢＲは全身が鉄塔にめり込んで動きが取れない。
マグマＢＲ「そ…そんなっ、お、俺はここで!?」
丈司「止めだ！百火繚乱!!」
シンケンレッドは刀身に烈火を発生させ一回転しその回転力を活かして横一直線での烈火の斬撃『百火繚乱』を決める！
〝ズギャーン〟

マグマＢＲ「ぐあああっ……あ、あ…兄者～～～!!」
〝ズドーン〟
烈火の斬撃で一刀両断されたマグマＢＲは大爆発し吹き飛んだ。
シンケンレッドは爆風を背に、烈火大斬刀をシンケンマルに戻して腰に下げて凛々しく立つ。

ウィザードは専用武器『ウィザーソードガン』を手に、左手の指輪を見せるポーズで構える。
暁人「さあ、ショータイムだ！」
（ＢＧＭ：Ｌｉｆｅ　ｉｓ　ＳＨＯＷ　ＴＩＭＥ）
マグマＢＢ「弟の分まで、俺が貴様らを倒す！」
マグマＢＢはサーベルを振るいウィザードに襲い掛かる。ウィザードはそれをウィザーソードガン（ソードモード）で防ぎつつ、エクストリーム・マーシャルアーツの如く華麗な跳躍でことごとくかわしていく。
マグマＢＢは上からサーベルを振るうがウィザードはそれをウィザーソードガンで受け止め、そのまま回して離すことでバランスを崩した隙に腹部に袈裟懸け、一直線と斬撃を決め、その後後ろ回し蹴りを胸部に打ち込んで吹っ飛ばす。
マグマＢＢは怯まずサーベルを突き立て突進するが、ウィザードはそれをマグマＢＢを跳び越えることでかわす。
その後マグマＢＢは振り向き様に一直線の斬撃を放つがウィザードはそれをしゃがんでかわし、続けて繰り出して来た斬撃をウィザーソードガンで受け止めると、そのまま腹部に右横蹴りを二発決め、斜め下に振り下ろす斬撃を胸部に決めた後一回転しての後ろ蹴りを胸部に叩き込んで吹っ飛ばす。

〝スパンッ〟
《ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！　ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！……》
ウィザードはウィザードライバーのハンドオーサーを右手側に傾

くように操作し、音声コールが繰り返し発声される。
そして右手の中指に填めた魔法リングをドライバーにかざす。
《バインド・プリーズ》
まずは『バインドウィザードリング』の魔法を発動。するとマグマＢＢの周りに四つの赤い魔法陣が現れ、そこから飛び出た鎖に拘束される。
マグマＢＢ「!!くっ…な、何だこれは!?」
暁人「面白いだろう？次はこれだ。」
《ビッグ・プリーズ》
今度は『ビッグウィザードリング』の魔法の発動だ。ウィザードは手前に現れた魔法陣に右腕を突っ込む。すると、その魔法陣を透過した右腕が巨大化する。
暁人「ほい。」
〝バコーン〟
マグマＢＢ「ぐあああああっ!?」
ウィザードは、巨大化した腕でマグマＢＢを下から上空に叩き上げる。
暁人「どんどん行くぜ。」
《コピー・プリーズ》
今度は『コピーウィザードリング』の魔法を発動させる。すると、それにより現れた魔法陣がウィザードを透過し、それによりウィザードの隣にもう一人のウィザードが現れる。
暁人「「どうよ？」」
二人のウィザードは同時に指を差し、同時に発声する。どうやらコピーは本物と同じ動きをするみたいだ。
そして二人のウィザードは同時に跳躍し、上空のマグマＢＢに左右から挟み込むように同時に斬撃を決める！
暁人「「はっ！」」
〝ジャキーン〟
マグマＢＢ「ぐはっ!!」
マグマＢＢは地面に落下する。ウィザードは着地した後分身を消

滅させる。

マグマＢＢ「くそっ、何故だ……何故このマグマ星人の恋の、邪魔をするのだー!!」

マグマＢＢは逆上しウィザードに斬りかかるが、ウィザードはそれを難なく受け止め語り出す。

暁人「お前分かってねえな～。こんな物騒なモン（サーベルの事です）持ってたら、女の子が怖がるっての！」

マグマＢＢはなおも斬りかかるが、ウィザードはその斬撃を余裕で受け止め語り続ける。

暁人「それに……女の子を泣かしたり傷つけたりするような奴を、許すわけにはいかないね。…はっ！」

ウィザードは組み合う剣を一旦離し、横向きでの左足蹴りを胸に叩き込んで吹っ飛ばす。

暁人「俺が最後の希望だ！」

マグマＢＢ「くっ…ほざけええええ!!」

更に逆上したマグマＢＢはサーベルから光線を乱射するが、ウィザードはそれを地面を駆け、壁を蹴りながら避けていく。

そしてマグマＢＢ目掛けて跳びかかりながらウィザーソードガン（ソードモード）のハンドオーサーを操作し指輪をかざす。

《キャモナ・スラッシュ・シェイクハンズ！…》

《フレイム！スラッシュストライク！ヒ・ヒ・ヒ！　ヒ・ヒ・ヒ！…》

暁人「はっ！」

〝ドガーン〟　〝バリーン〟

マグマＢＢ「ぐおわっ!?」

ウィザードはすれ違い様に、刀身に炎を纏った斬撃『フレイムスラッシュ』を放ち、マグマＢＢのサーベルを破壊した！

マグマＢＢ「ばっ…バカな!?お、俺のサーベルがっ…！」

暁人「フィナーレだ！」

暁人はハンドオーサーを操作し、右手の中指に『キックストライクウィザードリング』を填めてドライバーにかざす。

《チョーイイネ！キックストライク！サイコー！》

音声コールと共に、構えを取るウィザードの足元に発生した魔法陣から炎が右足に纏われる。

そして、ウィザードはロンダート（側方倒立回転跳び１／４ひねり）をすることによって威力を増幅して空中反転し、必殺の炎の跳び蹴り『ストライクウィザード』を叩き込む！

暁人「はーっ!!」

〝ズギャーン〟

マグマＢＢ「ぐおあああああぁぁぁっ!!…い、今行くぞ…弟よ～～～!!!」

〝ズドーン〟

マグマＢＢは赤い魔法陣を浮かべ、大爆発して吹き飛んだ。

ウィザードは爆風を背に左腕の指輪を見せるポーズを決める。

暁人「ふぃ～……やったな。丈司。」

丈司「ああ。」

ウィザードはシンケンレッドと合流する。

（ＢＧＭ：ＴＡＫＥ　ＭＥ　ＨＩＧＨＥＲ）

残るは二体の怪獣だけだ！

ティガ（パワータイプ）は、クレッセントにボディブローを叩き込み、それにより相手がしゃがんだところで頭から掴み、後ろに倒れ込むように叩きつける『ブレーンバスター』を決める！

その後、ギコギラーの顔面の左側面に右拳、腹部に左横蹴りを叩き込んだ後、腹部に右拳を叩き込み、そのまま持ち上げて放り投げる！

ギコギラーは回転しながら地面に落下する。

ギコギラーはふらつきながらも立ち上がり、ティガ目掛けて渾身の

破壊光線を放つ！
ティガは体勢を立て直すと、両腕を左右から上にあげ、胸の前に高密度に集めた超高熱の光エネルギー粒子を光球にして放つパワータイプの必殺技『デラシウム光流』を放つ！
超高熱の光の光弾は破壊光線を消し飛ばしながら飛び、ギコギラーを直撃する！
ギコギラーは大爆発し粉々に砕け散った。

その後ティガは腕を額の前でクロスし振り下ろしてマルチタイプに戻る。
よろけながらも立ち上がったクレッセントはティガ目掛けて破壊光線を放つ！
ティガは両腕を腰の位置まで引き前方で交差させた後、左右に大きく広げてエネルギーを集約し、L字に組んで必殺光線『ゼペリオン光線』を放つ！
白色の超高熱光線は破壊光線を消し飛ばし、クレッセントを直撃する！
数秒光線を浴びもがき苦しんだクレッセントは断末魔と共に大爆発して吹き飛んだ。
ティガは爆風を背に振り向き雄々しく立つ。

今ここに、駆け付けた三人の英雄が悪を撃破した。
英雄たちの勝利を見た戦車少女たちは喜びの歓声を上げ喜び合う。
ティガとウィザード、シンケンレッドは見つめ合い、そして三人同時にサムズアップを決める。
そしてティガたちは、今度はみほたちの方を振り向く。
みほ「あの…ありがとうございます！」
みほのお礼の言葉を聞いたティガは頷く。まるで「みんな無事で良かった。」と言っている様だった。
ティガは眩い光に包まれ徐々に小さくなっていき、ウィザード達の元へと飛んで来る。

そして、ウィザードとシンケンレッドも赤い光に包まれる。そして、三人を包んでいた光が徐々に消えていき、やがて三人の若者が姿を現した！

暁人「んま、ざっとこんなもんか～。」

丈司「初戦にしては良くやった方だな。」

マドカ「だね。これも神様のトンデモ特訓の成果かもね。しかし、ウルトラマンになると意外と疲れるな～。」

三人の英雄たちが三人の若者になったことにみほたちは驚愕と同時に唖然とする。

沙織「……ウソ…。」

華「か…彼らは……、」

優香里「一体……？」

麻子「……。」

みほ「あ……あの、あなた達は一体……？」

困惑するみほたちを見て、丈司は言い出す。

丈司「……どうやら、まずは説明が必要みたいだな。」

暁人「ああ。そうだな。」

マドカ「……いきなりですいません。あと、援護ありがとうございます。」

今ここに、英雄の力を得た三人の若者と、戦車乗りの少女たちが出会った……！

ここから始まる物語は果たして……？

To Be Continued……

（ED：DreamRiser）

〈次回予告〉

（予告ナレーション：五代マドカ）
（予告ＢＧＭ：ウルトラマンＸ（インストルメンタル）　サビ）

破壊と殺戮のため、暴れ出した『殺し屋超獣バラバ』。
その全身の凶器がパンツァーを、そしてヒーローたちを苦しめる！
英雄三人の巨大戦力が、一つになる時が来た！

次回、ヒーローズ＆パンツァー、『強く決めたこと』

第2話『強く決めたこと』

（ＯＰ：ＴＡＫＥ　ＭＥ　ＨＩＧＨＥＲ）

〈前回までの大まかなダイジェスト〉

ヒーローに憧れるが故に、行き過ぎた正義感により命を落とした五代マドカ・操真暁人・千葉丈司の三人の若者。

彼らは神と約束をし、それぞれ英雄の力を得て危機に瀕している『ガールズ＆パンツァー』の世界へと転生される。

行きついた世界では、やはり怪獣や宇宙人が暴れており、パンツァー（戦車）を操縦して立ち向かう彼女たちは絶体絶命の危機に瀕していた！

マドカたちは彼女たちを、そして街や人々を守りたい想いで勇気を振り絞り、遂に与えられた英雄の力を開放して立ち向かう！

見事、怪獣たちを撃破したウルトラマンティガ（マドカ）、仮面ライダーウィザード（暁人）、シンケンレッド（丈司）。

そして、思いも寄らない展開に動揺しながらも安心する彼女たちの前に、三人は変身を解いて並び立った……。

遂にファーストコンタクトをしたヒーローたちと少女たち……。

〈ダイジェスト終了〉

変身を解き、西住みほたちの前に姿を現したマドカたち。

その光景にみほたちは当然ながら驚愕する。

みほ「……あの人たちが、さっきの光の巨人たち……？」

なんせ先ほど自分たちを危機から助けてくれた正に神のような存在（ヒーローたち）の正体が自分たちと同じ人間であり、しかも三人とも超絶イケメンなのだから……。

暁人「ふぃ～……一応初戦、決まったな。」

丈司「んま、こんなもんだろう。」

マドカ「何とかなったって感じかな。」
丈司「しかし、この先どうするんだ？」
暁人「あ、そうか。初めて嬢ちゃんたちとのご対面だし。」
マドカ「…て言うか僕たち、彼女たちの前で堂々と変身を解いちゃったよね……？」

暁人・丈司「あ！」

マドカ・暁人・丈司（しいいいいまったあああぁぁぁぁぁ～！）

そう、ヒーロー、特にウルトラマンは、他の者には正体を知られてはいけないはずなのだが、マドカたちは当たり前のようにみほたちの目の前で変身を解いてしまったのだ。
初戦による興奮からか、それともただの勢いからなのだろうか？
……とにかく三人は、無意識にやってしまったしくじりに頭を抱える。

だが、そんなマドカたちにお構いなしとばかりに、みほたちがまるで餌に向かって駆けて来るうさぎの大群のように一斉に駆け寄り始める！

マドカ「うわぉ!?」

そして一斉にマドカたちに問いかけ始める！
梓「あ、あの、あなた達は誰ですか!?」
あや「さっきの姿は何なんですか!?」
桂利奈「とてもかっこ良かったです～！」
妙子「あの姿にあの力は一体!?」
桃「怪しい……どういう事かじっくり説明してもらおうか？」
彼女たちの問いかけの雨あられが降りかかりマドカたちは困惑する。

マドカ「ストップストップ！みんな一旦落ち着いて～!!」

約１０分後、彼女たちの問い詰めがようやく静まったところでマドカたちは、落ち着いて信じられないような自分たちの真実を語り始めた。

自分たちは一度死んでること、そして転生でこの世界に来たこと、そして、ヒーローの力を持ってること……。

マドカたちの話を聞いたみほたちは、やはり信じられないような表情をしていた。

杏「（干し芋を食べながら）その話……マジか？」

暁人「ああ。」

桃「マジで？」

暁人「マジだ。」

柚子「見た感じ嘘を言う表情ではありませんしね。」

華「信じられませんね……。」

優花里「まるで神からの恵みです！」

マドカ「…まあ、実際神に転生させてもらって来たからね…。」

沙織「あ、あの！あなた達は元の世界ではモテてたのですか!?」

麻子「今それを聞くか？」

沙織「だって気になるじゃ～ん！こんなにもイケメンだし、スタイルも良いし～…」

丈司「まあ、女（おなご）は強い男に惹かれるものだからな。」

暁人「そりゃあもう、毎日女子たちのラブレターの返事が大変だったんだから～。」

マドカ「まあ、毎日女子から黄色い声を掛けられて大変だったけど

ね。」

……どうやらモテてたのは真（まこと）だったみたいだ（笑）

忍「それにしても良いがたいしてるわね～。」

あけび「スポーツとか結構出来そう！」

典子「あの、良かったら一緒にバレーボールしませんか？」

暁人「お？いいね。喜んで。」

丈司「暁人はただ女と遊びたいだけだろ？」

暁人「んなっ!!? バッ！…なに人を女ったらしみたいに言ってんだよ～！」

マドカ「案外ホントの事じゃないのかな？」

暁人「うおーい！マドカまで～!?」

いつの間にか、いつものムードになったマドカたちを可笑しそうに笑いながらみほたちは見つめる。

マドカたちとみほたちは、互いに気付かないうちに打ち解け始めているのであろうか……？

マドカ「……ちょっとお願いがあるんだけど……。」

みほ「……何ですか？」

マドカ「出来たら僕たちがヒーローである事や、別の世界から転生してきた事は、僕たちと君たちだけの秘密にしてくれないかな？」

マドカの提案にみほたちはふと戸惑う。

華「それはどうしてですか？」

暁人「俺たちがヒーローである事が色んな人に知られると、色々と厄介なことになるからね。」

丈司「人間たちはヒーローの存在を知った瞬間、それに頼りっきりになる傾向があるし、たまに強大な力を持ってると言う事で警戒する者も現れるからな。」

マドカ「この世界は今まで君たちで守って来たんだよね？　その名

誉を、僕たちのヒーローの力を知られることで下げる訳にはいかないなとも思ってね。」
マドカたちの想いを聞いたみほたちは少し考え悩んだ後、顔を上げて決めた。
みほ「分かりました。　私たちだけの秘密にしましょう。」
沙織「彼氏との付き合いは、すぐ周りに知らせちゃいけないとも言うしね。」
華「ちょっと違う気がしますが……秘密は絶対守ります。」
優花里「お互い頑張りましょう！」
麻子「特におばあに知られたら色々厄介な事になりそうだしな。」
みほたちの言葉にマドカたちは嬉しそうな表情になる。
マドカ「ありがとう……よろしくね。」
みほ「……はい。此方こそ、よろしくお願いします。」
マドカとみほは笑顔で握手を交わした。
今後も共に戦っていくと言う誓いの握手を……。
……だが、その中でみほは、ひっそりと固い笑顔になっていた……。

その後もマドカたちはみほたちとある程度話し、近くの運動場でバレーボールなどをして遊んだ後別れた。
別れる頃にはもう日が沈み始め夕暮れ時になっていた。
暁人「いや～楽しかった。　今思うと、彼女たちを助けてホントに良かったな。」
丈司「ああ。てか、か弱き女（おなご）を助けるのが侍として当ぜ…」
暁人「あーもう！丈司ったらそればっかなんだから～。お堅いお堅い。」

マドカ「僕たちはヒーローの力を得た〝選ばれし者〟だからね……今後も彼女たちのために頑張ろうね！」
丈司「ああ。」
暁人「おうよ！」

と、その時、

???「あ、あの！」

突如、後ろから少女の話しかける声が聞こえて三人は振り向く。

そこに立っていたのは西住みほだった。

暁人「どうしたんだい？みほちゃん。」
マドカ「何か話でも？」
みほは緊張からか、息を吸って勇気を振り絞る様に話し始める。

みほ「あの……さっきは本当に、ありがとうございました！（深く礼）」

みほが改めて礼を言う事にマドカたちは少し困惑する。

みほ「あの時あなた達が助けてくれなかったら私たち、完全に終わってました……。
あんな状況までに追い込まれたのは初めてでした……ホントに、何てお礼を言えばいいか……。」
みほは少し俯き、少し涙声で話していた。

暁人「……今までにない…ピンチだったのか？」
マドカ「今までは、そういう事無かったの？」

みほはどこか暗い表情を少し上げて語り出した。
マドカたちが来る前までの、自分たちのこれまでの戦いなどの事を。

黒い謎の影法師が上空に現れた日から、世界各地で怪獣たちが突如現れ暴れ始めたと言う。
それにより、日本戦車連盟などの判断により、長らく封じられていた戦車道を復活せざるを得なくなり、彼女たちも戦わざるを得なくなってしまったと言う。

戸惑いながらも、みほたち選ばれた少女たちは戦車を駆使して突如現れた怪獣たちに立ち向かっていった。
最初は等身大の小怪獣ばかりで、当てさえすれば倒せるものだったのでそこまで手こずることは無かった。
しかし戦いを繰り返し、日時が過ぎていくうちに等身大以上、十メートル以上と段々と怪獣の大きさが増し、それに比例するように強さも増していき、、、
やがては四十～五十メートル以上の怪獣が現れる様になり彼女たちだけでは倒せない怪獣も増えていき、ギリギリの戦いや取り逃がしを続けていく内に希望を失いかけていた。

みほ「そして今日、初めて五十メートル大の怪獣が二体同時に現れて……私たちは、もういよいよ終わりかと思いました。そしたら、あなた達が現れて……
正に神の様でした。　まるで私たちを絶望の淵から救いに来てくれた、神様のように……」
みほは遂に嬉しさや、辛さのフラッシュバックによって抑え切れなくなり、その場ですすり泣きを始める。

暁人はみほの元に歩み寄り、俯く青の頭を撫で始める。
暁人「そうか……俺らが来る前から、一生懸命頑張ってたんだな。

辛かったんだな。　よしよし……。」

暁人は慰めのつもりでやっているのだろうが、、、

丈司「暁人…お前ただ女の子の頭を撫でたいだけだろ？」

暁人「バッ!?!……なに人を「女ったらし」みたいに言ってんだよ!?」

丈司のからかい交じりの言葉に暁人は少し慌てて顔を赤らめて突っ込む。

マドカ「みたいにっていうか……実際そうみたいな感じだし……。」

暁人「ぅおーい！マドカまでー!?」

いつの間にか、泣いてるみほをそっちのけでマドカたちはいつものやり取りに戻ってしまっていた。

彼らのよくやる漫才のようなやり取りは、泣く子も黙るならぬ泣く子も笑うモノである。

しかし、みほは彼らのやり取りを目の当たりにしても、泣いてる表情を変える様子が無い。

先ほど話した件以外にも、何か辛い事でもあったのだろうか……。

それに気づいたマドカはみほに話しかける。

マドカ「他にも何か、辛い事でもあったの？」

それを聞いたみほは一旦泣き止み、重い口を開くように話し始める。

みほ「……実は……私は特にほぼ強制的に戦車道の攻撃部隊に入らされて……。」

マドカ「えっ!?」
暁人「何と!?」
丈司「何…だと?」
みほの思わぬ告白に三人は驚いた。

暁人「何で君みたいな淑やかな嬢ちゃんが無理矢理戦車なんかに?」
マドカ「無理矢理なんて……何か聞こえ悪いけど……。」

みほは更に驚きの真実を話した。
なんでも彼女は大洗女子学園唯一の戦車経験者だと言うのだ!

三人は更に驚愕する。
マドカ・暁人・丈司「なぁぁぁあにいいいいいいいい!!?」
暁人「っておい、夜中だぞ。（口に一指し指を当てて）しーっ、しーっ……。」
丈司「しかしそれは驚いた。　何故に君みたいな女子（おなご）が戦車を?」
マドカ「この世界の学園は戦車道は科目の一つだとおっちゃんから聞いたけど……もしかしてみほちゃん、過去に凄い戦歴を残してるのかな?」
暁人「様々な激戦を潜り抜け戦い抜いてきちゃったり?　くう～しびれるねぇ～。」
みほ「い、いや…そうじゃなくて……。」
暁人「じゃあ何でなのさ?」

みほ「……その……実は私の家は、代々戦車乗りの家系で……私が前にいた学校は、怪獣が現れる前から戦車道をやっていたの。」

マドカ「そうなのか。」

みほ「でも、あまりいい思い出が無くて……私、戦車を避けてこの学園に来たのに……。」
暁人「そうかー、おっちゃんから君は大洗女子学園の戦車道の隊長みたいなことを聞いたけど、まさかそういう辛い事情があったとはな……。」
丈司「現代は女子（おなご）も苦労して戦う目に合うとは……時代も変わったもんだな。」
暁人「お前さあ、（歩み寄って丈司の肩に手を置いて） 昔の考えに捕らわれ過ぎだ。」
丈司「〝侍の考え〟と言ってくれ！」

暁人と丈司はみほの事情を聞いて同情しつつもついいつものやり取りに戻ってしまっている。
その間にマドカが俯くみほに歩み寄り頭に手を置く。
マドカ「もう、泣かなくていいよ。」
みほ「え？」
マドカ「君たちが……特に君がそんなに苦労していたなんて……これで俺たちはより強く決心できたよ。」
みほ「…何をですか？」

マドカ「……俺たちがヒーローとして、君たちを命にかけてでも守り抜くことを。」

マドカは、いや、マドカたちは、想像以上に戦車道での戦いに辛い思いをしているみほたちの事を知り、自分たちが彼女たちを命に掛けてでも悪から守り抜き、絶対に死なせない事を強く決心したのだった。
みほは嬉しい顔になりそうながらもまた暗い表情で、
みほ「ありがとうございます……今まで友達以外に私の事をここまで思ってくれる人はほとんど居なかったし、お母さんもお姉ちゃんも、家元だから戦車やるのが当然みたいな考えだし……まああの二

人は才能あるからいいんだけど……。
ダメな私はたまにドジばかりで、こんな私が隊長として今後どこまで戦っていけるかと自身を無くしちゃうと気があって……。」
マドカはみほの肩を掴んで語り掛ける。
マドカ「大丈夫！俺たちは君の気持が痛いほど分かるから！……もし辛くなったり、どうしようもなくなったら、いつでも声を掛けて。俺たちが、力になってあげる。」

その言葉を聞いたみほは、今度は嬉しさから再び泣き出しマドカに縋り付く。

暁人「ったくマドカったら～抜け駆けしやがって……。」
丈司「お前は女しか興味ないのかよ。」
暁人「（頬を赤らめて）何を言う！可愛い女の子を守りたいからこそだよ！」
そう言うと暁人も慌ててみほの元に。
暁人「君みたいな可愛らしい女の子たちの綺麗な顔を、汚させるわけにはいかないからね。
もし君たちが涙を流しそうになったら、俺が、全て宝石に変えてやるぜ。」
丈司「それを言うなら「俺たちが」だろ？
必要ならば、俺たち侍はいざ行く。君たちの、その命を守るためにな。」
マドカ「あの…僕は侍じゃなくて光の巨人ですから……。」
暁人「俺は魔法使いだし。」
丈司「侍もヒーローみたいなもん！別に良いだろ？」
マドカ・暁人「いや良くないよ！」
またしてもマドカたちはいつものやり取りに。
だが、そうした光景を見ているみほは、自然と僅かに笑顔が戻っていた。
丈司「お、いいぞ。その笑顔だ。」

暁人「やっぱ女の子は笑ってる方が可愛いね～。」
マドカ「僕たちがいつまでも守るよ。その微笑を。」
みほ「はい！　これからも、よろしくお願いします！（深く礼）」
暁人「ま、良いって事よ！」

すると、丈司はみほにある事を問う。
丈司「ところで、君を無理矢理戦車道に入れたのは一体誰なんだ？」
みほ「それは……生徒会の人たちです。」
暁人「生徒会って、確か亀の絵が描かれた戦車に乗ってた、あの娘たちか？」
みほ「ええ。それで、強要する生徒会に沙織さんと華さんが必死になって抗議してくれて……それを見た私は私の事を思ってる人がいる事が嬉しくて……
その思いに触れた私は、戦車道をやろうと決めたんです。」
丈司「そうか……友達の想いに触れて決心するとは、立派だぞ。」
みほ「ありがとうございます。」
丈司は侍精神故か、やや上から目線でみほを褒めるが、みほはそれに素直に礼を言う。

……だが、一方で丈司の心中では……、

丈司（ったく……こんないたいけな娘に冷たくする母と姉、そして強引という乱暴な手段を取る生徒会……この世界の女子（おなご）は心が汚い奴もいるもんだ……。）

何やら複雑な心境を抱いていた……。

マドカ「さて、出会って仲良くなった記念だし、何かしない？」
マドカは提案する。
暁人「お、いいね～。俺たちの豪邸でパーってやっちゃう？」
丈司「いいかもな。」

みほ「マドカさんたちの住んでるところですか？行ってみたいです！」
マドカ「賛成だね。」
かくして、マドカたちはみほを自分たちの豪邸に招待することにした。

と、その時、

沙織「私たちも一緒に良い？」

声のする方に振り向いてみたら、そこにはいつの間にか来ていた沙織、華、優花里、麻子の姿があった。
みほ「沙織さん、みんな。」
沙織「合コンは、男女が同じ人数の方が盛り上がるからね。」
華「正確に、私たち女子の方が多いですけどね。」
暁人「お、みほちゃんのお友達か。　いいぜ。」
丈司「人数は少しでも多い方が楽しいからな。」
マドカ「豪邸は広いから、全員余裕で入れるよ。」
沙織「やったー！　かっこいい男と一緒になれるなんていつ振りかな～？」
優花里「ヒーローたちの住んでる家なんてワクワクですー！」
麻子「遅くなるのなら勝手に寝るけどいいか？」
沙織「麻子ったら～。」
マドカ「あははは……僕らは構わないよ。　なんなら泊まってもいいから。」
沙織「本当に？　わあ～まるで彼氏とホントにデートしてるみたいー。」
華「沙織さんったら…ではお言葉に甘えて、お世話になります。」
優花里「明日は日曜だし、丁度良いですね！」
みほ「では、お世話になります。」
丈司「おう。色々話そうな。君たちの戦車道についてもっと詳しく

知りたいし。」
暁人「俺たちヒーローについてもたっぷり聞かせちゃるよ。」
マドカ「それじゃ、行こっか。」

マドカたちは、みほたちあんこうチームを連れて自分たちの家へと連れて帰って行った……。
みほたちの中の一部には、荷物を取ったり親に話すためにいったん家に帰る者もいた。

だが、そんなマドカたちの様子を遠くの夜空から一つの影が見つめていた。
全ての元凶である『影法師』の一人である！
影法師はマドカたちを見て不気味に笑うような仕草を見せた後、夜の空へと飛びながら姿を消していった。
その姿は夜空の暗さや月の光も含めてまるでゴーストの様であった。

ようやくマドカたちの豪邸にみほたち一同が揃った。
みほたちは豪邸に入った瞬間驚愕する！

玄関だけでもかなりの広さなのだ！
さらに一階だけでも浴室除いて部屋が四つあり、二回もただっ広い寝室に部屋が四つ（そのうち三つはそれぞれマドカたちの個室でさらにそれぞれテレビまで着いている！）あるのだ！
みほ「すごい……！」
優花里「とてもリッチな家じゃないですかー！」
沙織「いいな～！私も将来はこんな家に住みたい！」
華「一晩お邪魔します。」
麻子「……お腹空いた。」

マドカ「まあ今夜はゆっくりしていってよ。」

暁人「それでは、お席の方へご案内いたしまーす！」
丈司「ファミレスじゃないんだから。」
暁人「いいじゃねーか。雰囲気だよ雰囲気！」
マドカたち三人は、みほたち五人を一番広い台所付きの部屋へと案内した。

それから八人は色んなことをして楽しんだ。
料理はマドカと沙織が合同で作った。
因みにマドカは元の世界では大学生で一人暮らしをしていたため料理も得意である。
……だが、大抵作るのは彼の好物のオムレツが多いのだが（笑）
更に料理を作るとき、最初は丈司が作ろうとしたのだが、どうした事かマドカたちが途中で慌てて止めた。
なんでも、皮も剥かずに切った野菜をそのまま鍋に放り込んだり、固い南瓜を切るのになんとシンケンマルを使ったりなど、その料理の腕は壊滅的だったために慌てて止めたんだとか……。
実はマドカと暁人は幼馴染だけあって、丈司の壊滅的な料理のド下手さは知っており、前世で生きてた時もこれまでも彼の手料理を食っては一晩中寝込むなど散々苦しめられてきたんだとか……。
なので、丈司が料理を作る際、マドカは思わず「最大の危機だ…。」と呟いたんだとか……汗
結果的に、マドカと沙織の所謂〝料理できる組〟が引き受けたことにより、事なきを得たのだった。

他にもヒーローや戦車道、学校の事など、互いの事を話し合ったり、トランプなどをして楽しんだ。
その後の入浴では、温泉のように男女別であったため、男子女子それぞれ分かれて入り同性だけのトークを楽しんだとか。
因みに中もまるで温泉の様であり、打たせ湯やサウナ、更には露天風呂まで付いていたのだ！

ところが、マドカたちは入浴していて、ある事に疑問感じていた。
それは、何故自分たちの住む豪邸で、女湯があるのだろうか？
と言う事である。
だが、「今回みたいに女の子を泊める時の為」と自分らなりに答えを出し、考えるのを止めて風呂から上がった。

そして夜も更け、そろそろ寝る時間になった頃、丈司は華と一緒にベランダで星が輝く夜空を見上げながら話し合っていた。
みほの境遇の事である。

丈司「戦車の家元で、しかも引っ越し先でも戦車を強要される……相当苦労してるんだなと俺たちは痛感した。」
華「私も初めて知った時は心が揺れました。」
丈司「なぜだ？」
華「私も華道の家元なので、西住さんの気持ちが痛いほど分かったのです。」
丈司「そうか、お前も家元の娘だったとはな。　実は俺も、剣道の家元なんだ。」
華「あら、同じですね。」
丈司「そうだな。」
丈司と華は笑い合う。
どうやら侍主義の丈司は、淑やかな大和撫子の華と早くも気が合ったみたいである。
それにしても丈司は剣道の家元だったとは……どうりでシンケンレッドを選び、剣さばきも流れるようで力強いワケである。
華「家元で育った私は、五十鈴流に準じた可憐で清楚な花を生けて来ました。
でも私、西住さんの影響で戦車道をやってみて思ったのです。もっと力強い華を生けたいと。
……でも、お母様が……。」
丈司「？どうした？」

華は詳細を話し始める。
華はこれまで五十鈴流に準じた花を生けて来ており、母・五十鈴百合（いすずゆり）にも評価されていたのだが、彼女自身は自分の生ける花に行き詰まりを感じていた。
そこで戦車道を通じて、怪獣から世界を守ると同時に、自身の花に力強さを取り入れたいと考えたことで戦車道を始めたと言う。
だが、そのことが原因で、鉄と油の臭いを嫌い、戦車道を粗野と偏見を持つ母から勘当されてしまったのだ。

華の事情を知った丈司は、流石に驚きの色を隠せなかった。
丈司「……そうか……お前も家元が故に、苦労してんだな。」
華「ええ。　でも、いつかお母様を説得させる。私はそう決めました。」
丈司「ふっ、そうか。　現代は、女子（おなご）も強くなったもんだな。」
華「ふふふ、お侍さんも変わらず強いですわね。」
丈司と華は再び笑い合う。
丈司「絶対に守り抜いてやるからな。　女子（おなご）を守るのは、侍として当然の事だし。」
華「相変わらず古典的ですわね。　では、よろしくお願いいたします。」

沙織「華ーそろそろ寝よっか。」
暁人「丈司も来いよ。」
華「では、行きましょうか。」
丈司「ああ。」
暁人と沙織の呼ぶ声が聞こえ、丈司と華は寝室へと入って行った。

早くも心を開き合い仲良くなったマドカたち英雄ボーイズとみほたち戦車ガールズ。

彼らの戦いは今後如何なるものになるのだろうか、、？
これは楽しみな所である。

一方の丈司も、若干侍思考な故に、様々な性格の女が存在する世界にどこか複雑な心境を抱いている……。
彼が今後彼女らとどう関わっていくかも注目であろうか……？

因みに余談だが、マドカたちは自分達の変身アイテム等の力の一部をみほたちに見せており、その際も暁人はうっかりスメルウィザードリングを使ってしまったり、
丈司がそれを吹き飛ばそうと同時にショドウフォンでモヂカラを見せようとしてうっかり『風』のモヂカラを発動させたことによりみほたちのスカートが捲れてしまったり、
マドカがスパークレンスのガオディクションで悪意は無いものの女子達を解析しようとすると言う軽くデリカシーに欠ける事をしようとしたりしたんだとか……笑
やはり男子と女子が付き合うには、注意を払わなければならないな（今回についてはそういう問題ではないと思うが……笑）。

そして静かな夜が明けて日が昇り始めたばかりの朝6時半頃、
いち早く起きていた丈司は豪邸を出てすぐの砂浜で早朝の空気を吸いながら朝の街や海を眺めていた。
丈司「（背伸びをしながら）ぷはぁ～今日も良き夜明けぜよ。さて、今日も一日頑張りますか。」
華「ふふ、朝から気合入ってますね。」
丈司は声のする方を振り向く。そこには自身に続いて起きて来た華の姿があった。
丈司「おう、華も起きたのか。」
華「わたくし、早起きに慣れていまして。」
丈司「そっか。」

華「それに……昨日丈司さんと話して改めて強く決めたのです。お母様の期待を裏切ってまで始めた戦車道ですから、その分一生懸命頑張って敵を倒し、同時にお母様を納得させると。」

丈司「ふっ、ホントに芯が強いな。」

丈司と華は笑顔で見つめ合う。

……だが、その一方で丈司は心中で、

丈司（野蛮だの不格好だの鉄くずになってしまえだの汚い言い方で戦車道を卑下した心が汚い女（おなご）のために、頑張る必要あるのか……？）

と、華の母に複雑な心境を抱いていた……。

華（……お母様……。）

その一方で、華はふと母の事を思っていた……。

そんな同じ頃、そんな華の母・五十鈴百合（いすずゆり）は、五十鈴家の奉公人・新三郎（しんざぶろう）と共に、朝の散歩に出かけていた。

……と言っても、正確には新三郎が、百合が乗った人力車を引いて歩いているため、散歩と言えるかは少し迷いがあるが笑

新三郎「奥様、どうです？今日の夜明けは。」

百合「うん、今日もいい天気になりますわね。」

二人とも日が無事に昇る様子から、今日もいい天気になると確信した。

新三郎「ちょっとこの辺で景色でも眺めましょうよ。」

百合「ええ、そうですね。」

新三郎はいったん人力車を止めて百合はそこから降りる。そして、二人で海の景色を眺め始める。

どこまでも続くかのように広く、荒れることなく一直線に広がる海

面は、昇る日の光でオレンジ色に光っていた。
そのいつもと変わらぬ夜明けの景色を二人は眺めていた。

新三郎「今日一日、平和に終わるといいですね。」
百合「ええ…昨日あの物騒な事件が起こった後ですからね。
それにあの巨人……彼の方は一体何者なのでしょうね。」
新三郎「そこは分かりませんが…凄かったですね！　現れた怪獣二体を瞬く間にやっつけてしまったのですから！」
百合「…ええ……。」
百合は、昨日起こった事件、そして現れた光の巨人（ウルトラマンティガ）のことが少し気になっていたが、それよりも気になっていることがあった。

娘の華の事である。

突き放したとはいえ、自身の反対を押し切ってまで戦車道に入ったわけなのだから、母親だけにそんな娘が常に心配なのである。
華の事を思う百合は、少し先に見える学園艦を見つめながら少し深刻そうな表情を浮かべる。
それに気づいた新三郎が声を掛ける。
新三郎「お嬢の事なら大丈夫。きっと上手くやってますよ。」
百合「でも……花を生ける繊細な手で、あんな危険な戦車道に…。」
新三郎「お嬢には仲間がいます。きっと上手くやってますよ。
それに、あの巨人が、またお嬢たちを救ってくれます。」
娘の華を心配する百合を、新三郎は前向きな言葉で励ましていた。

同じ頃、
華「……っくしゅんっ？」
華は不意にくしゃみをしてしまった。
丈司「？寒いのか？」

華「い、いえ、大丈夫です。　きっと誰か、私の噂をしてるのですよ。」
くしゃみをした事を気にかける丈司に、華は冗談交じりで返事をした。
丈司「春とはいえ、この時期はまだ朝と夜は寒いからな……ほら。」
丈司はそう言うと、自身が羽織っていた薄い上着を華にかぶせる。
華「……ありがとうございます。」
華は笑顔で一礼してお礼を言った。
丈司「律儀だなあ…侍として当然の事をしたまでだよ。」
丈司は照れ笑いも含めて言い、丈司と華は笑顔で笑い合う。

暁人「ヒューヒュー！お前ら、な～にイチャついてんだよ。」

突然暁人のからかう声が聞こえ、丈司と華は驚いて振り向く。
そこには暁人の他にマドカ、みほ、優花里も来ていた。
マドカ「丈司の知られざる瞬間、目撃だね。」
みほ「いつの間にかそんなに仲良くなってたんですね。」
優花里「武部殿が見たら嫉妬しますよー華殿。」
暁人「ヒューヒュー！」
丈司「おっ⁉？、おまっ……あのなあ、勘違いしてるようだがなあ、俺と華はたまたま起きるタイミングが同じだっただけで別に口説くとかそんなつもりｄ…」
暁人「まあまあ照れんなって。恥じる事はない。お前も俺と同じでそろそろコレ（小指を立てる）が欲しいと思ってたんだろ？　上着まで被せちゃっｔ…」
丈司「寒そうにしてる女（おなご）に親切にして何が悪いっ⁉？言っとくがなあ！俺はただ侍として女（おなご）に当然の事をしたまでで…」
…とまあ、こんな感じで暁人が丈司をおちょくり、丈司がちょっと照れ気味で必死に否定するという言い合いが始まってしまい、みほと優花里は少し笑いながらそれを見つめ、華も、幸い（？）何の事か分

かっていないようであったが、やり取りの面白さに口元に手を当てて笑っていた。

暁人たちが来た事で一気に明るくなった雰囲気。それに同調するように、日が昇る高さも高くなっていき、街を照らす光も、朝焼けから昼間のような明るさへと変わっていく。

言い合う暁人たちを他所に、マドカはみほに話しかける。
マドカ「そう言えば、あとの二人は？」
みほ「ああ、沙織さんは麻子さんを起こしに行ってます。」
マドカ「そうか。朝に弱い子は大変だね。」
マドカは笑顔で返した後、数歩砂浜の方へと歩みを進めて止まる。そして胸元からスパークレンスを取り出す。

マドカ「静かに朝焼けが大地を包む、いつもと変わらぬ夜明け！
そんな今日一日を解析してもらいますか。」

そう言うとマドカはスパークレンスの側面のトリガーを引き、エクスデバイザー及びＸｉｏデバイザーでもおなじみの解析機能・ガオディクションを起動させる。

〝ピルルピルピル〟

《ガオディクションを起動します。４月５日、解析中》

このように、このスパークレンスのガオディクションは怪獣のみならず、街や人、さらには一日の事までも解析できるのである！
これもある意味チートな機能である。
マドカはこの機能で、始まったばかりの今日一日の事を解析しているのだ。正に、天気予報ならぬ一日予報である（笑）

〝ピルルピルピルピル〟

マドカ「お、きたきた～。」

《解析完了しました。

凶器、邪悪、接近》

……？

マドカ「……これは一体……？」

またしても不吉なワードが並べられ、マドカは表情を少し変えてスパークレンスを見つめる。

マドカ（……今日もまた、何かが起こるという事なのか……？）

暁人「おーいマドカ！そろそろ朝食にしないか？　麻子ちゃんも起きたことだし。」

マドカ「！え？　……ああ。そうだね。」

暁人の呼ぶ声を聞いたマドカはとりあえず考えるのを止めてスパークレンスを胸元にしまい、暁人たちと一緒に豪邸の中に入って行った。

しかし、先ほどのスパークレンスからの不吉なワード……今日も何かが起ころうとしているのは間違いないであろう。

そしてその不吉な予感は、見事に当たろうとしていた。

新三郎「さあ、奥様、そろそろ行きますか。」

百合「ええ。帰って1日のはじめの花でも生けましょうか。」

夜明けの景色を眺めた後、帰ることを決めた2人。

百合は傘を畳んで人力車に戻って座り込む。
新三郎「それじゃ、行きますよ奥様。」
新三郎が人力車を引こうとした、

その時、

百合「はっ、あれは何？」
百合が何かに気付いたのか、新三郎も指差す方を振り向く。

そこには数十メートル先に何やらオーロラの様な物が現れるが、色は灰色のようなものでそれはまるで不気味なものである。
そしてそのオーロラが段々と具現化していき、やがて巨大な生物のようなものへと変わった！
若干透けてはいるが、その姿は悪魔と牛を合わせたように刺々しく、右手が鉄球、左手がカマとなっており、更に頭部には剣が付いているなど、見るだけで強烈な殺気がヒシヒシと伝わる恐ろしい外見の怪物である。

〝ガンガンギン〟

透けた状態で現れた巨大不明生物は甲高い咆哮を上げる。

百合「何かしら!?あれ…」
突如現れた得体の知れない生物を見上げる百合は口を押さえて驚く。
新三郎も驚きを隠せない表情で見上げていた。
新三郎「また怪獣ですね……奥様！早く行きますよ！そして大洗戦車道に連絡を…」

新三郎が急いで人力車を引いて走ろうとしたその時、その巨大不明生物は新三郎たちに気付いて視線を向ける。

〝ギエエエイイィィィン〟

そして再度咆哮を上げて右手の鉄球を突き出すと、鉄球の先端が伸びていき、瞬く間に人力車を絡めてしまった！

百合「きゃあっ!!?」

新三郎「うわっ！　おっ、奥様ー!!」

人力車に乗っている百合は悲鳴を上げて恐怖で固まり、人力車を引こうとした新三郎は吹っ飛ばされるがすぐさま起き上がり、百合を助け出そうと必死に縋り付く。

百合「新三郎！早く逃げなさい！」

新三郎「で、でも奥様！…」

百合「いいから！このままじゃ死にますよ！」

百合は自信を助けようとする新三郎の身を案じ突き飛ばし、新三郎は少し離れたところまで吹っ飛ぶ。

〝ガシャーン〟

百合「きゃあああああーっ!!」

〝ドガシャーン〟

新三郎が呆然と見る中、遂に鉄球の鞭に絡められた人力車は乗っている百合ごと空高くかち上げられ、地面に激突して大破してしまった！

人力車を破壊した後、その巨大不明生物の透けた体はオーロラのように揺らぎ始め、やがて姿を消してしまった……。

新三郎「奥様ーっ!!」

新三郎は急いでバラバラになった人力車の方へと駆け寄る。

新三郎「奥様っ！　奥様っ!?　奥様ーーーっ!!」
新三郎は頭から血を流して横たわる百合の体を揺すりながら必死に呼びかけるが、意識を失っているのか、ピクリとも動かず返事をすることも無かった……。

突如訪れた悲劇……この事を娘の華は、まだ知ることは無かった……。

一方のマドカたちはというと、みほたちと朝食を済ませて食器などの片づけを始めようとしていた。
マドカ「あとは僕たちがやるから、みほちゃんたちは帰ってもいいよ。」
みほ「今回はどうも、ありがとうございました。」
沙織「とても楽しかったよ。男に泊めてもらうの初めてだったし！」
沙織は特に嬉しそうだった。
優花里「今度、私たちの学校に遊びに来てください。」
麻子「待ってるぞ。」
暁人「ああ、もちろん！　魔法使いはいつでも飛んでくぜ！」
丈司「暁人、お前やけに嬉しそうだな。」
暁人「べ!?、別にっ！まだ学校に入った事無いから楽しみなだけだ！」
暁人は若干頬を赤らめて言い訳をし、マドカたちはそれを見て笑い合う。

華「ふふ、ホントに賑やかな方たちです。」
華もそんなマドカたちを見て楽しそうに笑っていた。

と、その時、華のスマホが鳴り始める。

華「？……新三郎からだわ……。」

華は突然の電話に困惑しながらも電話に出る。

……ところが、華は一向にしゃべろうとしない。相手が一方的に喋っているのであろうか……？

それにマドカは、華のスマホから何かが聞こえたのか、相手が何やら騒がしい話し方をしているようにも思えていた。

華「……え……？……。」

〝カチャン〟

華は何やらどこか深刻そうな表情に変わったかと思うと、ショックで脱力したか耳に当てていたスマホがそのまま手をすり抜けて床に落ちてしまった。

その華の様子に一同が驚く。

沙織「どっ……どうしたの華!?」

華「……。」

沙織が心配して話しかけるが、華は無言で俯いたままそっとしゃがんで落としたスマホを拾う。

よく見るとその表情は悲しそうなものだった。

すると、華はしゃがんだまま身震いをする。そして、跳び付くように沙織に縋り付く！

沙織「!?えっ!?ち、ちょっと……？」

沙織は突然自分に縋り付いたことに困惑するが、すぐに華が泣いてることに気付き驚く。

普段肝が据わっていて物怖じしない華が泣き出すなんて……余

程のことがあったんだな……という感じに。

すると華は少し涙声で話す。

華「お母様が……お母様がっ……。」

華が新三郎から電話で聞いたのは、母。百合が謎の怪物に襲われて重傷を負い、隣町の病院に搬送された事であった。

それを聞いたマドカたちは驚きの色を隠せなかった。

丈司「謎の怪物……か。」

暁人「また出やがったのか……おのれ～！よりによっていたいけな女性を襲うなんて…。」

マドカ「とにかくまずは、隣町の病院に行く必要があるね。」

みほ「うん。華さんのお母さんの事心配だし。」

優花里「私たち戦車で行ってきます。」

マドカ「僕たちも付いてくよ。」

かくして、一同は華の母のお見舞いのためにまずは隣町の病院に行くことにした。

沙織「でも、戦車の方は私たちが乗るだけで一杯一杯だし……。」

暁人「(右手の人差し指を左右に振りながら)ドンットウォーリーお嬢さん。」

《コネクト・プリーズ》

そう言うと暁人は中央に右手の手形が付いた普通のベルトの姿に擬態しているウィザードライバーにコネクトウィザードリングをかざす。

すると、暁人の横に空間同士を繋ぐ小型の魔法陣が現れ、その中から一台のバイクが現れる。

みほたちはその光景を見て驚く。

そのバイクは赤と銀色で構成され、フロントカウルのヘッド部にはウィザードの頭部に似たデザインが施されている。
ウィザードの専用バイク・マシンウィンガーである。
これは仮面ライダーウィザードの力を得た暁人に与えられたマシンであり、戦闘時だけでなく日常でも使用できる。

暁人「どうよ。」
暁人は出現させたマシンウィンガーを得意げに紹介する。
沙織「すっごーい！私も乗ってみたいなー！」
暁人「あはははは…残念だが嬢ちゃん、今は一刻を争う時だ。ランデブーはまた今度な。」

次は丈司がショドウフォンを取り出し、宙に『馬』の字を書く。
丈司「はっ！」
丈司がショドウフォンを振るうと宙に描いた馬の字が光ることでモヂカラが発動され、その光が変形することで『白馬』が召喚された。
もちろん、馬を召喚した事にもみほたちは驚く。

丈司「ま、こんな感じで、俺たちは乗り物も間に合ってんだ。」
暁人「そうでもないみたいだぜ。」
暁人が指差す方に丈司が振り向くと、そこにはマドカがいた……。

ポクポクポク……チーン

マドカ「あの～……僕、余ってるんですが……。」
暁人・丈司「あ！」

そう、マドカだけ専用の乗り物が無いことにみんな気づく。

暁人「マドカだけ変身したらどうだ？飛びさえすれば余裕っしょ？」
マドカ「いやいやウルトラマンだよ!?絶対目立つって！」
丈司「じゃあ、みほたちの戦車の上に乗って移動したらどうだ？邪魔者を蹴散らしながら。」
マドカ「え？」

〈イメージ映像〉
進むみほたちの戦車の上に胡坐をかいて座っているマドカは、スパークレンスを突き出して光線を発しながら邪魔するモノを蹴散らしていく。
そして、みほたちの戦車も砲撃を放っていく。

〃ドガドガーン〃　〃ズガーン〃

マドカ「どけどけどけーい!!　ヒーロー様のお通りだあぁぁ!!」
〈イメージ映像終了〉

マドカ「いやいやいや僕どんなキャラだよ!?　てか、いつの時代の人だよー!?」
マドカは途方に暮れそうになっていた。
マドカ「ああっ！もう……ベルトさあぁぁん!!」
マドカは思わずやけっぱちで叫んでしまう。
と、その時、
〃ビシャン〃　ヒュ～……　〃ドーン〃
一同「うわっ（ひゃっ）!!?」

突如、上空に小さな光の輪が現れたかと思うとその中から一台の車が現れ、一同の前に落ちて来た。

マドカ「……!?これはっ!?」

その車を見た瞬間、マドカは驚愕する！

マドカ「……シャーロック……？」

黄色いボディをしていて平たくて縦に長く、後部には砲を装備しており、そして前部には『ＧＵＴＳ』の字があしらわれている。

その車輛とは、本家のティガが活躍していた世界で防衛チーム『ＧＵＴＳ』が使用していた車両・シャーロックであった！

これは特殊合金製の頑丈な車体を誇るパトロール用超高速特捜車である。

マドカ「そ、そんな……何でいきなりシャーロックが……？」

突然の車両の出現に戸惑うマドカ。

暁人「多分、おっちゃんが特別にくれたんじゃね？」

丈司「そうかもな、ほらマドカ、転生時にあまり神に頼まなかったから。」

マドカ「あはははは……とりあえず、乗り物はそろった事だし、隣町の病院へ急ごう。」

暁人「そうだな。」

優花里「お付き合い、お願いします。」

丈司「なに、良いって事よ。」

かくして、それぞれ乗り物に乗って隣町の病院への移動が始まった。

みほたちは戦車、暁人はマシンウィンガー、丈司は白馬、そしてマドカはシャーロックに乗り込んで移動を開始する。

…しかし、街中を車にバイク、馬、そして戦車が同時に走るとは何

ともカオスかつシュールな光景である（笑）

マドカはシャーロックを運転しつつ、天を見上げて呟いた。

マドカ「……ありがとな……おっちゃん。」

一方、〝あの世〟では、

神「へっぶしっ!!（↑くしゃみ）……何だっ？何だ何だ？　マドカ君に特別にシャーロックを与えた直後に何だ？」

約1時間後、一行は隣町の病院に到着した。

病室に立ち会うのはみほたちだけにし、マドカたちは病院の控え室で待つことにした。

暁人「俺たちは待つのか……ま、差し入れのドーナツ・プレーンシュガーを渡すようにみほちゃんたちに預けたことだし、良いとするか。」

丈司「ま、普通の考えて、ここからは〝親子水入らず〟ってやつだろ。」

マドカ「まあ、みほちゃんも一緒だから、折角には親子だけじゃないけどね。」

マドカたちが雑談をしていたその時、

典子「すまないな、妙子。」

妙子「いえいえ、キャプテンのためなら当然のことです。」

マドカたちは突然声のする方へ振り向く。

そこには戦車道のバレー部チーム・アヒルさんチームの近藤妙子が、同じくアヒルさんチームのリーダーの磯辺典子に肩を貸しながら立っていた。

典子はどこか怪我をしているのか、何処か覚束ない立ち方のような

感じだった。

暁人「あ、あんたらは、昨日のバレーガールズの。」

暁人の呼びかけに典子と妙子も気付く。

典子「…あなた達は確か、」

妙子「昨日のヒーローさん達ですか？」

マドカ「そうです。偶然ですね。」

典子「ええ、まさかここでまた会えるなんて。」

丈司「何かあったのか？」

妙子「え？それは……その……。」

妙子の反応から何かあったに違いないのだが、妙子は何処か言いづらそうだった。

典子「……話しなよ妙子。この人たちはヒーローなんだから。」

妙子「キャプテン……分かりました。」

典子に後押しされた事により、妙子は事情をマドカたちに話した。

それは今朝、アヒルさんチーム四人で大洗の隣町の体育館でバレーボールの練習をしていた時の事だった。

そのバレーの練習の最中、突然上から巨大な鎖鎌のような鞭が体育館の屋根を突き破り襲って来たと言う。、

鎖鎌は体育館の床の中心に直撃し、四人はバレーで培われた反射神経で何とかそれをかわすことが出来たのだが、運悪くキャプテンの典子だけが右脚に瓦礫が直撃し、血が出る怪我をしてしまったという。

さらに、突き破られた体育館の屋根の穴から鞭の元凶らしき怪物のような姿が見えたのだが、その姿は透けていたのではっきりと分からなかったという。

よって、怪我をした典子は妙子に肩を貸してもらい、ここ最寄りの病院まで来たと言う事である。

事情を聞いたマドカたちは不思議な気持ちになる。

丈司「それは災難だったな……しかし、巨大な鎖鎌か。」
暁人「それに怪物の姿……犯人はまたしても怪獣なのか？」
典子「だと思うのですが……はっきりと見えなかったのですが、その怪物の姿を見た時、ふと思ったんです。
あの姿……前にも見たことある気がする……。」
マドカ「前にも見たことがある？　以前交戦した事があるという事かな？」
妙子「ええ、それに……微かですが、聞き覚えのある鳴き声のようなモノも聞こえたのです。」
丈司「見覚えのある姿に聞き覚えのある鳴き声か……もしそれが正しければ、その怪獣は君たちに復讐しに来たのでは？」
暁人「全く、レディを付け回すとは、許せない奴だな。　そういえば他のメンバーは？」
典子「忍とあけびは外に止めてる戦車で待機している。もしも怪物が襲って来た時の為にね。……うっ!?」
典子は傷が再び疼き出したのか、右脚のジャージをめくって包帯が巻かれた部分を露出させる。
典子「しばらくバレーが出来ないのは残念だが、複雑骨折にならなかっただけマシか。」
妙子「ええ。早く傷を治して、またバレーをしましょうキャプテン。」
暁人「昨日の君たちとのバレーは中々楽しかったからね。それが出来なくなるのは、俺も残念だからな。」
暁人は妙子たちの元に歩み寄り、そして妙子の肩に手を置く。
暁人「またやろうぜ、バレーボール。」
妙子「暁人さん、上手かったですもんね。是非とも。」
暁人「え？……ま、まあ、俺は球技全般が得意でね。特にサッカー

は特別だ。」
妙子「え？バレーでもアレなのに、サッカーはどれだけ上手いのかな？」
暁人「またいつか見せてやっよ。なんなら一緒にやろうぜ、お嬢さん。」
妙子「え～…バレー以外の球技なんてあまりやった事無いからできるかな～。」
暁人「大丈夫だって、俺が教えてやっからさ。」
妙子「え？そうですか？その時は是非。」

暁人と妙子は笑い合う……というか、いつの間にか楽しく会話してしまっている二人。
妙子もいつの間にか典子を放してしまっていた。

やがて二人は困惑そうな表情で見つめる仲間たちに気付く。
女好きの暁人は言うまでもないが（笑）、妙子も何事にも一生懸命な一方で空気が読めない事もあるのである。
ある意味似た者同士なのかもしれない（笑）
妙子「……あ、すみませんキャプテン。」
再び典子の腕を肩に回す妙子。
暁人「悪い悪い、つい話が盛り上がっちゃってな。」
丈司「ったく、暁人は相変わらずなんだから。」
暁人「んなっ!?何だよ！丈司だって今朝華と良い感j…」
丈司「バ…バッ！あれはただ話が合っただけでお前みたいに下心でやったんじゃn…」
暁人「下心じゃねえしレディーに優しくして何が悪い!?」
……とまあ、こんな感じで暁人と丈司がまたしても言い、典子たちはその光景に思わず笑みを浮かべていた…

…その時、マドカは何かが引っかかったのか、何やら考え事をしていた。

マドカ「巨大な鎖鎌……はっ!?まさか!?」
暁人「?どうした?マドカ。」
鎖鎌を浮かべた瞬間、マドカは何かを思い出した。
それは、今朝スパークレンスから発せられたメッセージである。
『凶器、邪悪、接近』
マドカ「……間違いない……あれは新たな脅威への警告かも……。」
丈司「……マドカ……。」
暁人と丈司、そして典子と妙子も微かに緊張を感じ始める。
とその時、お見舞いを終えたみほたちがやって来た。
暁人「お、みほちゃんみんな、奥さんはどうだっｔ……」
マドカたちはそれに気づくが、その瞬間少し驚く。
それは、華の表情が暗くなっていたことだった。
俯いているその姿は正にいつもの花のような笑顔の輝きは無く、暗い表情や密かに強く握っている拳から、静かな復讐心と思われる怒りも感じるものだった。
どうやら華の母・百合はよほど傷が深いのか、未だ意識が戻らず寝込んでいると言う。
更に担当医の話によると、あとは本人の頑張り次第だという……。
病室では、未だ百合は意識を戻す様子はなく、その傍の椅子で新三郎が心配そうに見守っている……。

華は、母が予想以上の重症を負っている事が余りにもショックだったのだ。

それを聞いたマドカたちも、驚きやショック、そして怒りを隠せない状態だった。

丈司「おのれ……か弱い女（おなご）を次々と襲うとは……。」

暁人「早くその元凶を見つけてぶっ潰してやんねーとな。安心しろ。俺たちが最後の希望だ。」

マドカ「……行こう。これ以上被害が広がる前に。」

優花里「我々も行きましょう。戦車で。」

沙織「うん、そうだね。私たちに任せて、華はお母さんについてあげて。」

華「いえ、私も行きます！」

いつもより力強く返事をする華に一同ははっと驚く。

華「……必ず……お母様の仇はこの私が……。」

華は拳を震えるまで握りながら静かに仇討ちを誓う。

沙織「……華……。」

〝ピコーン　ピコーン　ピコーン…〟

その時、突然スパークレンスが一定の音を上げ、驚いたマドカは慌ててスパークレンスを取り出す。

それは、新たな脅威が間近まで来ているという知らせだった！

みほ「マドカさん…もしかして遂に？」

マドカ「ああ、行こう！」

「フフフフフ……。」

一方、人目の付かない病院の屋上で、謎の黒い影法師が何やら不気

味に笑っている様であった……。

一同は急いで病院の外に出る。因みに外では戦車で待機していた河西忍と佐々木あけびも外に出ていた。

忍「あ、キャプテン、妙子！」

あけび「あれを見てください！」

そこで一同は驚きの光景を目撃する！

それは快晴であるはずの青空に一つだけ大きな黒雲のような雲が広がり、それが雷を帯びているのだ。

〝ゴロゴロゴロ…ピシャーン〟

するとその黒雲から耳を劈くような音と共に一筋の稲妻が地面に降り注ぐ！

そしてその光の中から何かが姿を現す。

〝ギエエエェイィィーン！〟

遂にはっきりと姿を現した一匹の巨大生物は、足踏みにより地響きを起こしながら激しく咆哮を上げる。

牛や悪魔を合わせたような凶悪な顔つきに瞳のない爛々と光る目、大きく裂けた口の無数の牙、先端が分かれた長い尻尾、更には頭部の巨大な剣、左手は鎌、右手は鉄球と、正に全身に武器を備えた禍々しい姿をしている。

その生物は『殺し屋超獣バラバ』である！

奴はかつて別次元の地球で、地球征服を目論んだ異次元人・ヤプールが、超獣製造機によってアゲハ蝶の幼虫と宇宙怪獣を合成させるこ

とによって誕生した事がある。
超獣とは怪獣を超えた生物兵器の事であり、即ち並みの怪獣よりも戦闘に特化した強敵なのである！

バラバはその肩書の通り、獲物を見つけては右手の鉄球で相手を絡め取り、左手の鎌で切り裂くなどして容赦なく殺しにかかる、超獣の中でも一、二を争うほどの残虐さを持っているのだ。

マドカ「あれは！……確かバラバ！」
暁人「おいおい、またヤバそうな奴が来たもんだな！」

忍「バラバって…？」
あけび「ヤバいに決まってるよ～！」
妙子「邪悪襲来だよ～！」
どうしたことかバラバを見た瞬間、妙子、忍、あけび、沙織、優花里は思わず怯えるように戦車に隠れ出す。
マドカ「…どうしたの？」
沙織「だってバラバって、凄く乱暴だし、口から火を噴くし～！」
優花里「鉄球でボコボコ殴って来るし～！」

どうやら反応から見ると、沙織たちは以前にもバラバと交戦経験があり、その残虐さは既に身をもって経験済みのようである。
しかし、我慢強いあけびまでもが怯えるとは…よほどバラバは凶悪な奴なのだ。

暁人「なるほど…前からレディーたちをストーカーしては襲ってたわけだな。ゆ☒る☒ざん゛ぞ！」

バラバは早速鉄球や鎌でビルを崩しながら暴れ始める。
７５メートルもの巨体に８万５千トンもの重量を誇るだけあって、暴れるだけで激しく地響きが起こる。

丈司「いかん！今のうちに仕留めなければ！」
マドカ「行こう！みんな。」
みほ「私たちも戦車で行きましょう！」

マドカはシャーロック、みほたちあんこうチームと妙子たちアヒルさんチームは戦車に乗り込む。

アヒルさんチームの戦車には、脚を怪我している典子まで乗り込んでいた。
妙子「キャプテン…。」
忍「その脚で大丈夫なんですか？」
典子「こんなの根性でどうにかなる。それに、チームが揃わないと、バレーは始まらないだろ。」
あけび「流石…それでこそキャプテンです。」
典子「よーし、今こそバレー部の根性を見せるぞ！」
妙子・忍・あけび「おーっ！」

みほ「それではみなさん、パンツァー・フォー！」
マドカ「僕も、行きます！」

かくして、暁人と丈司は病院の外で待機する事にし、マドカの乗ったシャーロックとみほたちの乗った戦車が出陣する。
みほ「えーと…この前は『こそこそ作戦』をして失敗したし、今回はどうしよう…」
マドカ「それなら僕に考えがあります。」
みほ「え？」
対策に悩むみほにマドカが通信機越しに語り掛ける。
マドカ「僕がこの先1キロ先の地点まで引き寄せる。そして奴が僕に集中してる隙にいっきに後ろから攻めてくれ。」

みほ「…分かりました。では作戦名は『びっくり作戦』で行きましょう。」

〝ズコッ〟（所謂マドカがずっこける音）

マドカ「なんか迫力無いな……まいっか。　んじゃ、作戦開始！」

あんこう&アヒルさんチーム一同「了解!!」

かくして、びっくり作戦が開始される。

マドカはシャーロックを運転し、バラバのギリギリまでのそばを通り過ぎる。

突然黄色の派手な車が通った事に気付いたバラバは目障りと感じたのか、暴れるのを止めてシャーロックに狙いを定める。

マドカの計画通りシャーロックを追いかけるバラバ。

バラバは鉄球の鎖鎌を伸ばしてそれを振り回して打撃を繰り出すが、マドカは見事な運転テクでそれをかわしつつなおも走行する。

やがてバラバの目に着かないビルの裏側へと回り込むと一旦シャーロックを停車する。

バラバは突然シャーロックを見失った事で、それを探そうと手当たり次第に暴れ始める。

マドカ「今です！」

みほ「砲撃してください！」

〝チュドーン　チュドーン…〟

〝ギエエエイイィィイン!?〟

マドカの指示により、密かにバラバを追っていたみほたちの戦車は背後から一斉砲撃を始める。

バラバは砲撃に耐えながらも振り向き、頭部の剣からのショック光

線で反撃に出る。
みほたちは光線が周囲で爆発する中でも怯まずに砲撃を続ける。
なおも、みほたちの砲撃を受けつつも反撃するバラバ。
だが次の瞬間、バラバはなんと頭部の剣を遠隔操作で飛ばし始める！

みほ「はっ、危ない！　下がってください！」
みほの咄嗟の指示により二台の戦車は後ろに下がることで、なんとか飛んで来た剣の直撃を避ける。
だが、バラバの遠隔操作によって飛ぶ剣はUターンをし、再びみほたちの戦車へと飛んで来る！

〝ズドーン〟

妙子「きゃあっ！」
典子「ものすごいアタックだ！」
両チーム共直撃はしなかったものの近くの地面に剣が直撃し車両が激しく揺れる。

暁人もその思わぬ攻撃方に驚愕していた。
暁人「！剣を飛ばせるとは驚きだなー…されは俺と同じ魔法でも使ってるのか？」
いえ、違います（笑）

次にバラバは口から火炎を放射して攻撃する。
みほ「緊急退避です！」
みほたちは火炎が迫り来る中、急いで後退する。

が、しかし、

〝チュドーン〟

みほの指示関係なく、後退している最中のあんこうチームの戦車から砲撃が発射され、それがバラバに直撃する！

みほ「えっ？」

一同はある方向へと振り向く。砲撃を撃ったのは砲手の華であった。

沙織「ちょっと華!?」

優花里「今は攻撃の指示は出てませんよ!?」

〝チュドーン　チュドーン…〟

だが、華はまるで聞く耳を持たず闇雲に砲撃を続ける。

麻子「きっと復讐がしたいんだ。」

みほ「え？」

麻子の意味深な発言にみほは反応する。

…そう、華は今、母に重傷を負わせたバラバへの復讐に燃えているのだ！

見た目こそ落ち着いているが、いつもより若干鋭いその視線からは静かに湧いて来る復讐の炎を感じさせる。

みほ「華さん落ち着いてください！」

沙織「そうだよ！今闇雲に攻撃しても怒らすだけだよ！」

華「いえ、止めません！……お母様の仇は、絶対に私が……

それに、今ここで仕留めておかなければ、多くの人が、お母様みたいに…！」

華の歪んだ意思は固く、みほたちの呼びかけにも聞く耳を持たずなおも砲撃を続ける。

暁人たちもみほたちの戦車の異変に気付く。
暁人「おいおい、何だか変だぞ？　闇雲に撃ってるだけでまるで効果が無い。」
丈司「……華……。」
丈司は何かを察してるようだった。

百合「戦車なんて、野蛮で不格好でうるさいだけじゃない！　戦車なんて、みんな鉄屑になってしまえばいいんだわ！」（←所謂回想の台詞）

丈司「何であんな女（おなご）のためにそこまで……。」

新三郎「……お嬢……。」
新三郎も、病院の窓から心配そうに見つめていた。

〝ギエエエイイイイン！〟

遂にバラバはしつこく続く砲撃に怒り狂い、激しい咆哮と共に鎌を振り上げる！
優花里「うわあああ！余計怒らせてしまいましたよ～！」
麻子「ひとまず退却だな。」
みほたちの戦車は急いで逃走するが、それでも華は砲塔を後ろに向け、なおも砲撃を続ける。
よほどバラバに対する恨みが強いのであろうか？
バラバは戦車を叩き潰そうと鎌を何度も振り下ろしながら追いかける。
コンクリートの地面を次々と発泡スチロールのようにたやすく貫きながら迫り来る鎌から必死に逃げる戦車。
沙織「潰されちゃう～！」

マドカ「はっ、危ない！」

マドカは神から与えられたレーザーガン・トライガーショットを構える。
マドカ「アヒルさんチーム！みほさんたちの戦車を援護しましょう！」
典子「了解しました！」

マドカはトライガーショットの3連シリンダー・トリプルチェンバーを回転させ、まずはレッドチェンバーでアキュートアローという赤いビームを発射して攻撃する。
バラバは被弾するが、よほどみほたちの戦車へ怒りが集中しているのか、まるで気にも留めない。
マドカ「くそっ！なんてタフな奴なんだ！」
マドカはめげずに再びトリプルチェンバーを回転させてイエローチェンバーに変形させ、バスターブレッドと言う黄色の高エネルギー火球を放つ！
火球が背中に命中し爆発。流石にバラバは痛みを感じたのか、ふと止まって唸り声を上げながらマドカのいる後ろを振り向こうとする。

あけび「今です！」

〝チュドーン　チュドーン…〟

隙を突いてアヒルさんチームが集中砲火を始める。
そしてマドカもブルーチェンバーに切り替えて弾丸を連射する。

マドカとアヒルさんチームの連携によりバラバの注意がそれたことで助かった事に気付いたみほたちは一旦停車する。
優花里「マドカさん、西住殿に負けず臨機応変に対処しますね。」
みほ「う～ん。あれだけの急場で切り替えが早くできるなんてすごい…。」
みほたちはマドカの戦術変更能力に感心する。

沙織「華、らしくないよ！気持ちは分かるけど、今はマドカさん達と力を合わせよう？ね。」
沙織は華に語り掛ける。だが、華は黙り込んで俯いたままであった……。

バラバは鉄球の鎖鎌を伸ばし、アヒルさんチームの戦車に鎖鎌を引っ掛ける。

〝ガリッ〟
アヒルさんチーム一同「キャッ！」

そして「目障りだ！」とばかりに思い切りブン投げる！

アヒルさんチーム一同「きゃああァァーーーッ!!」

暁人「！バレーガールズ！」

絶体絶命のアヒルさんチーム！

マドカ「はっ！危ない！」
危機を知ったマドカは懐からスパークレンスを取り出す。
マドカ「二度目からいきなり強敵だけど……迷ってる場合じゃない！」

今こそ変身の時だ！

マドカはスパークレンスを前に突き出して腕を十字にクロスさせた後、時計回りに両腕を回して天に揚げる。

マドカ「ティガ――！」

〝キャイイーン〟（所謂スパークレンスの発光音）

叫びと共にスパークレンスの先端部分のティガのプロテクターに酷似したパーツが展開してそこから光が解放され、マドカはその光に包まれる。

そして光の中からウルトラマンティガ（マルチタイプ）が右腕を突き出して飛び出す！

今にも落下して地面に激突しそうなアヒルさんチーム。

彼女たちは諦めかけていたその時、何かの衝撃と共に自分たちの戦車が止まったような感覚を感じる。

一同は恐る恐る目を開けて戦車の窓を眺めてみる。

（ウルトラマンティガ登場ＢＧＭ）

窓からは全身を包んでいた光が消えると共に姿を現すウルトラマンティガの顔が見えた。

アヒルさんチームの戦車は、間一髪ティガが掴み取った事で難を逃れたのである。

ティガの登場と自分たちが助かった事により一同は安心の笑みになる。

新三郎「おお！現れましたぞ、昨日の巨人。」

ティガは戦車を地面に下ろし、「もう大丈夫だよ。」と言うように頷く。

だが、そうしてる間にもバラバは鎌を振り揚げ、再びあんこうチームを狙い始める。

優花里「何としてでも私たちを潰す気ですよ～！」

沙織「一度狙ったものは最後まで追い続けるのよ！私の元カレもそうだった～！」

…てか沙織、アンタ元カレなんていたっけ？（笑）

バラバはチャンスとばかりに鎌を振り下ろそうとする！

「チャーッ！」

〝ドガーン〟

間一髪、ティガが横から跳躍してショルダータックルを叩き込んでそれを阻止する。

ティガは着地して構えを取った後、バラバに向かって駆け寄り始める。

助かったみほたちはティガの登場に気付く。

沙織「…ウルトラマンティガ！」

優花里「助かりましたよ～マドカさん！」

みほ「また…助けてもらいましたね。」

するとみほは、次なる指示を出す。

みほ「アヒルさん、我々と合流し、待機しましょう。」

優花里「どういうことですか？西住殿。」

みほ「マドカさんが戦ってる間チャンスを待ち、我々二両での同時砲撃を打ち込むのです。　一台一台の砲撃は小さくても、二台同時なら少しでも大きな効果を発揮できるはずです。」

優花里「なるほど、そういう事ですね。」

典子「了解しました！」

アヒルさんチームの戦車はあんこうチームの元へと向かい始める。

沙織「華、この一撃にかけよう？　奴が急所を向けた隙に、渾身の弾を打ち込むのよ。そうすれば、少しでも大ダメージを与えられると思うわ。」

華「……。」

沙織「マドカさんならきっとやってくれるよ。　だから、一緒に仇

討ちしよう。」
沙織の説得を聞いた華は、しばらく黙り込んだ後、やがて顔を上げる。
その表情は復讐に燃える暗いものではなく、いつもの花のような可憐さを取り戻していた。
華は〝一人で〟ではなく、〝みんなで〟仇討ちをすることを決めたのだ。
華「そうですね。　ごめんなさい。勝手に独断に走ってしまって…。」
みほ「ううん、大丈夫。　一緒に頑張ろう華さん。」
かくして、合流したあんこうとアヒルさんチームはバラバが隙を見せるまで待機する事にした。
みほ「それでは『びっくり作戦パートⅡ』開始です！」
華「お母様……必ず無念を晴らします。」

（ＢＧＭ：光を継ぐもの）

バラバと交戦するティガ。
ティガは右脚の横蹴りを繰り出し、バラバはそれを鎌と鉄球をクロスさせて防ぐ。
次にティガはバラバと組合、互いに押し合いを始めるが、相手は怪獣より強い超獣だけあってパワーは凄まじく、やや押され気味となる。
ティガは蹴りを数回打ち込むことで一旦離れ、頭部に掴みかかるがその隙を突かれ腹部に鉄球の一撃を受けてしまう。
ティガは少し怯みつつもすぐさま再び組み付くが、バラバは易々と横に投げて倒す。
バラバは更に攻撃を加えようとするがティガはうつ伏せのまま右脚を振り上げ、頭部に蹴りを決めると同時に立ち上がる。
バラバは鉄球のパンチを繰り出し、ティガはそれが腹部に当たる直前で両手で受け止めるがその間に鎌の斬撃の一撃を右肩に受けてし

まい、その部位に何かが切れるような生々しい音と共に爆発が起こる。
ティガはたまらず右肩を押さえながら後退し構えを取る。
バラバは鉄球の鞭を伸ばし狙いを定めるようにブンブンと振り回す。
そしてティガ目掛けて思い切り鞭を伸ばすがティガは跳躍してそれを避け、空中で回転した後落下と共にバラバに組み付きそのまま地面に転がる。
ティガはなんとかマウントを取り、パンチやチョップを連打する。
だが、その間に背後と言う死角からバラバの尻尾が迫り、数本に別れた先端を首に巻き付け締め付け、そのまま投げ飛ばす。
仰向けに倒れるティガに今度はバラバがマウントを取り、頭部目掛けて鎌を何度も振り下ろすがティガはそれを顔を左右に反らすことで避けていき、やがて両手で受け止めるがその隙に鉄球の一撃を受けてしまい、更に鎌の一撃を右肩に受けてしまう。
ティガは立て続けの強烈な打撃にダメージを受けつつも力を振り絞りパンチを顔面に打ち込み、更に胸部を蹴ることで何とかマウントから脱する。
怒ったバラバは頭部の角を光らせてショック光線を放ち、それを受けたティガは怯む。
続いてバラバは火炎を噴射して攻撃を仕掛け、ティガはそれを両手のひらで円形の光の壁・ウルトラシールドを展開して防ぐ。
更にバラバは頭部の剣を飛ばす！剣はウルトラシールドを突き破り、ティガはそれにより何とか防げたもののバリヤーが割れた衝撃で後ろに吹っ飛ぶ。

超獣バラバの多彩な凶器攻撃に苦戦するティガ。
暁人「奴（バラバ）め、芸達者なヤローだ。　丈司、俺たちも加勢と行こうぜ！」
……だが丈司は何やら考え事をしているのか返事がなく俯いていた。

暁人「……どうした？」
丈司はしばらく黙り込んだ後、遂にショドウフォンを取り出す。
丈司「とりあえず、今は奴を倒すことに専念するか。」
暁人「おう。」

今こそW変身の時である！

《ドライバーオン・プリーズ》

暁人はベルトの手形にドライバーオンウィザードリングをかざしてウィザードライバーを出現させる。

〝スパンッ〟

〝シャバドゥビタッチヘーンシーン！…〟

そしてハンドオーサーを左手側に傾けさせる。

丈司「ショドウフォン、一筆奏上！」

〝キッ　キッ　キュイッ　キュイッ〟（所謂ショドウフォンの書く音）

丈司は掛け声と共にショドウフォンの筆モードで火のモヂカラを宙に書く。

暁人「変身！」

丈司「はっ！」

暁人はフレイムウィザードリングをドライバーにかざし、丈司は

ショドウフォンを振るって通話ボタンを押すことでモヂカラを発動させる。
現れた赤い魔法陣が暁人を通過し始める。
《フレイム・プリーズ　ヒー・ヒー・ヒーヒーヒー！》
〝ザン　ザン　ザンッ〟（所謂シンケンレッド変身完了音）
仮面ライダーウィザード、そしてシンケンレッドの変身が完了した！
暁人「さあ、ショータイムだ！」
丈司「シンケンレッド・千葉丈司、参る！」
ウィザードはとある指輪を右手の中指に填め、シンケンレッドもとある五角形のエンブレムを取り出す。
〝スパンスパンッ〟
《ドラゴライズ・プリーズ！》
ウィザードはハンドオーサーを右手側に傾けドラゴライズウィザードリングをかざす。
〝ギャアアァオン〟
すると、現れた巨大な魔法陣の中から赤・金色・銀色の巨大なドラゴン・ウィザードラゴンが飛び出して現れる！
ウィザードラゴンはウィザードの戦力となるファントムである。
本家では変身者・晴人の体内に宿るファントムであるが、暁人のは

体内からではなく、ドラゴライズウィザードリングの中から召喚するという形で登場するのである。
つまり、このウィザードラゴンは本家とは違い、暁人の魔力そのものではなく、暁人の魔力により誕生したモノという事なのだ。
だが、単体では周囲への被害を考慮せずに暴れ回るため、早急に制御する必要があるのである。

暁人「ドラゴン！俺に従え!!」
ウィザードはマシンウィンガーを駆けながら跳躍し、マシンウィンガーをウィザードラゴンの背中に合体させることで背中の翼がグレイトフルウィンガーに強化され、強化形態・ウィンガーウィザードラゴンへと変形する！
これにより、ウィザードラゴンの制御が可能となった。

丈司「獅子折神！」

シンケンレッドも火の文字が刻まれたエンブレムを置き、ショドウフォンで『大』のモヂカラを書いて発動させる。

丈司「折神大変化！」

折神大変化によりエンブレムはシンケンレッドを中に入れながら巨大化して変形する。
そしてライオン型の折神・獅子折神へと変形を完了する！
中の操縦席は折神を象徴する文字の掛軸が左右に貼られた金の屏風をが背後に置かれ、兜を模した赤い台座が前方に配置されている。
シンケンレッドはシンケンマルを台座に差し込んで操縦を可能にする。

暁人「行こうぜ！準備はいいか？」
丈司「ああ。」

ウィンガーウィザードラゴンと獅子折神は、苦戦するティガ向かって飛び立つ。

一方ティガは、バラバの鉄球の鞭が右腕に巻き付いており、そのまま引き寄せられていた。

バラバは、ティガを引き寄せたところで一気に鎌で斬って止めを刺そうとしているのだ！

〝ギャアアァオン！〟

〝ズガーン〟

そこに、駆け付けたウィンガーウィザードラゴンが四肢の強靭な爪・ドラゴンヘルクローで鞭を切り裂き、それにより解放されたティガは受け身を取って見上げる。

突然鞭を切られて驚くバラバ。その隙に獅子折神が口から火を噴いて牽制する。

ティガの前で静止するウィンガーウィザードラゴンと獅子折神。

マドカ「暁人…丈司。」

ティガ＝マドカは仲間の加勢に気付く。

暁人「大丈夫か？マドカ。」

丈司「俺たちも手を貸す。」

マドカ「二人とも……来てくれると信じてた。」

友の援軍により再び闘志を取り戻したティガは再び立ち上がる。

今こそ、三人の巨大戦力で力を合わせる時だ！

（ＢＧＭ：Ｌａｓｔ　Ｅｎｇａｇｅ）

〝ギエエエイイィィィン〟

バラバは両手の凶器を振るいながら駆け寄る。
まずは獅子折神がバラバ向かいまっすぐに跳び、真上に旋回して飛び越えることで注意を反らす。
その隙にウィンガーウィザードラゴンが向かって行く。
バラバはすぐさま気付き、鎌や鉄球を振るって叩き落とそうとするが、ウィンガーウィザードラゴンがその身のこなしでかわしていき、そしてドラゴンヘルクローで頭部や胸部を攻撃する。
そして強靭な尾・ドラゴンテイルの一撃を頭部に打ち込み、それにより怯んだところに獅子折神がまず後ろから高速で飛んですれ違い様に体当たりを打ち込み、更にUターンしてすれ違い様に体当たりをもう一撃胸部にお見舞いする。
体当たりが当たる度にその部位に爆発が起こり、バラバは怯んで後退する。
そしてウィンガーウィザードラゴンと獅子折神が同時に火炎を噴射して攻撃する。
W火炎攻撃を浴びるバラバは小さな爆発を起こしながら後退する。

「チャーッ！」

〝ドガッ〟

怯んだバラバにティガが背後から跳躍して跳び蹴りを放ち、蹴りを背中に喰らったバラバは転倒する。

〝キュビーン〟（所謂ティガクリスタル発光音）

「んーーーはっ！」

〝トゥララララッ〟（所謂タイプチェンジ音）

ティガは額のティガクリスタルの前で両腕を交差させて組んだ後、両腕を左右に振り下ろし、赤・銀で構成された筋肉質のボディが特徴の剛力形態・パワータイプへとタイプチェンジする。

ティガはバラバを掴んで起き上らせると、腹部に右膝蹴りを二発打ち込み、顔面の右側面に左拳のパンチを決める。

バラバは反撃で鉄球で殴り掛かるがティガはそれを左腕で受け止め、腹部に右拳のパンチを二発打ち込み、更に両手の拳のパンチを交互に数回打ち込んだ後、右足に光のエネルギーを集めて蹴り込むティガ・電撃キックを胸部に叩き込んで爆発と共に吹っ飛ばす！

立ち上がったバラバは再び頭部の剣を遠隔操作でティガ目掛けて飛ばす！

ティガはそっと構えて精神を集中させると、渾身の回し蹴りで迫り来る剣を打ち返す！

〝カキーン〟

〝ザブシュッ〟

〝ギ、エ☒、エ☒、エ☒エ☒エ☒ィィン!?〟

打ち返された剣はバラバの胸部に刺さり、バラバは苦しそうな声と共に血を吹き出す。

暁人「ッ!?、うわぁお。」

丈司「今どきの侍でもやらないぞ？」

その思わぬスプラッタな光景に暁人と丈司は呆気に取られていた。

バラバはダメージが大きいのか覚束ない動きでティガに背を向ける。

だが、その時ティガの目線とみほたちの戦車の砲塔の向きが同じであった。

ティガに背を向けた、つまりみほたちの戦車に背を向けた。今こそ生物の弱点の一つ・後頭部を狙うチャンスである！

みほ「今です！」

アヒルさんチーム一同「せーのっ！」

華「発射！」

〝チュドガーン〟

〝バキュンッ〟

あんこうとアヒルさんチームの同時砲撃がバラバの後頭部に命中し爆発！

後頭部を撃たれたバラバはそのショックや驚きからか目が飛び出てしまった！

びっくり作戦パートⅡ、正に大成功である（笑）

完全に方向感覚を失い混乱を始めたバラバはその巨体に似合わずコミカルにその場を走り回る。

（ＢＧＭ：ＴＡＫＥ　ＭＥ　ＨＩＧＨＥＲ）

今こそ決める時である！

ティガはバラバに駆け寄り、右膝蹴りで蹴り飛ばすことで左腕の鎌を外し、それをキャッチして投げつける！

〝ザシュッ〟

鎌が頭部に刺さったバラバは動きを停止する。

マドカ「今だ！」

ティガは空高く飛び立ち、それを追うようにウィンガーウィザードラゴンと獅子折神も空高く飛び上がる。

そして空中でティガをセンターに横一列に静止する。

マドカ「二人とも…行くよ！」
丈司「心得た！」
暁人「フィナーレだ！」

〝スパンスパンッ〟

《チョーイイネ！・キックストライク！・サイコー！》

ウィザードはウィザードライバーにキックストライクウィザードリングをかざし魔法を発動させる。
それによりウィンガーウィザードラゴンが変形し、ドラゴンの足を模した形態・ストライクフェーズへと姿を変える。
ウィザードはそれを右足に合体させ、フレイムのエレメントと巨大な自身の幻影を纏って跳び蹴りを叩き込む『ストライクエンド』を繰り出す！

シンケンレッドは秘伝ディスクをシンケンマルにセットして回す。

丈司「五角大火炎！」

シンケンレッドの操縦する獅子折神は炎を纏って突進する『五角大火炎』を繰り出す！

そしてティガは、全身からエネルギーを放出しながら突進する『ティガ・バーニングダッシュ』を繰り出す！

三人の同時の必殺技はやがて一つとなって炎の不死鳥のようになり、地上のバラバ目掛けて突進する！

丈司「三位一体大火炎！」
暁人「ストライクトリニティ！」
マドカ「トリプルバーニングダッシュ！」

……合体技の名前だけ一致しなかった（笑）

〝ドギャーン〟

〝ズドガガーン〟

三人の合体必殺はバラバを炎に包むように直撃！
バラバは大爆発し、炎上の後完全に消し飛んだ。

かくして、バラバはエースとの戦い以上のオーバーキルにより倒されたのであった（笑）

力を合わせて見事バラバを撃破した三人。
丈司「これにて、一件落着。」

暁人「ふぃ～。」
マドカ「やったね。」
三人は地に並び立ち、ポーズを取る。
流石に今回は激戦だったためか、ティガのカラータイマーは赤く点滅を始めていた。

マドカ「二人とも……ありがとう。」
マドカは暁人と丈司にアシストしてくれたお礼を言う。
暁人「んま、いいって事よ！」
丈司「初めての力を合わせての勝利だ。」
マドカ「そうだね。」

「ヂャッ！」

ティガは掛け声と共に、両腕を伸ばして飛び去って行った。

一方のみほたち戦車ガールズも、自分たちの協力もあって遂にバラバを撃破できたことを喜び合う。
みほ「はああ……やりました！」
沙織「イイイイやったー！」
優花里「遂に勝ちましたね！」
麻子「……お腹空いた。」
典子「みんな、ナイスチームプレーだったぞ！」
あけび「これでまた安心してバレーができますね、先輩。」
忍「まずは、足の怪我を治すのが大事……ですね。」
典子「そうだね……今はそれに専念するよ。」
妙子「（笑顔で）早く治してください。そしてまた一緒にやりましょ、バレー。」
典子「ああ……そうだな。」

そして華は満面の笑みを浮かべた表情で上を向き、そっと呟いた。

華「お母様……やりましたよ、私。」

その頃病院では、病室で意識を失っていた百合がゆっくり目を開けていた。

百合は娘たちの勝利と共に、自身も見事に峠を越えたのである！

新三郎「！奥様？」

新三郎はそれに気づくと同時に百合が無事であったことを喜ぶ。

百合「……華……さん……。」

百合は何かを察したのか、弱弱しい声で娘の名をそっと呟いた……。

戦いを終えたヒーロー三人と戦車ガールズは合流する。

みほ「今回も色々とありがとうございました。」

マドカ「いえいえ、君たちの助けが無かったら、僕は負けてたよ。」

丈司「皆が力を合わせたからこその勝利だからな。」

優花里「それにしても、ようやくバラバを倒せて何だか安心です～！」

麻子「…安心したらお腹空いた。」

沙織「ねえねえ、今からみんなでさつま芋アイス食べに行かない？」

暁人「お、いいね～チョーイイネ。戦いの後のアイスは格別だぞー嬢ちゃん。」

沙織「華も行こうよ！」

沙織は華の方を振り向く。華はスマホで電話中であった。

やがて華は電話を終えると、嬉しそうな表情でこう言った。

華「新三郎からです。

……お母様……峠を越えたそうです。」

みほ「そう……それは良かった。」
沙織「やったね華！」
優花里「これで更に安心ですね！」
みほたちあんこうチームは、華の母の無事を喜び合う。

バラバを撃破でき、百合も一命を取り留め、正に一件落着であった。

マドカは、喜び合うみほたちを見てそっと呟く。

マドカ「いつまでも守りたい…その微笑を。」

暁人「へ？」
マドカ「彼女たちがいつまでもああやって笑っていられるように、頑張って行こう。これからも。」
暁人「ああ、そうだな。女の子はやっぱ笑顔がかわいいからな。」
マドカ「彼女たちの笑顔を守り、悪を必ず殲滅する。　僕はそう強く決めたよ。」
そこに丈司が水を差す。
丈司「しかしなあ……この世界の女（おなご）は歪んだ奴が割といるぞ？」
マドカ「え？」
丈司「悪を倒すとは言え、圧力をかけてまで戦車道をやらせたり、娘に冷たくする母親と姉、あとその戦車道で頑張る彼女たちの想いを踏みにじるかのように戦車道に偏見を持ったりと……
意外と心が汚い気がするのだが……そんな奴らも守る必要があるのだろうか？」

暁人「丈司、お前相変わらず考え古いぞ。」

丈司「〝侍の考え〟と言ってくれ。」

暁人「まあ、お前が侍主義で大和撫子にこだわるのは分かるが、今の世の中いろんな女の子がいて面白いじゃねーか。」
丈司「まあ、そうだが…。」
マドカ「綺麗とか汚いとかとりあえず置いといて、まずはみんな守ることを考えようよ。
そしてその後にそれを見極めて、汚い心の人はそれを少しずつ治していけばいいと思うよ。」
丈司「俺たちも何されるか分からないんだぞ?それでいいのか?」
マドカ「…どんな人であれ、生きてる人である事に変わりはないよ。命を守る……そう強く決めたことだから、今はとりあえずそれに専念しよう。
丈司も、侍としてそうしたいだろ?」
丈司「……そうだな。侍たるもの、罪の無い者の命を守れなくては意味がないからな。」
暁人「よし!そうと決まれば頑張ってこうぜ、今後も。」
マドカ「ファイトー!」
暁人・丈司「いーっぱーつ!」

かくして、三人は今回の事態をきっかけに〝悪を必ず殲滅し、彼女たちの命と笑顔を守り抜く〟と強く決めた。

〈エピローグ〉
一方、誰も知らない所で謎の黒い影法師たちが二人集まっていた。
「オノレ……折角貴重ナ超獣ヲ出シタトイウノニマンマトヤラレテシマウトハ…。」
「マアソウ焦ル事ハ無イ……我々ハ霊体ノヨウナモノ……怪獣ナラ墓場カラナドイクラデモ呼ビ寄セラレルノダカラ。
ソレニ……奴ノ復活モジット待ッテレバイイ。」

「ソレモソウダナ。引キ続キ怪獣タチヲ呼ビ寄セ、ソシテヤガテコノ世界ヲ制圧シテヤル。」

奴らが言う〝奴〟とは一体何者なのだろうか？
そして、奴らの目的とは一体何なのだろうか……？

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

（ＥＤ：ＤｒｅａｍＲｉｓｅｒ）

〈次回予告〉

（予告ナレーション：五代マドカ）
（予告ＢＧＭ：ウルトラマンＸ（インストルメンタル）サビ）

核怪獣ギラドラスを操る謎の怪人、その攻撃で、街から熱が奪われていく！
冷気に苦戦するティガの力になる新たな装備、それは……！

次回、ヒーローズ＆パンツァー、『冬を呼ぶ春』

第3話『冬を呼ぶ春』

（ＯＰ：Ｌｉｆｅ　ｉｓ　ＳＨＯＷ　ＴＩＭＥ）

五代マドカ（ごだいまどか）、操真暁人（そうまあきと）、千葉丈司（ちばたけし）の三人は、早くも西住みほ達一部の戦車道少女たちと親しくなり、そして殺し屋超獣バラバとの戦いを経て、悪を殲滅し、この世界の者たちを守ると強く決めた。

その翌日の朝、

大洗女子学園のグランドに、戦車道履修者全員が呼び集められた。

その理由は外でもなく、ヒーローズ三人が自己紹介をし、大洗戦車道全員に正式に知ってもらうためである。

そしてそれを機に、今後ヒーローズとパンツァーガールズが力を合わせて戦うためである。

もちろん、彼らがヒーローである事は、大洗女子学園だけの秘密にすることにしている。

まだマドカたちの事を知らない戦車女子たちは、一体どんな人が来るのだろうとそわそわしている。

それを影で見ているマドカたちは緊張に包まれていた。

マドカ「みんな僕たちに期待してるね。」

暁人「ああ、とにかく女の子の前でやるんだからな。かっこよくかっこよく……。」

丈司「そう緊張するなって、普通に侍のように堂々としてればいい。」

亜美「それでは、新しい友達の自己紹介を始めます。　さあイケメン三人、レッツゴー！」

大洗戦車道の教官・蝶野亜美がいつものテンションでマドカたちを呼ぶ。

マドカ「うわあ、ついに来たよ…。」

暁人「んだよ緊張してんのか？しゃーねーなあ…。」

すると暁人は颯爽と女子達の前に出ながら、、、！

暁人「ハロー！出迎えサンキュープリティーガールズ☆」（敬礼ポーズをしてキラーンという音が鳴る）

マドカ・暁人「!!いや待て待て待てーい!!」

〃〃スパンッ〃〃

ノリなのか悪ふざけなのか、暁人がものすごくチャラい出方をしようとし、慌てたマドカと丈司に引きずり戻されツッコミのチョップを受ける。

暁人「ったく何すんだよ！折角かっこよく出ようとしたのに。」

丈司「バッ！……いきなり引かれるだろ！」

マドカ「初対面もいるのにそんな出方したら変人に思われちゃうよ？」

暁人「でも元の世界の学校の女の子には受けがいいんだぜ？」

マドカ「それは、暁人とその女子達はある程度付き合いがあるからだけど、まだ僕らと会ってない子だっているんだから。」

丈司「初対面には第一印象が肝心。普通に挨拶すればいいだろ？」

暁人「だからって普通にしたらつまんねーだろ？」

三人はいつの間にか言い合いになってしまっている。
姿は見えないが、その漫才のようなやり取りは戦車女子たちには若干見えていた。
そして中には可笑しくなったのか、クスクス笑う者も現れる。

一方の西住みほ達あんこうチームは、「嗚呼、またやってるよ…。」みたいな困惑した表情で見つめていた。

亜美「……まあ、三人とも元気がいいわね！　グッジョブ！」
マドカ・暁人・丈司「へ？」

亜美の言葉で三人は言い合いを止める。
そして困惑する戦車女子達を見て慌てて我に返る。

丈司「いかんいかん！侍が女子（おなご）の前で、みっともない！」
暁人「俳優並みにイケメンな俺たちが、芸人みたいに言い合ってる場合じゃないな！」
まあ、芸人にもイケメンはいると思うのだが……（笑）
マドカ「とにかく、自己紹介自体は普通にしようよ！」

かくして、自己紹介が始まった。

まずは丈司からだ。

丈司「俺は千葉丈司。８月３１日生まれのＡＢ型。
特技は家元故に剣道だが弓道も得意だ。因みに剣道の階級は７段。
あと好きな食べ物は天ぷらだ。
最後に女（おなご）ども、侍が来たからには安心だ。必要ならいつでも頼れ。悪は俺が斬る！」

〝ジャキーン〟

丈司はちょっとしたアピールからかシンケンマルを引き抜き構えを取り、それを見た戦車女子たちは驚きと共に「おーっ！」と歓声を上げる。

〝シャキーン〟

丈司「以上だ。」

丈司はシンケンをしまいながら自己紹介を終える。

暁人「丈司のやつ、なんだかんだ言って超アピールしてんじゃん。」

マドカ「そ、そうだね。」

次は暁人である。

暁人「俺は操真暁人。６月２日生まれのＯ型だ。

特技は球技全般で特にサッカーは格別。サッカー部主将及び県大会優勝経験あり。

あ、あとこれも得意なんだ。」

すると暁人はその場で、特技の一つでありウィザードとして戦う際に見せる動き、エクストリーム・マーシャルアーツを取り込んだ跳躍を披露する。

華麗なその跳躍を見た戦車女子たちは歓声を上げ、中には「(頬に両手を当てて)かっこいい～！」「もっかいやってー！」などという声も飛び交っている。

暁人「好きな食べ物はドーナツ。特に砂糖をまぶしたプレーンシュガーは格別だ。

最後に嬢ちゃんたち、もし絶望しそうになったら、この俺魔法使いが希望になってやるから安心しろ。」

〝キラーン〟

暁人はそう言いながら左手の中指に填めたフレイムウィザードリングを見せる。

それを見ていたマドカと丈司は苦笑しながら…

マドカ「暁人…とても力が入ってたね。」

丈司「流石は女ったらし。」

暁人「ん？何か言ったか？」

マドカ・丈司「んにゃ。」

最後はマドカである。

マドカ「僕は五代マドカ。４月２０日生まれのＯ型です！

特技というか、空手及び柔道の心得があって、あと射撃が得意で、最近は剣術も学習中です！

あと好きな食べ物はオムレツです！

最後に、この世界の平和のために、僕らヒーローも全力で戦いますのでよろしくお願いします！」

最後にマドカが、普段のおっとりした感じとは想像もつかない程ハキハキと閉めくくった。

あや「あの、良かったら今ここで空手の腕前とか見せてくださーい！」

マドカ「え？」

マドカは一年生チーム・ウサギさんチームの大野あやからのリクエストを受けて少し困惑する。

マドカ「……じゃあ、何か鉄板とかありますか？」
亜美「ああ、戦車を作る際に残った、素材の装甲ならあるけど…。」
そう言いながら亜美はたまたま持っていた７０センチぐらいの装甲を取り出す。
マドカ「それでは、しっかりと持っててください。……ふぅ～……」
マドカに指示された亜美は装甲を両手持ちで構える。
そしてマドカは一回呼吸をしながら握った両手の拳をゆっくりと降ろしつつ精神を統一させ始める……。
マドカ「せあっ!!」
〝ドバキャッ〟
亜美「おおっ!?」
精神統一が完了したマドカは構えを取りながら掛け声を上げると、一回転しながら亜美が持つ装甲に回し蹴りを叩き込む！
そして蹴りが当たった装甲は容易く真っ二つに割れてしまった！
その見事なまでの蹴り技を見た戦車女子たちは「キャーッ!!」などと前の二人以上の歓声を上げる。
何しろ、戦車の素材に選ばれる程頑丈な装甲を、蹴りだけで砕いてしまったのだからその強さが伺える。
あゆみ「かっこいいし強いし最高ー！」
桂利奈「その力で私を守ってー！」
梓「三人とも超イケメン！彼氏にするなら誰がいいかな～!?」
優季「私、お姫様抱っこしてもらいたいなー！」
紗希「……蝶々……。」

特に、ウサギさんチームからの歓声は凄いものだった。

因みにあんこうチームはというと、
みほ「かっこいいマドカさん。暁人さんに丈司さんも。」
優花里「それにしても驚きです！戦車の素材の装甲を簡単に蹴りで砕くなんて。」
華「その気になれば私たちの戦車にも蹴りで穴を空けられるって事ですね。」
麻子「穴どころじゃないと思うがな。」
沙織「三人を彼氏にしたら、一生私を守ってくれそうだな～！」
みほ「(少し笑いながら)沙織さん…恋人にするとしても選べるのは一人だけだよ？」
沙織「分かってるよ～！ああ、彼氏にするとしたら誰がいいかな～」
沙織は既に、どれかを彼氏にする気満々のようである（笑）

暁人と丈司も前に出たことで、三人が前に並び立つ。

暁人「ったくマドカ、俺より黄色い歓声浴びちゃってさ。」
丈司「まあ、第一印象は掴めたんじゃないかな。」
マドカ「そうだね。」
三人は戦車女子達の方を向く。
マドカ「というわけで、これからよろしくお願いします！」

一方、歴女４人で構成されたチーム・カバさんチームはというと…
カエサル「正に新たな歴史の始まりのようだな。」
おりょう「立ち姿も坂本龍馬並に凛としているぜよ。」
エルヴィン「ああ、正に「日本の夜明けぜよ！」的な感じだ。」
左衛門佐「織田信長、徳川家康、豊臣秀吉の三大将軍の登場のようだ…」
カエサル・おりょう・エルヴィン「それだっ！」

……因みに、自己紹介が終わった後も、マドカたち向かって女子たちがまるで餌に向かって一斉に駆けて来るうさぎの群れのように詰め寄って来ての質問攻めが殺到する。
まあ、当然であり、イケメン転校生の宿命であろう（笑）

あゆみ「元の世界ではどれくらいモテてたの!?」
桂利奈「あと好きなアニメとかも教えてー！」
あや「もっと魔法とか見たいですー！」

とまあこんな感じで、耐える事の無い質問攻め嵐である。

暁人「まあまあ落ち着け落ち着け！　んじゃ、まずは魔法見せてやっからさ。」

暁人はウィザードリングを填めて手形のベルトに擬態しているウィザードライバーにかざす。

《ドレスアップ・プリーズ》

暁人はドレスアップウィザードリングをかざした後右手を前に突き出す。
すると、突き出された手の先にいる阪口桂利奈の学生服姿が光を放ちながら変わり、なんと黄色のドレスのようなワンピースへと変わる！
桂利奈「わあー綺麗！素敵ー！」
桂利奈は嬉しそうである。
ドレスアップウィザードリングは、着ている服を別の服に変化させる魔力を持つのである。
暁人「レディーに喜んでもらえて光栄だよ。」

すると次の瞬間、ただでさえ寄っている女子達がさらに詰め寄って来る！
そしてあちこちから「私にもやって～！」の猛ラッシュである！
みんな暁人にドレスアップして欲しいのであろう。

暁人「お、おおう、凄い凄い。はいはい一人ずつ一人ずつ！」

暁人は困惑しつつも押し寄せる女子たちから一人ずつドレスアップしていく。

マドカ「なんか……すごく大変そうだね、暁人。」
丈司「かっこつけて余計な事するからだ。」

そど子「はいはい暁人さん困ってるでしょ。ちゃんと並んで。」
そこに、大洗女子学園の風紀委員長・園みどり子（通称・そど子）が群がり押し寄せる女子達を指導する。
彼女は風紀委員長であるが故か生真面目で厳しい所があり、特に低血圧で朝起きるのが苦手な遅刻常習犯の麻子には毎回手を焼かされている。

暁人「おお、嬢ちゃん助かったよ。しっかりしてるね～。」
そど子「当たり前です。これも規則ですから。」
暁人「いいんじゃねーの？彼女たち待ちわびてんだ。俺も別に構わねーし。」
そど子「規則は守るためにあるのです！」
暁人「うぅ……何とお堅い。」

丈司「堅物……俺の嫌いなタイプの女（おなご）だ。」
マドカ「まあまあ、そう言わずに。」

暁人「んま、ほどほどにな。……え～っと……、」

そど子「申し遅れました。園みどり子です。」

暁人「そっか、んじゃ、略して〝そど子〟でいいな。」

そど子「んなっ!?暁人さんまでー!??」

因みに彼女は、自分が〝そど子〟と呼ばれるのをあまり快く思っていないのである。

優希「あの～…そろそろドレスアップお願いします。」

あや「寒いです～。」

暁人「おーっと待たせた悪い悪い。んじゃ、いくからな。」

暁人は並んで待つ女子たちのドレスアップを始める。

丈司「女（おなご）を待たせるのは良くないな。」

マドカ「まあ、その女（おなご）と話していて待たせた訳だから……女好きも大変だね～。

まあ、確かに今寒いし、早く済ました方がいいかも。」

ゴモヨ「それにしても、何か変ですね…。」

パゾ美「今更こんなに寒いなんて…。」

そど子と同じく風紀委員の後藤モヨ子（通称：ゴモヨ）と金春希美（通称：パゾ美）が何やら異変に気付く。

マドカ「え？」

丈司「どうしたんだ？」

ゴモヨ「おかしいと思いませんか？四月に入ったというのにこんなに寒いなんて…。」

パゾ美「冬でもこんなに寒い事無かったのに…。」
丈司「…確かに、今日は冬みたいに寒いな。」
マドカ「おかしいなあ…天気予報見たけど今日は一日太陽が出ていて暖かいはずなのに…。」

マドカたちも異変に気付き始めたその時、

〝ブーッ　ブーッ　ブーッ…〟

突然、大洗戦車道のサイレンが鳴り始める！
出動せよの合図だ！

亜美「はっ、全員整列！」

亜美の指示により戦車女子たちは迅速に整列を始め、まだ暁人にドレスアップしてもらっていない女子も渋々整列に移る。

マドカたちも亜美の横でマドカを中心に横一列に並ぶ。

亜美「たった今大洗町付近の溶接工場から出動要請が来た。なんでもそこの人の話によると、強い風邪と共に雪が降り始めたという。」

なんと、四月だというのに大洗町付近の溶接工場周辺の土地に微量ながら吹雪が吹き始めたというのだ！

天候的にもあり得ない出来事に戦車女子たちはもちろん、マドカたちも驚愕する。

暁人「驚いた。今どき冬でも吹雪はあまり吹かないのに。」
マドカ「天候は変わりやすいとも言われるけど、その土地だけ吹雪なのは確かに不自然だね。」

丈司「間違いない。何者かが暗躍しているのかも。」

亜美「そういう事も考えて、じゃあ今回は……あんこうチーム、カメさんチームが出動。それから、園みどり子さんも一緒に行ってもらうわ。」

そど子「ええッ!?なぜ私も?」

亜美「聞いた話だと、貴女と冷泉さんは視力が2．0と飛び抜けいいみたいじゃない。吹雪の中視界も悪いと思うから、敵を探す時役立ちそうじゃない。」

麻子「そのようだな、一緒に頑張ろうそど子。」

そど子「だからその名前で呼ばないで！

…て言うか、万が一敵がいて見つかったらどうするんですか!?私戦車チームでもないし殺されますよ!?」

マドカ「僕たちも行きます。だから安心して。」

亜美「それじゃ、決まりだね！」

よって、今回はあんこうチーム、カメさんチームが出動。マドカたちも万が一のためについて行くことになった。

そして、視力を見込まれて一緒に行くことになったそど子。

みほたちは戦車に乗り込んでスタンバイしながら雑談をしている。

みほ「多分現地は結構寒いだろうね。」

華「うん。念のため、厚着をする衣類も持ってきました。」

優花里「本当に今日の天候はどうなってるんでしょうね。」

沙織「それにしてもこの寒さ、冬のある日、彼女が寒い中彼氏を待つシチュエーションを思い浮かべるな～。」

麻子「いつか自分がそうなるといいな。」

沙織「ぶー！絶対なってやるもん！」

カメさんチームも、

桃「(ガチガチ震えながら)あー寒い寒い……何故こんな寒い中を我々が行かねばならんのだ!?」
杏「(干し芋を食べながら)まあいいんじゃない？一応厚着も持って来たし、」
桃「会長は呑気で良いよな！」
柚子「まあまあ、一生懸命戦車でも動かしてれば温かくなるよ、きっと。」
桃「戦車を操縦するお前はそうかもだが私は装填、砲手、通信だぞ!?ちょっと動くだけだぞー!?
おのれ…こんな寒い時こそ〝根性〟でどうにかなるバレーチームに行かせればいいのに…。」
杏「まあ、あの娘たちは昨日の功績もあるからあいにく今日は休みだからね～。」
柚子「それに、リーダーの磯辺さんの怪我もまだ治ってないことだし…。」

その頃、体育館でバレーの練習をしているアヒルさんチームは…

一同「へくしゅッ!!」

…一斉にくしゃみをしてしまっていた。
忍「どうしたんだ？みんな一斉にくしゃみなんて…」
あけび「誰か私たちの噂でもしてるのでしょうか？」
妙子「気のせいじゃないん？今日はこんなに寒いもんね。」
典子「よーし、もっと動いて、こんな寒さ根性で吹き飛ばそう！」
妙子・忍・あけび「おーっ!!」
かくして、練習を再開し始めた…。

やがて、両チーム共出動準備が整い、亜美のアナウンスと共にゲートが開く。

亜美《フォースゲートオープン、フォースゲートオープン……
それでは各戦車、パンツァー・フォー！》
亜美の戦車前進の掛け声と共にあんこうとカメさんチームの戦車は出動する！
暁人「遂に出動開始だな。」
《コネクト・プリーズ！》
暁人はウィザードライバーにコネクトウィザードリングをかざして現れた赤い魔法陣からマシンウィンガーを出現させ、丈司もショドウフォンで『馬』のモヂカラを宙に書いて白馬を出現させる。
そど子はマドカの愛車シャーロックに乗せてもらう事にした。
そして、各乗り物に乗ったマドカたちも出動を始める！
やがて一行は、大洗町付近の溶接工場にたどり着く。
現地は確かに、微量な吹雪が吹き始めていた。
柚子「本当だ…こんなにも季節外れの雪が降るなんて。」
桃「寒いっ！早く事を済ませて帰るぞ。」
杏「（呑気に干し芋を食べながら）まあ、そう焦らない焦らない。」
みほ「うん。まずはこの工場の人から事情を聞かないと…。」
早速マドカたちがみほたちと一緒に作業員から事情を聞いてみた。
なんでも、吹雪が吹き始めてから工場の機械の熱が無くなってしまい、作業が捗らなくなってしまったという。

マドカ「そうですか…。」
作業員「困ったなあ～…まだ溶接しなきゃいけない鉄もいっぱいあるのに、これじゃあ今日も残業ですよ。」
暁人「それは大変だなあ、おっちゃん。」
そど子「その現象が起こったのは、この工場だけですか？」
作業員「いやあ…他にも別の地域の工場でも起こったみたいなんだけど……イマイチ原因が分からなくてね。」
丈司「この辺一帯を探る必要があるな。」

麻子「そど子…。」
すると、麻子は呼びながらそど子の肩を指でつつく。
そど子「だからその名前で……ん？」
そど子も麻子に言い返している途中で何かに気付く。

その視線の先には、吹雪で姿がハッキリ分からないものの、何かがいるのが見えた。
吹雪の中人影にいち早く気付いた二人。流石は視力２．０あるだけはある。

二人に続いてマドカたちやみほたちもそれに気づく。
人影はやがてはっきり見えるようになり、何やら下を向き、黒いコートに身を包んだ男の姿が見える。
マドカ「あれは……ここの作業員ですか？」
作業員「いや、見慣れない顔だな……。」
作業員は男に話しかけてみる。

作業員「おいあんた！その格好で寒くないのか？」

すると！

〝グギャアアアオン！　ギャオオオオン！〟

男は下げていた顔を上に挙げたかと思うと同時に腕も挙げ、何やら人間のモノとは思い難い叫びを上げる！
驚愕するマドカたちとみほたち。
マドカ「⁉？何だ？この人間とは思えない声は！」
暁人「こいつ初対面相手に早速マジック披露してんのか？」
沙織「それで第一印象狙ってるつもり？」
何事も恋愛と結び付けてしまう暁人と沙織である（笑）

〝ゴゴゴゴゴゴゴ…〟

すると、突然激しい地震が起こり始める！

そど子「わっ⁉？何っ⁉？何が起こってるの⁉？」

〝ズゴーン〟

〝ギャイイィィアアアン！〟

やがて男の背後の地面が激しく砕け、中から巨大生物が現れる！
アザラシのような体型の巨体に体は黒い鱗で覆われ、頭部にある左右一対の角や牙のような赤い結晶が付いているのが特徴の巨大生物。
それは『核怪獣ギラドラス』である！

そど子「怪獣⁉」

現れたギラドラスは巨体を前進しながら暴れ始め、町の人々は怪獣出現により逃げ惑う。

優花里「ついにお出ましですね。」

みほ「教官、怪獣が現れました。攻撃許可を。」
亜美「オーケー！全戦車攻撃体制に！」
《怪獣出現、都市防衛指令、都市防衛指令》
みほは通信機越しに亜美に攻撃許可を得て、同時にアナウンスが流れる。
みほたちは急いで戦車に残り攻撃準備に入る。
マドカ「僕たちも行こう！」
《コネクト・プリーズ！》
暁人「おう！」
マドカはトライガーショット、暁人はウィザーソードガンを取り出す。
丈司はシンケンマルに秘伝ディスクをセットして回転させる。
丈司「ウォーターアロー！」
シンケンマルは青い光に包まれ変形し、青い弓型の武器・ウォーターアローへと変わった！
ウォーターアロー。それは本家シンケンジャーではシンケンブルー専用の武器であった弓であり、無数の水の矢を放つことが出来るのである。
みほ「攻撃準備、完了です！」
マドカ「了解！三方向から同時攻撃と行きましょう！」

マドカの指示により、暴れ回るギラドラスに対しマドカは前方、暁人と丈司は右側、みほたちの戦車は左側へと回り込む。

丈司「カウントスリーで行くぞっ！」
暁人「オーケー！」
マドカ「トライガーショット・イエローチェンバー！」

マドカは傍で見守るそど子を庇いつつ、トライガーショットを構える。

みほ「それでは、3、2、…発砲！」

〝ズドーン　ズドーン〟　〝ズガガガガガガ…〟

〝ドガーン　ズゴーン…〟

各方向から攻撃を開始する！
火球、弾丸、水の矢、そして戦車の砲撃が同時にギラドラスに命中して爆発していく。

〝ギャイイァァァン!?〟

だがギラドラスは怯まず、尻尾を振るったりして反撃していく。

みほ「後退してください！」
みほの咄嗟の指示により戦車は2両とも後退することで尻尾の直撃を逃れる。
ビルをも一撃で砕き、地面に叩き付けただけで地響きを起こすほど強力な尻尾。これを喰らえば戦車は一撃で砕け散るであろう。
暁人たちも人間離れした軽い身のこなしで尻尾をかわす。

次にギラドラスは頭部の結晶体を発光させ、するとそれと同時にまるで結晶体からエネルギーが送られているかのように大きく開けた口が発光する。

〝ズドンッ〟

マドカ「はっ！危ないッ！」

〝ドガーン〟

マドカ「うおあああっ！」 そど子「きゃああーっ！」

ギラドラスは前方にいるマドカとそど子目掛けて口から火球を発射し、二人は逃げながらも火球が背後の地面に当たり爆発した衝撃と爆風で転倒する。

マドカ「ここは危ない！早くシャーロックに！」

二人はなんとか立ち上がり、急いでシャーロックに乗り込む。
そしてマドカはシャーロックを運転しバックをしつつ窓からトライガーショット（ブルーチェンバー）を連射して攻撃する。
…つまりこれは片手でハンドルを操作し、片手で銃を連射しているという事になる。
正に恐るべし、マルチモードな男である！

ギラドラスは標的をシャーロックに変え、追いかけつつ火球を連射する。
マドカは片手だけのハンドルさばきでそれを避けつつなおも弾丸を連射する。

そど子「うぷっ……凄いですマドカさん……。」
激しく揺られるそど子は酔いそうになりつつもマドカの能力に感心する。

〝ズドーン〟

ギラドラスはみほたちの戦車の砲撃を側面から受け注意がそれそうになる。

だが次の瞬間、

〝パシーン　パシーン〟

〝ガラララララララララララ…〟

突然、どこから聞こえる鐘のような音とともに赤い光が現れる。

マドカ「！これは一体？……うっ!?」

するとマドカに異常が現れる！それは隣に座っているそど子も同じであった。
突然トライガーショットの連射が止まり、それどころかシャーロックの運転も覚束なくなっていく。

マドカ「……体に力が入らない……っ！」

苦しむマドカが妙な事を呟いたその時、ギラドラスは隙ありとばかりに火球を放つ！

〝ズドーン〟

〝ガシャーン〟

マドカ「うおあああぁぁぁ!!」そど子「きゃあああぁぁぁ!!」

火球は直撃はしなかったものの近くで爆発し、その爆風によりシャーロックが数回転してひっくり返ってしまった！

暁人「おいマドカ！そど子！大丈夫か!?」

マドカ「ああ……何とか……。」

そど子「大丈夫……あとその名前で呼ばな……、」

二人は何とか無事の返事をするが、ある事に気付く。

それは、ギラドラスはいつの間にか姿を消していた事だった！

そど子「ああっ！逃げられちゃったー……。」

〝ドサッ〟

そど子はそのままダウンしてしまった。酔いが限界に達してしまったのであろうか。

みほ「とりあえず撤退しましょう。」

一同はとりあえず引き下がることにした。

大洗女子学園に戻った一行。

亜美「みんな大丈夫だった？」

みほ「ええ、なんとか…。」

マドカ「誰か、そど子ちゃんをお願い。」
マドカがそう言いながらそど子を担いでやって来る。
そど子はまるで完全に脱力したかのようにダウンしていた。

暁人「？どうしたんだ？」
暁人がマドカに担がれているそど子の元に歩み寄り額に触れてみる。

暁人「!?ひでえ熱だ！」

なんと、そど子は高熱を出していた！
先ほどの現場の寒さの所為なのだろうか？
いや、それだとしてもそど子もみほたちと同じでそれなりの厚着をしていたし、その上みほたちは大丈夫だったのにそど子だけダウンしたという事に不自然さが目立つのだ。

沙織「大丈夫？辛そうだけど…。」
華「とりあえず家に帰した方が良さそうですね。」
みほ「私たちが連れて帰ります。」
マドカ「ああ、頼んだよみほちゃん、みんな。」

優花里「そして、しばらく敵について分析する必要がありますね。」

麻子「そういう事だ。送ってやるからなそど子。」
……いつもなら麻子が〝そど子〟と呼ぶと、「そのあだ名で呼ばないで！」というそど子の声が飛び出すはずなのだが、よほど元気がなくなっているのか、そうやって突っ込むことも出来ない。
そど子の深刻そうな状態に一同の不安は募っていた。

亜美「それもそうね……よし、一同一旦解散！」

かくして、グラウンドに集合していた戦車道女子たちは一旦解散した。

マドカたちも自分たちの豪邸に戻り、みほたちあんこうチームはそど子を彼女の家に帰すことにした。

豪邸に戻ったマドカたちは、シャーロックに取り付けていたカメラに撮られた先ほどの戦闘の一部始終の映像を見ながら敵についての分析をしていた。

《ガオディクションを起動します。》

マドカは暴れるギラドラスの映像にスパークレンスを向け、あらゆるモノを解析することが出来る機能・ガオディクションを起動させる。

マドカ「奴の意思の大半は〝使命感〟、〝忠誠心〟だけど……一体何が目的なのだろう？」

どうやらギラドラスの映像からの解析結果だけでは何も掴めない様子。

丈司「奴の思考が使命感や忠誠心なら、裏で何者かが操っている可能性が高いかもな。」

暁人「……なあ、そういやあさっきマドカ、突然シャーロックごとひっくり返ったな、一体なのがあったんだ？」

マドカ「いやあ、それが…突然鐘のような音と共に赤い光が現れて、その瞬間体の力が抜けて……

……ん？」

その時、マドカは何かに気付いたかのような反応をする。

暁人「？どうしたマドカ。」

マドカ「赤い光……脱力……そしてそど子の体調不良……も

しかして。」

マドカは何かに勘づいたのか、映像を赤い光が現れたところまで進め、再びスパークレンスを向けてガオディクションを起動させる。

《対象赤色光、解析しました。》

マドカ「……やっぱり……。」

果たしてマドカたちがたどり着いた手掛かりとは？

一方で、みほたちあんこうチームはそど子を送った後買い出しに出かける。

そど子のためにみんなでおじやを作ることにしたのだ。

みほ「多分消化の良いものを入れた方がいいかもね。」

沙織「にんにくも入れましょ。こういう時こそ体にいいし。」

麻子「放っといても元気になりそうだがな、そど子だし。」

優花里「まあまあそう言わずに。作りましょうよ。」

華「早く元気になってもらうために、私たちも力を貸しましょう。」

沙織「あ、みぽりん、後でホームセンター寄ってもいい？気分的に新しい戦車のデコレーション探してみたいし。」

みほ「いいよ。」

一行はスーパーの買い出しを終えた後、ホームセンターに寄る。

沙織が新しいデコレーションを探している間、みほは店内をぶらぶらしようとする。

その時、

《次のニュースです。今朝11時半ごろ、大洗町付近の田端溶接工場で謎の人物と怪獣が現れました。》

ホームセンターにあるテレビから、今朝自分達が向かった場所についてのニュースが流れていることに気付き立ち止まり、他の者も続いてテレビに見入る。
沙織「これ、今朝私たちが向かった所じゃない？」
優花里「あ、本当ですね。」

《怪獣の方は大洗戦車道の活躍により撤退。なお、謎の人物については工場長の話によると、以前に田端溶接工場の作業員で、５年前に機械のシステムトラブルによる爆発事故によって死亡した『星野明』氏に似ていると言われていますが、正確にどんな人なのかはまだ掴めておらず……》

ニュースのアナウンスと共に、その星野明（ほしのあきら）の写真が映し出される。
見てみると確かに、どこか暗いような表情や髪形などが、現場にいた謎の人物とそっくりであった！
驚愕するみほたち。

みほ「確かに、写真と実際見た人がそっくりだね。」
華「でも、この方は死んでるらしいですし…。」
優花里「何だか不気味ですね。」
麻子「他人の空似じゃないのか？」
みほ「まあ、確かに世界には自分とそっくりな人が3人いるとも言うしね。
でも、やっぱ気になるわね。」
沙織「これは……」
〝カチャッ〟（所謂気合が入って眼鏡をかける音）
沙織「一度潜入捜査をした方がいいかもね。」
みほ「でもどうやって？」
沙織「ふふふ、私に任しんしゃーい。」

すると自信満々気な沙織は、スマホで電話をかける。

暁人「ん？沙織から電話だ。」

暁人はいきなりで困惑しつつも電話に出る。

暁人「もしもし、どうした？沙織。」

沙織「ふふふ、折り入って頼みがありま～す　」

そして翌日、

ひょんな事から、暁人と沙織がデートする事になった!?

……と、見せかけ、正確には変装して田端溶接工場へ潜入捜査に行くことになった。

沙織「と、言うわけで、すいませんが、よろしくお願いします、暁人さん　」

暁人「んじゃ、行くぜ？」

《ドレスアップ・プリーズ！》

ドレスアップウィザードリングの魔力により、二人はスーツ姿に変わる。

今回の潜入捜査は、就活する大学生の振りをして田端溶接工場を訪れ、あの人物の様子を探るという事である。

暁人「おいまさか、俺がこういう風にドレスアップで簡単に衣装を出せるから俺を選んだんじゃないだろうな？」

沙織「いやいや、それだけじゃありませんよ。それだ・け・じゃ　」

暁人「？……まあいいか、行くぞ。」

二人はマシンウィンガーに乗って工場へと向かう。

後ろに乗っている沙織に抱き付かれる状態でバイクを駆ける暁人。

暁人（はあ、こうして女の子とランデブーするのいつ振りかな……でもこうして見ると、俺たちカップルみたいじゃねーか……ま、いっか。女の子と二人っきりなんて俺としちゃあ嬉しいぜ。）

暁人が心でブツブツ呟いていたその時、沙織は後ろから暁人の顔に顔を近づけ始める！

これはもしかして……!?

熱いキッｓ……

沙織「頑張りましょうね、暁人さん。」

沙織は耳元でちょっと呟いただけであった。

暁人は期待外れだったのか？がくってなりそうになるが、バイク運転中なのでなんとか踏ん張る。

暁人「お、おう。」

暁人（ちょっと残念……んま、もしもの事が合ったらこの子を守ってやるぜ。）

そう心で呟いた暁人は、その残念感を振り払うかのようにバイクを加速していった。

遂に工場に着いた二人。

工場周辺はやはり昨日と同じく、吹雪は降っていないが寒い気候に見舞われていた。

暁人「ふぃ～…やっぱ寒いな。ちゃっちゃと終わらせるぜ。」
沙織「はい。暁人さん　」
暁人「？お前今日やけに張り切ってんな？」
沙織「え？……い、いやー私、ちょっとワクワクするんですよ。あの男の正体を知るのが。」
暁人「？…そ、そうか、じゃあ、俺たちの共同作業で、男の化けの皮を？がしてやろうぜ。」
沙織「（きゃー男の人と共同作業だなんて～）じゃあ、行きましょう！」

その時、

男「そこで何をしている？」

突然男の話しかける声が聞こえ、二人は振り向く。

なんとそこには、自分たちの目的の男・星野明らしき人物が立っていた！
服装は昨日と違って工場の作業服である。

暁人・沙織（えええええええ!?）

いきなりの、星野明の目の前の登場に二人は驚き、心で声を上げる。
だが、すぐさま仕切り直して早速話しかける。

沙織「あ、あの！私たち、就活のために見学に来たんです。」

明「……そうか……ちょっと俺について来い。」

沙織「いきなり面接なのかな？」
暁人「まさか、とにかくついて行くぞ。」

暁人と沙織はとりあえず明について行く。

二人はとある部屋へと案内される。ドアには『星野明』と書かれた名刺が張られていたため、恐らく明の部屋であろう。

中に入った二人は椅子に座る。

しかし、妙な事に既に他界した人の部屋だというのにこけしや花など様々な物が飾られているのである。

……そして何よりも、この部屋の中はやけに暑いのである！

それもまるでサウナに入ってるかのように暑いのである。

いきなり外とは真逆の温度の部屋に入った二人は驚く。

沙織「…なにこれ？」

暁人「あっちっ!? 何でこの部屋ばかに暑いんだ!?」

明「すまない。この温度が。俺にとって丁度いいのだ。」

暁人「え？…そ、そうです…か。」

沙織「こうなったら暑さに耐えつつ、早く突き止めた方が良いわね…。」

暁人「ああ。……ん？」

暁人は、部屋に飾られている花に目が付く。

暁人「お花……綺麗ですね。……お日様に当てずにこの暑い部屋に閉じ込めといていいのですか？」

明「花には……日の光だけじゃなく、時には熱が必要な事もあるのだよ。」

暁人「あ……ああ、そうですか。」

暁人は明の妙な返事に困惑しつつも返事をする。

明はなおも喋り続ける。

明「知ってるか？……世の中には熱と冷気、二つの温度がある……

人々は夏が来れば冷気を求め、冬が来れば熱を求める。……
だが春と秋は、そのどちらを求めればいいか分からない……それなら、いっそのことどちらかの温度に傾かせてやりたいと俺は思ってんだがね。」

沙織「はあ……それでこんなに部屋を暑くしてるワケですね？」
沙織は汗を拭きつつも明の意味深気味な発言に反応する。

明「思い切り寒い春の方が、その分思い切り熱を求められる……その方が楽ではないか？」

暁人「そうか？むしろ春と秋の方が、丁度良い温度だと思うけどなぁ。」

明「ふんっ！俺は嫌いだねぇ。中途半端な温度の春と秋は。
だからどちらも、いっそ寒くなっちまえばいいんだ。」

暁人「それは嘘だね！」
明「……なにっ？」
暁人「さっき工場長のおっちゃんから聞いたぜ？

星野明は、「春が好きな季節だった」……ってな。」

明「何だと？」
「春が嫌い」……その発言が致命的となってしまった明。
更に沙織が畳みかける。
沙織「本物の明さんは、５年前に亡くなっている筈です。
……貴方は何者なんですか？」
明「くっ……！」

正に、口は禍の元。たちまち二人に追い込まれた明。

明「さあ……俺は一体何者なんでしょう……ねっ！」

〝ドシュッ〟

暁人「はっ、危ない！」

〝ドーン〟

明は突き出した手の平から弾丸を発射！暁人が沙織を庇って横に転んだことで間一髪それを避ける。

暁人「待てっ！」

暁人は逃げようとする明の腕を掴むが、次の瞬間、明は逆に暁人の腕を掴んで一本背負いで投げ飛ばす！

暁人は咄嗟に空中でお得意のエクストリーム・マーシャルアーツの動きを取って体制を立て直して着地する。

明はその隙に部屋を出て外に出て逃走しようとする。

暁人「この強さ、人間じゃないぞ……ひとまず追いかけよう！」

沙織「ええ。」

暁人と沙織も外に出て明を追いかけ始める。

沙織「待ちなさーい！」

二人に追いかけられる明は高笑いしながら逃げていく。

暁人「逃がすかっ！」

〝ズガガッ〟

暁人は追いかけながらウィザーソードガンから弾丸を発射する。
すると、明はなんと振り向きながらの右腕の一振るいで弾丸を打ち落としてしまった！
銃の弾丸を腕で弾く事で明が人間ではない事が明確に分かった二人は、振り向いた明を前に立ち止まる。
気が付くと、先ほど弾丸を弾いた腕が奇怪な姿に変わっていた！

暁人「お前、やはり人間じゃねえな!?」
明「フフフ……そうだ！俺は超獣人間コオクスだ！

いえーい!!」

遂に正体を明かした明は、右手を揚げると同時に掛け声を上げると光に包まれ徐々に変形していき、
やがて、赤い牙と頭部のトサカ・ファイヤーボード、岩石のような両肩が特徴の真の姿『超獣人間コオクス』の姿となった！

〝グギャアアアオン　ギャアアアオン〟

コオクスは正体を明かすと共に、不気味な鳴き声を発する。

沙織「うそ……あんなイケメンに化けてたのが、こんなに禍々しいなんて…。」
暁人「やっぱり……アンタは一体何を企んでいる!?」
暁人は鋭い視線と共にコオクスに銃口を向ける。

コオクス「分かるか!?　このマグマを包んだ、熱気あふれる惑星（地球）を！
自然やライフラインが安定なのも、この地球の熱のおかげだという

のに！……
だが人々は季節が変われば……夏になれば都合よく熱を拒絶し、冷気を求める。
そんな人々に、この星の膨大な熱は勿体無さすぎる！
……だから俺が全て奪い、侵略兵器の材料にしてやるよ。　どうだ？その方が、効率が良い使い方だろう？」
一見正論を言っているかのように思われるが、言い換えるとコオクスの目的は、地球上の熱源を全て奪い、侵略兵器の素材にする事なのである！
暁人「なにっ!?」
〝ゴゴゴゴゴゴゴ…〟
〝ズドガーン〟
〝ギャイイイィアアアン〟
コオクスの呼びかけに応え、地震を起こしながらコオクスの背後から地面を突き破り、再びギラドラスが現れた！
沙織「また現れた！」
暁人「やはり……お前とあの怪獣は協力関係だったってワケか！」
コオクス「暴れろ！ギラドラス！　まずはこの街の熱源を徹底的に全て奪ってしまえ！」
コオクスの指示によりギラドラスは暴れ始める！

そしてそれと共に再び空が更に曇り、吹雪が吹き始める！

暁人「やはり、解析の通りだぜ。」

沙織「解析？」

暁人「ああ。さっき豪邸で色々解析したんだ。

この怪獣はなんでも、気象をコントロールする能力を持っているんだ。」

沙織「え!?そんな事出来るの!?」

そう、春だというのに大洗町とその付近の地域だけ寒くなり、吹雪が吹き荒れるなどという不可思議な気象の正体は、ギラドラスの気象コントロール能力によるものだったのだ！

暁人「だが、驚くべきところはそこだけではない！

奴の顔に、四つの結晶体があるだろ？」

暁人はギラドラスの頭部の結晶体を指差す。

暁人「奴は気象をコントロールすると同時に、その気象の温度を大気ごとあの結晶体に取り込んで光球のエネルギーにする事が出来るんだ！」

ギラドラスの隠された恐るべき能力を語る暁人。

なんとギラドラスは、気象の温度を頭部の結晶体で吸収して光球のエネルギーに変えるという恐るべき能力も有しているのである！

つまり、今回は熱を吸収していたため火球を吐いているが、他にも寒い気候の場合はその冷気を取り込んで冷凍弾を吐き出す事も出来るという事である！

沙織「そんな……じゃあ、この地域が寒くなったのは…、」

暁人「ああ、ギラドラスが気象をコントロールすると同時に熱を奪う事によって、この地域だけ冬と同じくらいの冷気だけが残されたというわけなんだ！」

沙織「じゃあ、早く奴を止めないと地球全体の熱が無くなっちゃう

わけ!?」
暁人「ああ。その内地球全体が氷河期になっちまうかもな！
だが分かった事がもう一つある！」
沙織「え？」
暁人「それは……そど子の突然の体調不良に関わることだ！」
暁人が気になる事を言い始めたその時！
コオクス「おいおい、そんなに無駄話しといて……いいのかなっ！　ふんっ！」
コオクスは隙ありとばかりに暁人と沙織目掛けて頭部のファイヤーボードや指先からロケット弾を放つ！
暁人「はっ！」
沙織「！きゃあっ！」
〝ズドガガーン〟
無数のロケット弾は二人の周りを包み込むように大爆発した！
コオクス「はははははは！隙を見せるからそうなるのだ！」
コオクスが大きく広がる爆風を見て高笑いをしているその時、
《ディフェンド・プリーズ！》
爆風の中から鳴り響く音声にコオクスは気づく。
すると爆風の炎が何かに吸収されているかのように消滅し始め、やがてその炎を吸収しながら赤い魔法陣が姿を現す！
そう、暁人は間一髪のところで念のために填めておいたディフェン

ドウィザードリングをウィザードライバーにかざしてその魔力を発動させていたのだ。
つまりこれはその魔力で作った魔法陣型の防壁なのである。

〝スパンッ〟

《フレイム・プリーズ　ヒー・ヒー・ヒーヒーヒー！》

続けて暁人は変身リング・フレイムウィザードリングを填めてドライバーのハンドオーサーを傾け変えてかざす。
そしてディフェンドウィザードリングの防壁がそのまま変身の魔法陣に変わり、暁人を通過し始める。

そして暁人は魔法陣を潜り抜けて仮面ライダーウィザード（フレイムスタイル）へと変身完了した！

暁人「さあ、君は早く安全な所へ！」
沙織「ええ。」

ウィザードの指示により沙織は急いで避難しようとする。
ウィザードがウィザーソードガンを手にまずはギラドラスに向かって行こうとする。

コオクス「おーっと！そうはいかねえよ！」
するとコオクスは沙織に右手の指先を向ける。

〝パシンッ〟

〝ガラララララララララ…〟

すると、鐘の音と共にコオクスの指先から閃光と共に赤い光が沙織

に放たれる。
赤い光を浴びた瞬間、突然それを見た沙織の動きが止まる！
沙織「くっ……!?」
暁人「はっ、いかんっ！」
沙織の危機に気付いたウィザードは沙織を救出しに行こうとする。
〝ギャイイイアアアン〟
〝ズドーン〟
暁人「ぐおああああっ！」
だが、そこにギラドラスの尻尾攻撃がウィザードの間近の地面に直撃し、その衝撃波によりウィザードは吹っ飛ばされてしまう。
ウィザードが吹っ飛ばされた隙にコオクスはなおも妙な光を沙織に浴びせ続ける。
沙織「くっ……体に力が……入らない……。」
やはり沙織も、マドカたちが浴びた時と同じく脱力感を感じている様であった。
そしてそれと同時に沙織は膝を付き始める。身体の力を徹底的に抜かれてしまったのであろうか？
暁人「沙織……！」
ウィザードはなんとか瓦礫から抜け出し沙織を救出しに向かおうとするが、既に間に合うかどうか怪しい状況になっていた。
コオクス「ふふふ、そろそろ止めを刺すか。　ギラドラス！」

コオクスのトドメの指示により、ギラドラスは火球を放とうと結晶体を発光させる。

絶体絶命！

その時、

〝ズドーン　ズドーン〟

〝ドガガーン〟

〝ギャイイィアアン!?〟

突然ギラドラスは別方向からの攻撃を受け被爆し、注意がそれたことにより火球は未発射に終わる。

暁人「んっ!?」

コオクス「何だとっ!?」

ギラドラスは振り向き、二人もその方向を振り向いてみると、そこには2両の戦車が止まっていた！

その戦車はＩＶ号戦車Ｄ型と３８ｔ戦車Ｂ型。あんこうチームとカメさんチームの車両だ！

間一髪のところで到着が間に合ったのである！

暁人「良い所に来てくれるじゃねーか。」

沙織「みぽりん……みんな……。」

沙織は喜びの表情を浮かべるが、だいぶ元気がなくなっていたのか、声は弱弱しくなっていた。

そして沙織はその場でばたっと倒れ込んでしまった。

暁人「沙織っ！」

コオクス「小娘にトドメを刺すチャンスだ！」

コオクスが沙織に向かって行こうとするその時、

丈司「はっ！」

コオクス「なにっ!?」

そこに丈司が変身したシンケンレッドが飛び込み、横に持つシンケンマルで抑え込む。

丈司「女（おなご）には、指一本触れさせぬ！

はっ！」

〝ジャキーン〟

コオクス「ぐおあっ!?」

シンケンレッドは横一直線の斬撃でコオクスを吹っ飛ばす。

その間にマドカが横合わる沙織を抱きかかえてあんこうチームの戦車に運んでいく。

マドカ「沙織ちゃん大丈夫？……うわっ!?ひどい熱！」

なんと沙織も高熱でダウンしていたのだ！

みほたちも急いで寄って行く。

みほ「沙織さん大丈夫？」

優花里「すごく辛そうですね…。」

華「しかし園さんと言い、どうしていきなり高熱を?」

マドカ「……それは、あの怪人（コオクス）の光によるものだ。」

みほ「えっ?」

マドカは語り始める。そど子や沙織が突然高熱でダウンしたワケを。

マドカ「奴の指先から放つ赤い光は『脳波攪乱電波』。

その光を見ると、不思議な鐘の音が聞こえると同時に体全体が麻痺し、

やがて体の力が奪われ抜けてしまうんだ。」

マドカの語った恐るべきコオクスの能力にみほたちは驚愕する!

マドカ「彼女たちが高熱を出したのは、その電波によって体の力を抜かれた事によって、その分体の免疫力も下がってしまったからだ。」

優花里「そっか!その状態で怪獣の起こす吹雪を浴びたことで……。」

みほたちは早くも理解する。

そう、そど子と沙織はコオクスの脳波攪乱電波によって、力と共に免疫も大きく下がってしまった状態でギラドラスの起こした吹雪や冷気を浴びたことにより、免疫を失った体がその冷気に耐え切れず一気に高熱を出して体調を崩してしまったという事である。

コオクスはそうする事によって、人間からも熱を奪おうと企んでいたためギラドラスを引き連れて来たのである!

マドカ「今回は怪人と怪獣の連携が上手く取れている……うかつだった……。」

マドカは敵ながらコオクスたちの連携に感心しつつその企みに早く気付けなかったことを悔やむ。

コオクス「その通りだ！そうすれば、人間からも熱を奪えると同時にダウンさせることで抵抗できなく出来る！

正に完璧なワケだ！今回の作戦は。」

コオクスはシンケンレッドと交戦しつつ自身の作戦の完璧さを自慢げに話す。

丈司「何だと!?

おのれ……侵略のために女（おなご）をも苦しめるとは……！」

静かに怒りを感じるシンケンレッドは、なおもシンケンマルを振るいコオクスに立ち向かう。

沙織「マドカさん……みんな……ごめんね……。」

沙織は弱弱しくもマドカたちに詫びる。

みほ「沙織さん、どうして……。」

沙織「勝手に……潜入なんか実行した私が……馬鹿だったのよ……。」

無理に笑顔を作ってまで自身の行動の軽率さを感じて詫びている沙織にみほは困惑する。

その時、

暁人「そんな事ねーよ！」

ウィザードが叫びと共に歩み寄り、それにマドカとみほたちも気付

く。
そのウィザードの表情はどこか勇ましくなっており、それはいつもの軽い感じではなく、強く決心をした戦士のようであった。
そしてウィザードは沙織の元に歩み寄ると、しゃがんで語り掛ける。

暁人「お前はよく頑張ったよ……だから自分を責めんな。すげえよ……自分から考えて行動できるなんてな。」

沙織「！……暁人さん……。」
沙織は自信の行動をウィザード（暁人）に褒められ少し驚くと同時に嬉しそうな顔になる。

沙織「私ね……あの時、嬉しかったの……初めて暁人さんたちに助けられた…あの時……。」

〈回想〉

暁人「その涙、全て宝石に変えてやるぜ。」

暁人「大丈夫かい？嬢ちゃんたち。」

（どちらも第1話参照）

〈回想終了〉

沙織「私ね……あんな風に、男の人に助けてもらったの、、、案外初めてだったりして……
だから、嬉しくて……だから今度は私が、、、少しでも暁人さん達の役に立ちたかったの……。」

沙織の本当の想いを聞いたウィザード（暁人）は、険しい表情からゆっくりと嬉しそうな表情へと変わっていく。

暁人「……ありがとな、沙織。
だがもうこれ以上喋るな。余計しんどいだけだ。
……後は、俺たちに任せてゆっくり休め。」
沙織「暁人…さん……。」

暁人「安心しろ。必ず悪を倒す。……
俺が最後の希望だ。」

ウィザードはそう言いながら、沙織の指にウィザードリングを填めてベルトにかざす。

《スリープ・プリーズ！》

ウィザードが沙織に填めたのはスリープウィザードリングであった。
指輪の魔力により、沙織は眠気を感じ始める。

暁人「いい夢……見ろよ。」

ウィザードは、とある大物芸能人のような台詞を言いながら、そっと閉じかけている沙織の目に右手を添え、まぶたを閉じるようにゆっくりと下にスライドさせる。
それにより沙織は目を閉じ、やがて完全に眠りについた。

沙織を眠らせたウィザードは立ち上がる。
暁人「沙織は任せたよ。」
みほ「はい。沙織さんを毛布にくるんで戦車の中で寝かせましょう。」

沙織をみほたちに任せたウィザードはマドカの方を振り向く。
暁人「行こうぜ、マドカ。」
マドカ「ああ。……あ、その前に訂正する事がある。」
暁人「ん？」

マドカ「〝俺が〟……じゃなくて、〝俺たちが〟最後の希望、だろう？」

暁人「ふんっ……そうだったな。」

ギラドラスはなおも口からの火球や、巨体を活かした進撃で暴れ続けている。

マドカ「あいつ（ギラドラス）は、僕に任せて。」
マドカはそう言うとギラドラスの方へ向かって駆けて行く。

そして立ち止まりスパークレンスを取り出す。

マドカ「沙織さんの想いに……僕も応える！

ティガー!!」

〝キャイイーン〟

（ウルトラマンティガ登場ＢＧＭ）

マドカはスパークレンスを天に揚げ、先端のティガのプロテクターに似たパーツが左右に展開すると共に溢れ出る光に包まれ、その光の中からウルトラマンティガ（マルチタイプ）が右拳を突き出して飛び出す。

〝ズドーン〟

遂に登場したティガ（マルチタイプ）は、激しく土砂や土煙を巻き上げながら着地する。

ギラドラスもそれに気づき振り向く。

ティガは構えを取ると、ギラドラス目掛けて駆ける。

ギラドラスも巨体を前進させながら頭突きを繰り出すが、ティガは頭部の結晶体を掴むことでそれを受け止め押さえ込む。

そしてそのまま下顎に右膝蹴りを打ち込み、右の手刀を頭部に叩き込んで後退させる。

ティガは次に受け身を取って前転しながらギラドラスに右足蹴りを叩き込む。

ギラドラスは尻尾を振るってティガの足をすくおうとし、ティガはそれを跳躍してかわし、ギラドラスの背中に跳び付く。

そしてそのままチョップを連打するが、ギラドラスも負けじとティガを振りほどこうと暴れる。

やがてギラドラスは自信に跳び付いているティガに尻尾攻撃を連打する。

尻尾の攻撃を背中に数回受けたティガは一旦離れて距離を取る。

だが、その隙にギラドラスの吐いた火球を胸部に喰らって爆発し吹っ飛ぶ。

ティガはすぐさま立ち上がるが、さっきよりも吹雪の勢いが激しくなり、思い通りに動くのも困難になっていく。

ギラドラスはその隙をついて結晶体に熱エネルギーを集中させ、それにより結晶体は赤く発光する。

そしてその結晶体を活かした走り込んでの頭突きを繰り出し、それを胸部に喰らったティガは爆発と共に吹っ飛び倒れ込む。

ギラドラスは仰向けのティガにマウントを取り、更に頭突きを打ち込む。

ギラドラスの起こした吹雪と未知の攻撃によりたちまち苦戦し始めるティガ。

〝ピコン　ピコン　ピコン…〟

吹雪による冷気の影響か、早くもカラータイマーが赤く点滅を始める！

大抵のウルトラ戦士は光や熱のエネルギーで戦うため、その分寒さに弱いという弱点を持っているのである。

丈司「はっ！いかん、このままでは…」

ティガの苦戦に気づいたシンケンレッドは、組み合っていたコオクスの腹部を蹴ることで一旦離れる。

そして、シンケンマルにセットしていた秘伝ディスクを回す。

丈司「ウォーターアロー！」

シンケンレッドはシンケンマルが変化したウォーターアローの矢を大きく引き絞る。

丈司「明鏡止水！」

シンケンレッドは掛け声と共に、ウォーターアローでの必殺技・明鏡止水を放つ！

これは、厚さ５０センチのコンクリートをも射抜くことができる水の矢である。

〝ズドーン〟

水の矢の直撃を胴体に受けたギラドラスは少し怯む。

その隙にティガはギラドラスの胴体を蹴ることでマウントから逃れる。

「チャーッ！」

〝ズガーン〟

立ち上がったティガは体制を立て直すと、ギラドラスに向かいながら回し蹴りを放ち、頭部の左側面の結晶体を砕く！

その動きは正に、先ほど自己紹介で披露したモノと同じ要領であった。

正に、マドカの超絶身体能力がそのままティガに反映されているのだ！

構えを取るティガ。しかし冷気により相当なエネルギーを消耗しているのか、膝をついてしまっている。

その隙に怒ったギラドラスはティガに火球を放とうとする。

〝ズドーン〟

そこにあんこうとカメさんチームの戦車が砲撃を当てて注意をそらす。

麻子「こっちだ。」

桃「さあ、当てれるもんなら当ててみろ！」

柚子「（満面の笑顔で）桃ちゃん珍しく当てたね。」

桃「（頬を赤くして）やかましいわっ！」

杏「（干し芋を食べながら）みんながんばれー」

あんこうとカメさんの戦車はなおも砲撃を打ち続けながらギラドラスを誘導し出す。

作戦通り、ギラドラスは火球を放ちながら戦車を追いかけ始めた。

シンケンレッドはシンケンマルの獅子ディスクを回させ、刀身に炎を纏わせる。

丈司「シンケンマル・火炎の舞！」

シンケンレッドは炎の斬撃・火炎の舞をコオクスに袈裟懸け、水平にと浴びせて吹っ飛ばす！

そしてコオクスが地面を転がってる隙に獅子折神のエンブレムを取り出す。

丈司「……試してみるか。

獅子折神！」

シンケンレッドはエンブレムを置いて『大』のモヂカラを書いて発動させる。

丈司「折神大変化！」

エンブレムはシンケンレッドを入れながら巨大化し、獅子折神へと変形する。

獅子折神はティガの元へと飛んで行く。

コオクス「させるかっ！」

コオクスが獅子折神に脳波撹乱電波を浴びせようとしたその時、

〝ズキューン〟

コオクス「⁉？くっ…」

突然どこからか飛んで来た弾丸を受けて不発に終わる。
コオクスが弾丸が飛んで来た方を振り向くと、そこには一人の人影が立っていた。

その人間は黒と紫のライダースーツ風のジャケットを見に纏い、顔つきはシャープだがどこか冷たい表情をしている。
そして手には、バイクのハンドルグリップにも似た拳銃型のツールを持っている。

コオクス「何者だ貴様ぁ！」
動揺しつつもコオクスは男に問いかける。
???「……俺が誰なのか知る必要はない……これから倒される者に。」
そう言うと男は何処へと歩き去って行った……。

コオクス「…誰だか知らねーが、俺が倒されるだと⁉？
そんなのあり得ぬ！　やれギラドラス！」

コオクスの指示を受けたギラドラスは獅子折神目掛けて火球を放つ。
シンケンレッドの操縦する獅子折神はそれをことごとく避け、返しに火炎攻撃を仕掛ける。
ギラドラスが火炎を回避した隙に再びティガの元へ飛ぶ。

丈司「マドカ！試してみたい事があるがいいか⁉？」
マドカ「えっ？…試してみたい事？」
丈司「ああ、もしかしたら、逆転の切り札になれるかもしれない！」
マドカ「……分かった。やってみてくれ！」

丈司「よし。行くぞ。
侍合体！」
シンケンレッドは宙に『合』を書いて『侍合体』のモヂカラを発動させる！
すると、獅子折神は一旦分解し、ティガの身体へと装着されていく！
そしてやがて、獅子折神はティガの上半身の首から下、腹から上を覆うような鎧になり、ちょうどカラータイマー辺りと思われる中心には獅子折神の頭が突き出たようになる。
獅子折神はティガの鎧として装着されたのである！
マドカ「おおっ⁉？　丈司、これは一体…」
暁人「アンベリーバボー⁉？」
丈司「思いつきで一か八かでやってみたが、大成功だ。」
マドカ「…不思議だ……さっきまで寒かったのに、全く感じない！」
鎧となった獅子折神から送られる炎のエネルギーにより、ティガは冷気を防げているのである！
マドカ「これならいけるよ、よく考えたね丈司。」
丈司「まあ、咄嗟だがな。
名付けて『ウルトラマンティガ（侍獅子武装）』！」
今ここに、ウルトラマンティガ（侍獅子武装）が誕生した！
合は本来、折神たちをシンケンオー、ダイテンクウ、サムライハオーなどに合体させるためのモヂカラであるが、シンケンレッドだけである丈司が一人で複数の折神を操るのは不可能である。
そのため、この合体は獅子折神をティガと合体できないかと丈司が

咄嗟に考えて、思いついたモノなのだ！

マドカ「よし、行くぜっ！」

ティガは構えを取る。

コオクス「何だ⁉？それは……ギラドラス、砕いてしまえ！」

ギラドラスは火球を放つが、ティガは避けるどころかそれを胸の鎧で受け止め、そして弾き飛ばしてしまった！

コオクス「なにっ⁉？」

ギラドラスは続いて突進を繰り出す。

ティガはなんと片手で顔の結晶体を掴むことでそれを受け止め、そのまま両腕で頭部を掴んで背負い投げで地面に叩きつける！

次にティガは右拳に獅子折神から送られる炎を纏わせ、渾身のアッパーカットを放つ！

マドカ「ファイヤーカウンター！」

〝ズゴーン〟

炎のアッパーを受けたギラドラスは上空高く吹っ飛ぶ。

〝キュビーン〟

「ん～はっ！」

ティガは、侍獅子武装のままスピードやテクニックに優れた俊敏形態・スカイタイプにチェンジして空高く飛び立つ！

そしてギラドラスが吹っ飛んだ高さまで飛ぶとそこに静止する。

ティガは両腕を胸の前で交差させた後、瞬時に左右に伸ばしてから上に挙げてエネルギーを集約し、両手を左腰に置いてから、右腕で投げつけるように光弾を素早く放つ！

これは、ティガ（スカイタイプ）の必殺技・ランバルト光弾のポーズなのだが、今回は装着している獅子折神の炎の力も合わさっていることにより、炎の力が加わり色も燃える炎のように赤くなったランバルト光弾・『ランバルト火炎弾』である！

マドカ「ランバルト火炎弾！」

〃ドシュシュッ〃

〃ズガーン〃

〃ドガガガーン〃

炎の光弾で貫かれたギラドラスは大爆発して消し飛んだ。

すると、ギラドラスを撃破した事により同時に気象コントロール能力が切れ、吹雪が止み、黒雲で曇っていた空も晴れ始め雲が消える穴から日差しが差していく。

マドカ「…やった……！春が戻って来る。」

丈司「改めて、日本の夜明けぜよ。」

みほたち戦車女子たちも、街に春が戻って来るのを喜び合う。

優花里「やりましたね皆さん！」

華「ええ、もう厚着する必要はありません。」

麻子「眩しい……。」

杏「おお、これぞ真の夜明けだねー。」

桃「ふん、これも寒さに耐えて頑張っただけはあるな。」

柚子「それ、一番寒がってた桃ちゃんが言う？」

みほは眠っている沙織に囁くように呟く。

みほ「春が戻ってきますよ……沙織さん……。」
晴れ始める黒雲から差し込む温かい日差し浴びるその沙織の寝顔はさっきとは違い、どこか気持ちよさそうになっていた。

コオクス「こうなったら俺自身が手当たり次第破壊するしかないか…。」
ギラドラスが倒された事により、自身が暴れようとコオクスが巨大化しようとしたその時、

暁人「待てっ！」

コオクス「ああん？」

何処からか鋭い叫び声が聞こえ、コオクスは振り向く。

そこには日差しを受け、戻って来る春の風でマントを翻しながら悠然と歩みを進める仮面ライダーウィザードの姿があった。
宝石状のマスクにより正確には見えないが、その表情からはどこか静かな怒りを感じた。

コオクス「何だ貴様ぁ!?」

暁人「…お前はこの場で、俺が倒す。」
コオクスは威圧しようと声を上げるがウィザードはそれを物ともせず打倒宣言をする。

コオクス「貴様がこの俺を倒すだと!?」

暁人「そうだ……よくも女の子たちを苦しめてくれたな。この借りは高くつくぜ？」

《コネクト・プリーズ！》

そう言うとウィザードはコネクトウィザードリングをリードし、魔法陣からウィザーソードガンを取り出す。

そして精神統一をするかのようにゆっくりと構えを取る。

暁人「さあ、ショータイムだ！」

（ＢＧＭ：Ｌｉｆｅ　ｉｓ　ＳＨＯＷ　ＴＩＭＥ（ｆｕｌｌ））

ウィザードはウィザーソードガンを手に颯爽と駆け始める。

コオクス「ほざけ！　はああっ！」

コオクスは両手の指先からロケット弾を連射して迎え撃ち、ウィザードはそれをウィザーソードガンを片手で回して弾き飛ばしたり、得意のエクストリーム・マーシャルアーツの跳躍でそれをかわしていき、やがて跳躍して近くの壁を蹴り、頭部の側面に右横蹴りを打ち込む。

コオクスは接近戦に持ち込み両腕を振るうがウィザードはそれを剣で防ぎ、剣を片手で回して威嚇した後、ＸＭＡの要領で跳躍しながら蹴りを胸部に打ち込み、、続けて着地した後後ろ回し蹴りを胸部に叩き込んで吹っ飛ばす。

コオクス「おのれっ！」

コオクスは両手を突き出して脳波攪乱電波を放つ。ウィザードはそれが見えないように後ろ向きに跳躍して宙返りしつつ、ウィザーソードガン（ガンモード）から弾丸を１０発放つ！

弾丸は生きているかのように複雑な軌道を描きながら飛び、そしてコオクスの指先全てに命中して爆発！

コオクス「お、俺の攪乱電波がっ！」

指先が全て焦げたことによりコオクスは脳波攪乱電波を封じられた。

暁人「お次はこれだ。」

ウィザードは変身リングを填め変えてベルトにかざす。

次の指輪はサファイアの宝石に似ている。

〝スパン　スパンッ〟

《ウォーター・プリーズ！　スイー・スイー・スイー・スイー！》

音声と共に真上に現れた青い魔法陣がウィザードを通過する。そしてウィザードは姿が変わった。

サファイアの宝石を模したマスクが特徴のその形態は、水を操る能力を備えた水のエレメントを宿した形態・ウォータースタイルである！

〝スパン　スパンッ〟

《リキッド・プリーズ！》

ウィザードは装着者の体を液体化させる指輪・リキッドウィザードリングをリードする。

コオクスは殴り掛かるが、コオクスの腕は水しぶきと共に液化したウィザードの体を通り抜けてしまう。

コオクス「何だと!?」
暁人「こういうことも出来るんだぜ?」
するとウィザードは、今度は自信が液体のようになりコオクスの体に纏わり付く。
そして人型に戻ると同時にコブラツイストで締め上げる。
暁人「どうよ?」
ウィザードは再び液体化し、コオクスの目前で元に戻ると同時に真上からの斬撃を決め、コオクスは爆発と共に後退する。
ウィザードは続けてウィザーソードガン（ソードモード）での斬撃を回転しながらの斜め、正面突きと叩き込んで吹っ飛ばす。
その華麗な動きは正に流れる水のようである。

ウィザードは今度はトパーズの宝石に似た変身リングを填める。

〝スパン　スパンッ〟

《ランド・プリーズ！　ド・ド・ド・ド・ド・ドン・ドゥン・ド・ド・ドン！》

リード音声と共に真下の地面から現れた黄色の魔法陣がウィザードを通過し、今度はトパーズの宝石を模したマスクが特徴の土や大地のパワーを備える土のエレメントを宿した形態・ランドスタイルへと変わった。

コオクスは再度殴り込むが、ウィザードはそれを右手で易々と受け止め、左手の平を胸部に打ち込む。
力技に特化したランドのパワーによりコオクスは大きく吹っ飛び地面に落下する。

コオクス「まだまだあ～！」
コオクスは負けじと突進を繰り出す。

《ディフェンド・プリーズ！》

ウィザードはディフェンドウィザードリングをリードする。するとウィザードの目前に土の壁のような障壁が現れる。

〝バゴッ〟

コオクス「何ッ!?何だと!?」

突進の勢い余ったコオクスはその障壁を突き破り刺さってしまった。

暁人「どーん！」

〝バゴンッ〟

コオクス「!?うおあああ！」

ウィザードは身動きの取れないコオクスを、障壁を破壊すると同時に蹴り上げ、コオクスは上空高く吹っ飛ぶ。

暁人「どんどん行くぜっ！」

〝スパン　スパンッ〟

《ハリケーン・プリーズ！　フー・フー・フーフーフー！》

今度はエメラルドの宝石に似た変身リングをリードし、跳躍すると同時に緑の魔法陣を通過し、エメラルドの宝石を模したマスクが特徴の風や大気を操る風のエレメントを宿した形態・ハリケーンスタイル

に変わり飛翔する。

そして上空のコオクスにすれ違い様に斬撃の一撃を決め、続けてコオクスの周りを回転しながら飛行して斬撃のラッシュを決めた後、右足蹴りを叩き込んで地面に叩き付ける。

コオクス「くっ、奴め、あれほどの力を……！」

《フレイム・プリーズ！……》

暁人「はっ！」

ウィザードは着地すると共にフレイムスタイルに戻り、再度コオクスに駆け寄って行く……。

一方で暁人の戦いをあんこうチームの戦車から見守るマドカと丈司、みほたち。

みほ「凄いですね……暁人さん。」

丈司「女（おなご）を想う力は、男にあれほどの力をもたらすというワケだな。」

マドカ「暁人、普段は女好きのチャラ男に見えるけど……

実際は結構誠実な奴なんだ。」

華「え？」

疑問に思うみほたちにマドカはなおも暁人の事を語る。

なんでも暁人が女好きになったのはワケがあるらしい。

〈回想〉

それは転生前の高校時代。

３月のある日、とある受験に失敗した女の子が学校のベンチで一人で泣いている時であった。
その子の足元に一つの紙袋が置かれる。
その紙袋には、『ドーナツ屋　はんぐり～』と書かれていた。
紙袋に気付いた女の子が涙を拭きながら顔を上げて見ると、そこに見えたのはプレーンシュガードーナツにかぶり付きながら見つめる暁人の姿だった。
暁人「これ、美味いぞ。食ってみろよ。」
女の子「…え？」
困惑する女の子に暁人はなおも気さくに語り掛ける。
暁人「いや、その……女の子の泣き顔見てると放っておけなくてさ。その涙を宝石に変え、瞳を輝かせに来たのさ。
そのドーナツは、食べた途端笑顔になれる魔法の指輪。
そして俺は、その指輪の魔法使いさ。……なんてね。」
そう言ってドーナツを指に填めながらおどける暁人を見た女の子は恐る恐る暁人のくれたドーナツを一口食べてみる。すると、泣き顔にふと笑顔が戻る。
女の子「……おいしい。」
暁人「だろ～？
もう泣くな。失敗したっていくらでもやり直しが効くさ。
もう一年頑張ってみろよ。くじけそうになったら、またドーナツやるからさ。」
女の子「（笑顔で涙を拭きながら）……うん。ありがとね。」
暁人「よしその意気だ！やっぱ女の子は笑顔が一番！（サムズアッ

プしながら）だな。」
〈回想終了〉

余談だがその女の子は暁人の励ましを胸に、暁人から差し入れのドーナツをもらいつつ一年間浪人生活を頑張り、見事大学受験に成功したという。

優花里「（感動の涙を流しながら）いい話ですね～！」
華「素敵です。女の子にそこまで親切にできる男の人なんて。」

マドカ「ただそれがきっかけで、高校から大学にかけて多くの女の子からの人気の的になって、それによって暁人は女好きに目覚めてしまったワケだけどね（笑）」

みほ「でも、だからこそ女の子に親身になれるんですよね。」
マドカ「……ああ！」

コオクスと交戦するウィザード。
片手でウィザーソードガンを振り回して斬撃のラッシュを決めた後、ＸＭＡの要領で跳びながら再び斬撃を決めて着地し、続けてコオクスの突進を肩を踏み台にしながら飛び越えて着地すると同時に背後を斬りつけ、足蹴りで遠くに吹っ飛ばす。

コオクス「そんなっ!?……この俺が……この俺が！」
ふらつきながらも立ち上がるコオクスは悔しがりの声を上げる。

女の子を二人も苦しめ、更にみほたちまで手に掛けようとした事により怒りに燃えるウィザードの敵ではなかった！

〝スパン　スパンッ〟

《チョーイイネ!・キックストライク!・サイコー!》

ウィザードはキックストライクウィザードリングをリードして足元に発生した魔法陣から炎のエレメントを右足に纏う。

暁人「この一撃に怒りをこめて……

フィナーレだ!」

ウィザードはロンダートによって威力を倍増して跳躍して空中反転し、必殺の跳び蹴り・ストライクウィザードを放つ!

暁人「はーっ!」

〝ズガーン〟

コオクス「ッッッ!?ぐおああああァァァ!!」

〝ズドガガーン〟

怒りを込めた炎の跳び蹴りを喰らったコオクスは、赤い魔法陣を浮かべながら大爆発し砕け散った。

暁人「…ふぃ〜。」

コオクスを撃破したウィザードは一息つく。

マドカたちもウィザードの勝利に笑顔で喜び合う。

マドカ「やったな……暁人。」

丈司「んま、今回ばかりは侍魂が光ってたぜ。」

変身を解除した暁人はマドカたちと合流。そして、近くの公園の草

原に座り込み戻って来た春の空気を味わっていた。

暁人「ぷは～やっぱ春の空気は美味いぜ！」
マドカ「戦いの後だから格別だね。」
丈司「ああ、正に勝利の夜明けぜよ。」
みほ「みなさん……今回も、ありがとうございました。」
マドカ「うん、で特に今回は暁人のおかげだからね。」
暁人「ばっ!?……（嬉しそうに）お前それ女の子の前で言ったら恥ずかしいじゃねーかよー！」
丈司「恥じることは無い。女（おなご）のために頑張ったのだろう？」
暁人「（赤面になって）ッ！お前らさあ…」

またいつものムードになったマドカたちを見てみほたちは微笑む。
暁人「……まあ、女の子たちが笑顔に戻って良かったぜ。いまごろ〝あいつ〟も、笑顔が戻ってるだろうな。」

同じ頃、大洗女子学園で。
そど子「へッ……へくちゅん!?」
ゴモヨ「ああ、大丈夫ですか？」
パゾ美「（ポケットティッシュを差し出しながら）ほら鼻水拭いて。」
そど子「ああ、ありがとう……。」

そど子はふと日差しが増したような窓を見つめる。
そど子「（ふと笑顔で）……やったのね……あの人たち……。」

マドカ「しかし丈司、よくあんな合体思い付いたね。」
丈司「まあ、咄嗟だけどな。でもこれで、折神がティガの武装として装着できることが分かった。」
暁人「いつか俺のドラゴンとも合体させたいな。」
マドカ「ええ…？」

丈司「て事は他の折神も可能って事だな。いつか他も試してみるか。
そしていずれ全折神と合体を…」
マドカ「なんか、そこまで行くとグ○ッドマンみたいだな…。
でもこれで、僕は新しい力を手に入れた。
これからも、この調子で力を合わせよう。」
暁人「ああ。」
丈司「そうだな。」

そして暁人はふとあんこうチームの戦車を見つめる。

暁人「……やったぜ……沙織。」

なおも戦車の中で寝ている沙織の表情は、どこか気持ちよさそうであった。

そして約5日後、沙織の風邪は完全に治り、沙織は戦車道に本格的に復帰できるようになった。
もちろんそど子の風邪も完治している。

沙織が完治したと分かった日の夜、マドカたち三人とみほたちあんこうチームが沙織の家を訪問する。
みほ「沙織さん、完全復帰おめでとう。」
沙織「ありがとうみぽりん。……でも……約一週間も戦車道が出来なかったから……みぽりん達に迷惑かけちゃったね。」
華「そんな事ないですよ。」
優花里「武部殿が元気になって嬉しい限りです。」
麻子「(どこか嫌そうな顔で)……そど子も元気になったけどな。」
沙織「みんな……。」

すると、マドカたち三人が沙織に歩み寄る。

暁人「はいこれ。」
沙織「……え？」
暁人が差し出した茶色の紙袋を沙織は困惑するような表情で受け取る。

マドカ「沙織ちゃん、完治おめでとう。」
丈司「それは俺たちからの完治祝いだ。　ま最も、買ったのは暁人だけどな。」
暁人「（照れくさそうに）ッお前！それ言うか!?」
丈司「何が悪い？ホントの事を言っただけだぞ？」
暁人「俺だって心の準備ってのがあるんだよ……」

暁人たちがいつものやり取りをしている間に、沙織はそっと紙袋の中を覗いてみる。

中にはプレーンシュガーのドーナツが三つ入っていた。

沙織「……ありがとう。」

沙織は揉め合う暁人たちの方を向いて、嬉しそうな表情でそっと礼を言った。

その視線は、どこか暁人の方を向いているようであった。

因みに一行は、そど子、ゴモヨ、パゾ美の三人にもドーナツを届けたことを付け加えておこう。

〈エピローグ〉
一方、沙織の完治を祝うマドカたちの様子を、とある家の屋根の上から見つめている一人の男がいた。

その男は黒と紫のライダースーツ風ジャケットを身に付けている。

……そう、5日前の前のコオクスやギラドラスとの戦いの時も現れた男である。

???「……俺は一体……どこへ向かえばいいのだ……。」

男は冷たい表情でそう呟くと、例のバイクのハンドルグリップに似た拳銃型のツールを取り出す。

そして、銃口型スイッチに掌を押し当てると、そのまま屋根から跳び降りて何処かへと去って行った……。

《ブレイク・アップ!》

そして、何処からか野太い電子音声が夜の空に静かに響き渡って行った……。

To Be Continued……

(ED:Enter Enter MISSION!)

〈次回予告〉

(予告ナレーション:操真暁人)

(予告BGM:ウルトラマンX(インストルメンタル) サビ)

ティガが繭の中にーっ!?

宇宙怪獣ゴキグモンの繭糸攻撃に、マドカとみほちゃんが大ピンチに!

行くぜ丈司、沙織たち戦車ガールズ！救出作戦の開始だ！

次回、ヒーローズ＆パンツァー、『ビー・アンビシャス』

第４話『ビー・アンビシャス』

（ＯＰ：ＴＡＫＥ　ＭＥ　ＨＩＧＨＥＲ）

４月１５日　天気は快晴。
いつもと変わらぬ夜明けであった。

さっきまで静かであった街も、人々が起きていく事によって日と共に徐々に明るくなっていき、颯爽と仕事や学校に行く人々も出始め、今日はいつも以上にいいスタートで一日が始めっている様にも見えた。

一部を除いては、、、

大洗女子学園も、いつもの様に生徒たちが颯爽と入校して行っていた。
話し合ったり、元気よく挨拶したりしている人が殺到し、ここもいつも以上のスタートが切れているとも思われた。

しかし……

この学園の生徒の一人であり、本校の戦車道履修者でもある女子学生・西住みほも、いつも通り校門に入っていた。
みほ「今日もいい天気。今日も授業も戦車道も頑張ろ～っと。」

みほが機嫌よく校舎に進んでいたその時、

沙織「ん～……、」

後ろから沙織の声が聞こえる。
それも何やら重い物でも運んでいるのかのような踏ん張っているような声なのだ。

みほ「沙織さん？」

みほは気になって振り向いてみると、
そこには、大洗に来て最初にできた友達であり、同じ戦車道仲間でチームメイトでもある武部沙織が、同じく戦車道仲間であり同じチームメイトである冷泉麻子をおんぶして登校していた。

沙織におぶってもらっている麻子は、、、まだ寝ていた（笑）

麻子は低血圧であるが故に朝に弱く、そのため寝坊する事も多い遅刻常習犯でもあるのだ。
勉強自体の成績は良いものの、これまで何度も遅刻を繰り返しているが故に単位も危うく、戦車道を履修したのは、戦車道を履修すると『通常の単位の3倍を貰える』からという事もあるのだ。（沙織の巧妙な脅しも含まれているが（笑））

今日もなかなか起きなかったために、仕方なく沙織がわざわざ家に行って連れて来たのである。

沙織「お…お～はよーみぽりん。」
みほ「大丈夫？沙織さん。」
沙織「ええ……麻子ったらなかなか起きないから仕方なく連れて来ちゃった。」

みほは少し苦笑と困惑した顔で寝ている麻子を見つめる。すると
そんな沙織に学園の風紀委員長のそど子（園みどり子）が歩み寄る。
そど子「武部さん、次からは冷泉さんが遅刻しそうになってもおん

ぶして来ない事。」
沙織「えへへ……そう言われても、流石に放っておけないよ。幼馴染として、そして同じ戦車道仲間としてもね。」
そど子「登校ぐらいは自分で出来ないと……いつまでもこれだと将来困ることになりますよ。」
一見冷たいように見えるが、そど子が言う事も一理はあった。
沙織「…まあ……それもそうだけどね。」

麻子「……うう……そど子め……。」

麻子はいつの間にか起きていた（笑）

そど子「何か言った？」
麻子「別にー……。」

みほと、麻子を背負った沙織は校内に入って行った……。

因みにこの日、授業は1限しか無いため、それ以外は昼まで戦車道である。

ほぼ同じ頃、ヒーローの力を手に入れた3人の若者（五代マドカ、操真暁人、千葉丈司）が住んでいる豪邸では、

暁人「ふぁあああ～よく寝た。」
マドカ「あ、おはよう暁人。」

大きくあくびをしながら寝床から出てきた暁人。だが既に五代マドカと千葉丈司は起きており、丈司に関してはシンケンマルを手に外で稽古に励んでいた。

暁人「あらら、二人とも早起きさんな事。」
マドカ「いや、暁人が寝坊助なだけじゃないかな？もう朝の１０時だし。」
暁人「（裏声で）ふぁっ!?もうそんな時間かよ!?」
どうやら今はもう朝の１０時。暁人は久々に遅起きをしていたようである。
暁人「でもさあ、今日はバイトもないし、怪獣事件も起こらない……なーんにもする事無いじゃん。」
マドカ「……んまあ、それって平和って事だから良い事なんだけどね。」
暁人「そ！だから俺の遅起きはその証明！だから悪いことではないな。」
マドカ「まあ……そうなのかな？」
暁人「まあ念のため、今ガルちゃんたちを散歩させてるけどね。」
マドカ「ああ、プラモンスターね。」

プラモンスター。それは仮面ライダーウィザードが召喚・使役する使い魔であり、普段はプラモデルのランナーのような型（魔法陣モード）に収納されているが、召喚時に自動でパーツが合体し、リングを装填する事で起動するのである。
暁人は今、赤いガルーダを模したレッドガルーダ、青いユニコーンを模したブルーユニコーン、黄色いクラーケンを模したイエロークラーケンの三体のプラモンスターを行かせている。
普段は主に偵察目的で街中を巡回するが、今回はそれも含めて自由気ままに大洗の街を散歩させているのである。

暁人「今日はこんなに平和なんだ。今頃ガルちゃんたち、呑気に散歩でもしてんだうな～。
あ、ナンパしてなければいいがな…この街（大洗）結構美少女多いからね～。」
マドカ「た、多分それはないと思うよ。暁人じゃないんだし。」

暁人「何だよそれ～……んでもまあ、それもそうだな。」

暁人はマドカと話しながら、何度もシンケンマルを振りながら稽古に励む丈司を窓越しに見つめていた。

暁人「こんな平和な日ぐらい休めってんだよなー……堅物の侍さんよ。」

一方そんなガルーダたちはというと、

呑気に散歩しているようではなかった。

それどころか何かを見ているのか、じっと止まっていた。

〝ドガーン〟

すると、目の前で突然廃工場が大爆発して砕け散る！

その犯人は、その近くにいる一つの人影。

一見人型だが、全身緑色でサボテンでできたような頭部をしており、更に手にはサボテンのような棍棒を持っている。

そいつはサボテン能力を移植して誕生した改造人間『サボテグロン』である！

奴はかつて改造人間を送り込んで世界征服を目論んだ悪の秘密結社『ショッカー』のメキシコ支部から派遣された事があり、仮面ライダー2号が初めて対決した改造人間でもある。

今回の個体は、影法師がマイナスエネルギーで再生させた者だと思

われる。
先ほど廃工場を爆破したのは、サボテグロンの手からの弾丸である。
サボテグロン「ヒィヒィヒィヒィヒィ……腕試し終了。そろそろこの世界を破壊するとするかー！」
そう言うと、サボテグロンは大洗町の方へと向かい歩き去って行った。
恐らく無差別な破壊行動をするのが目的なのであろう。
その一部始終を浮遊しながら見ていたプラモンスターたちはというと、
クラーケンが慌てるように飛び回り、ユニコーンがそれを角でつんと突くことで鎮め、そしてガルーダがなにやら翼を羽ばたかせながら語り掛けるような仕草を見せ、ユニコーンとクラーケンが頷くような動きを見せた後、三人揃って飛び去って行った。
恐らく暁人の元へ戻って行くのであろう。
このやり取りを会話でイメージすると恐らくこんな感じであろう。
〈会話イメージ〉
クラーケン「うわあぁぁ！とんでもない事が起ころうとしてるよ～！
どうするどうする君ならどうするー!?」
クラーケンが某電子戦隊のＥＤのようなフレーズを言いながら慌て回る。
ユニコーン「まあまあ落ち着けって。ここで慌てても何にも始まらないだろ。」
ユニコーンが慌てるクラーケンを角でつんと突いて語り掛けるこ

とで鎮める。
ガルーダ「とりあえず今は早く暁人さんのところに戻ってこの事を報告しよう！」
ユニコーン・クラーケン「うん！」
〈会話イメージ終了〉

その約２時間後の正午、大洗女子学園では、
午前の授業も戦車道も終わり、女子たちが学食で昼飯を取っている。

いつものように他愛もないガールズトークをしながら食事を取っているのだが、一人だけいつもと違っていた。
いつもより眠そうにしている麻子であった。

食事を乗せたお盆を持って運んでいるウサギさんチームの面々がそれに気づく。
梓「大丈夫ですか？麻子先輩。」
あゆみ「とても眠たそうですね～…。」
リーダーの澤梓と砲手の山郷あゆみが心配して話しかける。
みほ「えへへ…麻子さん、さっきの戦車道の時も、いつもより眠たそうだったから…。」
華「操縦はいつも通りでしたけどね。」
みほ「麻子さん疲れてるのかな？」
沙織「実は麻子、昨夜マドカさんたちの動きの真似とかをしてたの。」
沙織の謎の発言にみほたちやウサギさんチームは首をかしげる。

更に沙織はその詳細を語った。
なんでも麻子は昨夜、マドカたちの戦う時の動きを可能な限り真似る事をやっていたという。
でもやっていく内に夢中になり、寝るのが遅くなってしまったとい

う。

優花里「そうですか…でもなぜそんな事を？」

沙織「少しでも強くなって、マドカさんたちに少しでも後れを取りたくないからだって。」

桂利奈「それは流石に無理があるんじゃないですかね？特撮ヒーローは身体能力が桁外れなワケだし…。」

沙織「ほら、麻子普段も低血圧で寝坊しがちじゃない？だから普段からも私たちの足引っ張ってるんじゃないかなって最近気にしていたの。

そして、超人的な力を持ったマドカさん達がこの世界に来たことで、益々置いてけぼりにされるんじゃないかって思ってたみたい。」

優季「そんな事ないと思いますけどね…麻子先輩頭良いし、臨機応変に操縦できるし。」

あや「私たちよりもずっと役立ってると思いますけどね…。」

すると、麻子が眠そうな重い顔を上げて話し出す。

麻子「マドカさんたちが来たからこそ、自分達はもっと強くなるべきじゃないのか？」

一同「え？」

麻子「本来この世界は私たちが守るべきだった……から……な……。」

〝ドサッ〟

麻子は意味深気味な事を呟きながら、再び睡魔に襲われ机に頭をぶつけるように眠りにつき始める。

沙織「ああ、麻子ったら……！」

沙織が慌てて麻子を起こそうとする中、みほはさっきの麻子の発言の事を考えていた。

みほ「本体は……私たちが守るべき世界……か……。」

と、その時、

「？何？あれ…」

「なんか変なの出て来たよ……」

突然周りが何かに気付いてざわつき始めたことに気付き、みほたちもその方向を振り向く。

そこにはテレビの画面に何やら妙なモノが映っていた。

因みにそれは、街のビルのスクリーンにも映っており、街の人々も大勢立ち止まってそれを見上げながらざわついていた。

テレビに映っている異形な怪人のような姿をしているそのモノは語り出す。

サボテグロン「ヒィヒィヒィヒィヒィ……俺の名はサボテグロン。　この街を手始めに、徹底的に破壊してやるぜ！
人間どもよ、我々の力にひれ伏すがいい！」

テレビに映ったモノとは、先ほど廃工場を爆破したサボテグロンであった！

サボテグロンは、語った後テレビやスクリーンの画面から消え、それと同時に空から一匹の巨大生物が降り立つ！

巨大生物は降り立ったと同時に暴れ始め、人々は突然の怪獣出現に逃げ惑う。

その怪獣は、ある意味人類最大の敵である昆虫〝G〟と毒グモの合わさったような、いかにも気持ちの悪い外見をしている。

名は『宇宙怪獣ゴキグモン』である！

一方みほたち戦車道女子たちも、サイレンが鳴り響く中本部へと集合する。

モニターには暴れるゴキグモンの映像が映し出されていた。

梓「うわっ……何あれ!?」

あゆみ「気持ち悪い～！」

紗希「……巨大なゴ○ブリ……。」

あや「ちょっと紗希!?しれっと言わないでよ～。」

優花里「確かに……あれほど気持ち悪い怪獣は初めてです。」

もちろん、戦車道女子たちもそのゴキグモンの醜悪な外見にざわつく。

亜美「なんか、ゴ○ブリと蜘蛛を合わせたような外見ね……。」

教官の蝶野亜美は、比較的冷静にゴキグモンの外見を分析する。

マドカ「その怪獣はゴキグモンです。」

突然怪獣名を告げるマドカの声のする方へ一同は振り向く。

マドカたちもいつの間にか駆け付けていたのだ。

華「早いですね、マドカさんたち。」

暁人「ああ、ガルちゃんたちが知らせてくれたからね。」
丈司「あのサボテグロンとかいう奴……なかなか気持ち悪い奴を連れて来たもんだ。」
マドカ「とにかく、今は怪獣を止めましょう。」

亜美「そうね……じゃあ今日は……あんこうチームとウサギさんチーム、カバさんチームが出動しなさい。」

あや「私たちもですか教官!?」
桂利奈「無理ですよ～。」
優季「(桂利奈の肩に手を置いて)私も嫌だけど……マドカさん達も付いてるわけだし、頑張ろう。
それに桂利奈はやればできる子なんだから。」
桂利奈「……アイアイサー!」
ウサギさんチームはゴキグモンとの交戦を嫌がりつつも、マドカさん達も信じて頑張ることにした。

おりょう「いよいよ我々の出番ぜよ。」
左衛門佐「三大将軍も付いてることだし、」
エルヴィン「勝利は我にあり!だな。」
カエサル「機は熟した……我々も頑張るぞ。」
カバさんチームも久々の出動で気合が入る。

みほ「今日も一緒に頑張りましょうね、マドカさん。」
マドカ「……おう!」

みほたちあんこうチームも、マドカたちと共に倒すことを決心する。

その一方で、そんな様子をじっと見つめる麻子の姿があった。
愛想の無い表情なのはいつも通りに見えるが、今回に関してはまる

で何かを訴えてるようにも見えた……。

亜美「それでは各車両、パンツァー・フォー!」

街では、ゴキグモンが両腕の鋭い爪でビルを崩したりなどしながら、逃げ惑う人を嘲笑うように暴れ回る。

〝ズゴーン〟

ゴキグモンは何処からか飛んできた弾丸を受けて被爆し、その弾丸が飛んできた方へ振り向く。

マドカ「はっ!!」

そこには、マドカがゴキグモンの高さとほぼ同じくらいまでに跳躍しながらトライガーショット（ブルーチェンバー）から弾丸を連射して攻撃していた。

先ほどゴキグモンが受けた弾丸は、マドカがイエローチェンバーで放ったバスターブレッドである。

ゴキグモンはマドカを叩き落とそうと両腕の爪を振るって殴りかかるが、ウルトラマンの力を得たことによる超絶身体能力を持つマドカはそれをことごとく回避しつつ、ビルの壁を蹴ったり屋上に着地してはまた跳躍したりなど、目にも留まらぬ動きで翻弄しつつ弾丸を連射し続ける。

かつてウルトラマンジャックの力を得た郷秀樹や、ウルトラマンゼロの力を得たタイガ・ノゾムもそうだったように、ウルトラマンの力を得た人間は、人間の姿でも飛び抜けた身体能力を発揮することができ、その気になればこのように怪獣とも引けを取らない戦いを披露できるのである!

マドカは一旦着地すると、懐からスパークレンスを取り出し、ガオ

ディクションでゴキグモンの解析を始める。
その隙にゴキグモンが爪を突き立てて攻撃を仕掛けるが、マドカはそれを宙返りしてかわし、その間に解析が完了した。

マドカ「あそこが弱点だな。」

そう言うとトライガーショットをレッドチェンバーに切り替え、赤いビーム・アキュートアローをゴキグモンの頭部目掛けて放つが、ゴキグモンはそれを素早く爪で弾いて防ぐ。

マドカ「奴の弱点は中枢神経がある頭部の触角の間です！」

マドカは通信機越しにみほたちにゴキグモンの弱点を伝える。

みほ「了解です。　みなさん、そこを中心に攻撃しましょう。」
カエサル「心得た！」
梓「分かりました！」
マドカから弱点を聞いたみほは他のチームにも伝え、それぞれカバさんチーム、ウサギさんチームのリーダーは返事をする。

みほ「それでは、砲撃開始！」

みほの合図で全車輌一斉に頭部を狙って砲撃を始める。
だが、ゴキグモン自身も自身の弱点を熟知しているのか、いくつか被爆しながらも両腕を振るって爪で弾き返したりなどするため、弱点に中々当たらない。

あゆみ「何アイツ、キモいししぶとい、正に〝G〟だよ〝G〟！」
梓「落ち着いて。そうすれば絶対当てられるわ。〝G〟も正確に狙えば潰せるから。」
あや「巨大〝G〟の倒し方をネットで聞いてみよっかな？」

優季「いや……多分意味無いと思うよ。」
桂利奈「それに〝G〟だとあの〝怪獣王〟を連想する人もいるだろうしー。」
優季「それも無いと思うけどね（笑）」
梓「桂利奈、砲撃を続けるから、相手の反撃に気を付けながら移動して。」
桂利奈「アイー！」

おりょう「彼奴、なかなかやるぜよ。」
エルヴィン「マルタの大包囲戦のようだな……必ず包囲を撃退するぞ！」
カエサル「いや、正確には一体だけだから〝軍〟ではないけどね…。」
左衛門佐「ここは桶狭間の戦いの様に行こう。」
カエサル・エルヴィン・おりょう「それだっ！」

華「なかなか弱点に当たりませんね。」
優花里「まあ、あんなに小さい弱点ですから、当てる自体結構至難な気がしますよね。」
沙織「下手な鉄砲だって数撃ちゃ当たるって！恋愛だってそうだもん！」
麻子「さっさと倒して帰って寝るぞ。」
みほ「そうですね…頑張りましょう！
麻子さん、相手の動きに用心しつつ移動してください。」
麻子「おう。」

このように、みほたちは慌てず指示を出し合い、ゴキグモンへの攻撃を続けていた。

マドカ「僕も行きますよ。」

そう言うとマドカはシャーロックを運転し始める。
そして、トライガーショットを片手に攻撃しながら猛スピードで走りつつ片手だけの運転さばきでゴキグモンの股の間を通り抜けたり周りを走り回ったりなどしてゴキグモンの注意を反らす。

華「凄いですね、マドカさん……。」
優花里「人間離れの跳躍力に、片手で銃撃しながらあんなにアクロバティックに運転できるなんて……正に超万能な人ですね。」
沙織「もう彼一人だけで倒せそうな感じだよね。」

だが、麻子はそんな沙織たちの発言に何やら少し顔をしかめているようでもあった。

みほ「でも、これで隙が出来ました。全車輌同時砲撃！」

〝チュドーン〟　〝ズドーン〟

あんこう、ウサギさん、カバさんの同時砲撃がゴキグモンに命中！
弱点には当たらなかったものの頭部付近に命中した事でゴキグモンは少し怯んだ。

優花里「やりましたよ！」
ウサギさんチーム「やったー！」

だがそれも束の間、怒ったゴキグモンは近くのビルを殴り崩し、同時にその瓦礫を戦車の方へ飛ばし始める！

〝ガシャーン　ガシャーン〟

ウサギさんチーム「きゃあああああっ！」
カエサル「くっ、敵の反撃だ！」

おりょう「これからどうするぜよ?」
左衛門佐「フェスティーナ・レンテ!」
おりょうに対する左衛門佐の返事。『急がば回れ』という意味である。
だが、残念ながら質問に対する回答にはなっていない（笑）
まあ、急がば回れという判断は間違ってはいないのだが……。
みほ「みなさん落ち着いて。一旦後退して攻撃の場所を変えましょう。」
みほの指示により戦車は3両とも後退を始める。
マドカ「こっちだゴキグモン!」
マドカはシャーロックから降りると同時に再びゴキグモンの頭部ぐらいまで跳躍し、弾丸を打ち込んで誘導を始める。
一方でマドカとみほたちがゴキグモンの相手をしている同じ頃、暁人と丈司は近くの廃工場で遂にサボテグロンを発見し、早速追跡を始めていた。
サボテグロン「くそっ、早くも見つかったか!」
暁人「逃がさねえぞサボテン野郎!」
丈司「待てっ!」
《コネクト・プリーズ!》
〝ズガガガンッ〟
サボテグロン「ぐおっ!?」

暁人はコネクトウィザードリングをベルトにかざして魔法陣からウィザーソードガンを取り出し、弾丸を数発打ち込んでサボテグロンを足止める。

サボテグロンが振り向いたところに暁人は跳躍して飛び蹴りを繰り出すが、サボテグロンは即座にサボテン棍棒でそれを受け止めて振り飛ばし、暁人は宙返りをして体勢を立て直して着地する。

暁人は着地と共に再び弾丸を数発放ち、サボテグロンに攻撃を加える。

その隙に丈司が駆け寄り、すれ違い様にシンケンマルでの一撃を胴体に決め、その後も畳み掛けるように斬撃を加える。

サボテグロンも負けじと棍棒で応戦し、剣と棍棒が火花を散らしながら激しくぶつかり合う。

左右交互に斜めの斬撃がぶつかり合い、サボテグロンが足元へと打撃を繰り出し丈司はそれを片足を上げながら一回転してかわし、そのままシンケンマルを振って斬撃を繰り出し、サボテグロンはそれを棍棒で受け止める。

そして互いに剣と棍棒を接触させたまま、目前で火花を散らしながら数回振り回した後、丈司は剣を振るって一旦離すと同時に一回転して接近し腹部に左肘の一撃を決め、そして剣で一直線の一撃を決めて吹っ飛ばす。

そしてサボテグロンが吹っ飛んでる間に後ろで待ち構えていた暁人が、跳躍して宙返りをして飛び越えつつウィザーソードガンでの斬撃を決め、続けて着地後も数回斬撃を決め、その後得意のＸＭＡを取り入れた跳躍をしながら左右交互に蹴りを決め、更に後ろ回し蹴りを胸部に打ち込んで吹っ飛ばした。

二人の連携により押され気味になっていくサボテグロン。
サボテグロン「くっ……なかなかやるなあ、貴様ら。」

一方のマドカたちの方はというと、ゴキグモンの鉤爪や瓦礫飛ばし攻撃にみほたちの戦車は徐々に追い込まれていった。

マドカ「みほちゃん！みんな！」

マドカはとあるビルの屋上でそれに気付き叫ぶ。

するとゴキグモンはそれに気づいたのか、振り向きざまに両腕を振るってマドカの立っていたビルを崩し始める！

マドカ「うぉあああっ！」

唐突な攻撃により避ける間もなく、マドカは崩れていくビルの瓦礫と共に落下し始める！

みほ「！マドカさん！」

みほはマドカの危機に目を見開く。

危機的状況、こういう時こそ変身だ！

マドカ「ティガーッ!!」

〝キャイイーン〟

マドカは落下しながらスパークレンスを取り出し上げ、溢れ出る光に包まれる。

そして光の中からウルトラマンティガ（マルチタイプ）が右腕を突き出して飛び出す。

現れたティガは地面に着地し、それによって周りの地面から激しく土砂や土煙が巻き上がる！

その力強い着地は正に某地球の大地のウルトラマンのようである！

おりょう「おお、遂に真打ちの登場ぜよ。」

ティガの登場によりカバさんもウサギさんも嬉しそうに反応する。ウサギさんチームに関しては戦車を止め、観戦モードに入ったり写メを撮ったりしている。

みほ「皆さん、少し様子を見ましょう。　必要があれば援護です。」

みほたち戦車チームはティガの戦いを見守りつつ援護をすることにした。

（ＢＧＭ：光を継ぐもの）

ティガはゆっくりと構えを取り、それに気づいたゴキグモンもティガの方へと振り向き構える。

そしてティガは走りながら側転、バク転しつつ接近し、地面を蹴って高く跳躍して牽制の跳び蹴りを放つ！

ゴキグモンはそれを両腕の鉤爪をクロスしてそれを受け止めて振り飛ばすが、その後もティガはビルを土台に側転し、後ろにあったビルを蹴って加速してゴキグモンに跳びかかると同時に右肘での一撃を胸部に叩き込む！

ゴキグモンは左腕を振って殴り掛かるがティガはそれを右足蹴り

で弾き、その後ゴキグモンの放った右フックをしゃがんで避けると同時に後ろに回り込むと同時に背中に右腕のチョップを決め、その後も背を向けた状態で背中に左右交互のエルボーを打ち込んで攻撃を加える。

次にティガは跳躍して振り向くように一回転しながら右回し蹴りを繰り出し、ゴキグモンはそれをしゃがんで避けた後左腕を振るって攻撃を仕掛けるが、ティガはそれを両腕で受け止めてそのまま右脚蹴りを腹部に打ち込む。

その後もティガはゴキグモンの両腕の殴り込みをチョップや足技で弾き飛ばしていき、そして胸部に左右交互のパンチを叩き込み、炸裂と同時にその部位に爆発が起こる。

善戦も束の間、続いてティガが繰り出したチョップを顎で噛み付くことで受け止めそのまま締めつけてティガが痛がっている隙に両腕の爪を活かした斬撃のようなパンチを腹部に打ち込み、ティガはその部位から火花を散らしながら後退する。

ゴキグモンは更に攻撃を加えようと突進をしての頭突きを繰り出すが、ティガはそれをヘッドロックをかけることで受け止め、そのまま顔面に右膝蹴りを叩き込み、蹴りが決まると同時にその部位に爆発が起こる！

その後もティガはゴキグモンとの交戦を続けるが、その間にもゴキグモンはビルを崩していき、その瓦礫が戦車の方にも飛んで行く！

みほ「急いで回避です！」

みほの咄嗟の指示により戦車たちは降り注ぐ瓦礫を避けていくが、地面に落ちていく瓦礫が徐々に逃げ道を塞いでいく……。

一方暁人たちの方はというと、サボテグロンとの戦いを優位に進めていた。

丈司「よし、一気に倒すぞ。」

暁人「はいよ。」

二人は変身しようとし、暁人がフレイムウィザードリングを填め、丈司がショドウフォンを構える。

その時、

〝ズガーン〟

暁人「うぉあああっ!?」

丈司「くっ、何だっ!?」

突然廃工場の壁を突き破り戦車が突っ込み、それによって二人は驚くき同時に飛んで来る煙や瓦礫を跳躍して避ける。

突っ込んで来たのはカバさんチームの三号突撃砲であった。

ゴキグモンの反撃を避けていく内に、徐々に追い込まれていき挙句に廃工場に激突してしまったのである。

カエサル「ごめんよ!あの〝G〟がなかなか手ごわくて…。」

サボテグロン「隙ありっ!」

〝ズガガガガガガガガ…〟

サボテグロンは隙を逃さず、手から弾丸を連射して反撃に出る!

《ディフェンド・プリーズ!》

暁人は即座にディフェンドウィザードリングをかざし、赤い魔法陣の障壁でそれを防ぐ。

だが、魔法陣が消滅した頃には既にサボテグロンの姿はいなくなっていた……。

暁人が攻撃を防いでいる間に煙などに紛れて逃走したのであろう。

丈司「くっ…逃げられたか……。」

暁人「あと一歩だったけどな～…。」

二人は惜しくもサボテグロンを逃してしまった事を悔しがる。

一方のゴキグモン戦はというと、あんこうとウサギさんチームも完全に逃げ場を失いそうになるまでに追い込まれていった。

マドカ「はっ、みほちゃん、みんな!」

ティガはそれに気づいて救出に向かおうとするが、その隙にゴキグモンに後ろから掴みかかられ、そしてそのまま投げられて一回転して地面に激突する。

ウサギさんチームはというと、遂に追い込まれることでの恐怖心に負けてしまって戦意喪失し、戦車を残して逃げ出してしまった。

みほ「ああ、外に出たら危ないですよー!」

みほは外に出て逃げ出した彼女たちの身を案じるが、その隙にもゴキグモンは再びみほたち向かって進撃を始めていた。

追い込まれたあんこうチームの戦車は砲撃を連射するが、ゴキグモ

ンはそれを物ともせず進撃を続ける。

マドカ「……ッ、危ない！」

みほたちの危機を知ったティガは正面からゴキグモンに掴みかかり食い止めようとする。

すると、ゴキグモンの口が大きく開く。

そしてそこから勢いよく繭糸を噴射する！

ティガはそれをモロに喰らい、後退しながら繭糸に包まれていく。

ゴキグモンの繭糸は、巨大なモノを繭と化すことが出来るのであり、ティガは今にも繭にされそうになっているのだ！

みほ「マドカさん……きゃーっ！」

そして、なんとみほも繭糸に絡め捕られて戦車から引き離されてしまう！

リーダーであるが故に、常に周りの様子を見渡すために戦車の上部から身を乗り出しているみほ。

だが、今回はそれが災いし、自分たちの戦車がティガの近くに止まっていたことにより巻き沿いを喰らってしまったのだ！

華「西住さん！」

優花里「西住殿！」

沙織「はっ！みぽりーん！」

チームメイトが声を上げる中、ティガ、そしてみほは近くのビルに貼り付けにされるように繭糸に絡められていき、やがてそのビルもろとも完全に繭糸に包まれてしまった……！

沙織「……そんな……。」
暁人「マドカとみほちゃんが……繭にされちまった……。」
丈司「何てことだ……。」
ティガとみほが繭に包まれた後、一時的にショックや唖然による沈黙が走る……。

するとゴキグモンは作り上げた巨大な繭の側に座り込み、居座り始めた。

暁人「どうすればいいんだ……。」

みんなどうすればいいか分からず立ち尽くす中、亜美教官による通信が入る。

亜美《敵は活動を停止したみたいだから、みんな一旦本部に帰還せよ。》

一同は動揺が止まらない中一旦戻ることにした。

本部に戻った一同。

丈司「しかし、予想以上の最悪な状況になったな……。」
暁人「あの昆虫野郎……まさかティガまでも繭にしてしまうとはな……。」

梓「それに、西住隊長まで……どうしたらいいのでしょう……。」

一同はなおもどうしたらいいか分からず途方に暮れていた。
無理もない。このチームの中でリーダー的存在を二人も失ってしまったのだから……。

だが、静まり返った空気の中、一つの声が静かに飛ぶ。

麻子「助け出すしかないな…。」

梓「え？」

麻子の発言に一同反応する。

自分たちで、二人を助け出そうと言うのだ。

梓「でも、西住さんはともかく、光の巨人を人間の力でどうやって救出すれば…」

暁人「いや、実はウルトラマンには時間制限がある。３分間しか巨大な姿になれないから今頃時間が来てマドカに戻ってるはずだ。」

桂利奈「でも……私たちに出来るのでしょうか……。」

麻子「いつまでも頼りっきりじゃだめだろ。」

麻子の言葉に全員はっとなる。

なおも麻子は弱弱しくも話しを続ける。

麻子「この世界にヒーローが来ても……結局私たち自身で守らなきゃいけないんじゃないか……？」

彼女の言う事は確かであった。

沙織「そうか……やっと分かったよ。昨夜麻子があんな事してた意味が。」

沙織は麻子の行動の意味を悟る。

沙織「確かに……暁人さん達はヒーローの力を持っているから私

たちよりも全然強いよね……
でも、もし暁人さん達が来なかったら、結局この世界は私たちが守らなきゃいけなかったもんね。」

沙織たち戦車道女子たちは、マドカたちヒーローズが来てからやや彼らに頼りきりだったようであり、それに今気づくことが出来たのである。

暁人「確かに、この世界は君たちのものだしな……そういえばマドカが言ってたぜ。
地球は人類、自らの手で守り抜かなきゃならない……どうにもこうにも、どうにもならないそんな時こそウルトラマンが……ヒーローが必要だとな。」
丈司「敵は確かに強力になっている。でも、君たちがこの世界を守りたいと志しをもっと高く持てば、必ず展望はあるはずだ。」

カエサル「志を……」
梓「もっと高く……」
カバさんとウサギさんのリーダーも暁人たちの言葉に共感し始める。

暁人「麻子、お前の想いは中々のものだ。」
暁人は麻子の方を向いて、大切な事に気付くきっかけになった事を褒める。
それを聞いた麻子は相変わらず無愛想ながらも嬉しさからかはっと反応する。

丈司「今回は俺たちも力を貸そう。だから必ず、マドカたちを救い出すぞ。」

遂に、全チームが共感したのかさっきまで暗かった表情に明るさが

戻ってる様であった。

華「そうですね、必ず助け出しましょう。」
優花里「なんか、久しぶりにドキドキしますねー。」

チームメイトも気合が入る中、沙織は笑顔で麻子の方を向く。
沙織「ありがとね、麻子。大切なことを気づかせてくれて。」
麻子「別に…」
沙織「んも～…素直じゃないんだから。」

エルヴィン「自分の人生は、自分で演出する。」
カエサル「賽は投げられた……今こそ、一つになる時だな。」
カバさんチームも一致団結を決めた。

暁人「よし！そうと決まれば、まずはあのサボテン野郎を倒さねーとな。」
梓「え？ゴキグモンじゃないんですか？」
丈司「マドカから聞いたんだが、ゴキグモンの常食は人間だ。さっき繭にしたビルは、たまたま休日のオフィスビルだったため人がいない。
そのため繭にしたビルに卵を産むには、孵化する幼虫の餌が必要。だからゴキグモンは、卵を産む前に餌になる人間を待っているんだ。」
暁人「そのゴキグモンを引き連れたサボテグロンは、今頃その餌になる人間を集めようとしているとしたら……先に倒すべきなのはサボテグロンの方だ。」

暁人たちの説明に一同は納得する。

亜美「みんな……良い志ね。じゃあ改めて、パンツァー・フォー！」

今こそ、出動の時である！
亜美の指示により、３チームは颯爽と戦車に乗り込む。
いつもの様に華奢な少女たちが戦車に乗り込むわけなのだが、今回は決心が強いが故か、その姿はどこか凛としているようにも感じた。
丈司もモヂカラで召喚した白馬にまたがり、暁人もコネクトウィザードリングで魔法陣から出したマシンウィンガーに乗る。

そして暁人がヘルメットの前部のカバーを〝カシャッ〟と鋭く下ろした後通信機越しに…

暁人「エブリバディ？…」

そして丈司及び戦車３チームが…

一同「ビー・アンビシャス。」

正に、大志を持った全員が一つになった瞬間であった。

そして今、バイク、馬、３両の戦車が出陣し始めた……！

一方、ゴキグモンの繭糸に囚われている二人はと言うと……。
ティガの方は既に３分が経ったのかマドカの姿に戻っていた。
二人はビルに貼り付けられている形で繭糸に絡められていた。
マドカ「……ッ、意外と冷たいな……この糸……。」
マドカは糸に包まれた体を動かしながらぼやく。

みほ「マドカさん……。」
すると、みほの声が聞こえる。

どうやらマドカとみほは、姿は見えないが声が聞こえ、話せる距離にいるためそれほど離れていないようだ。

マドカ「みほちゃん？　大丈夫か？」

みほ「ええ…寒いですけど……ない……通信機がありません……。」

どうやらみほは、糸に絡められるはずみで通信機を紛失してしまったようである。

マドカ「俺もみたいだ……これじゃあ暁人たちに連絡とれない……。」

みほ「……寒い……。」

マドカ「みほちゃん……？」

ゴキグモンの繭糸の中はかなりの低温らしく、みほは体が凍えそうなくらい震えている。

実際、マドカも寒さを感じている様であった。

すると、みほが寒くて辛そうにしてることに気付いたマドカは、手に持っていたスパークレンスを向ける。

すると、スパークレンスからの光がみほを包み始める。

だが、時間切れで変身が切れた直後であるためか、まだ光エネルギーが十分になっておらず、みほを包む光も若干微弱だった。

みほ「この暖かい光は……マドカさん……？」

マドカ「ああ……どうやら届いたみたいだね……。」

みほ「私のために、光を当てているのですか？」

マドカ「ああ……でも……まだ、十分じゃないみたい……。」

マドカは光エネルギーを開放するのが精一杯なのか、声を絞る様に喋っている。

みほ「そんな……なのに、どうして私なんかのために…？」

みほは光エネルギーがまだ少ないにもかかわらず、自分に光を当てるマドカを気遣うように言う。

マドカ「決まってるじゃない……前にも言ったよね……君たちを守り抜くと、強く決めたと……。」

みほ「……ありがとうございます。……でも、この光はマドカさん自身のエネルギーでもあるはずじゃ……。」

マドカ「ああ……でも……僕は大丈夫だから……みほちゃんが無事になれば……みほちゃんだけじゃない……この世界の人々…みんなを救うためなら……例え微弱でも……。」

みほ「分かりましたから……私は大丈夫ですから……私のために少ないエネルギーを使わないでくださいよ。」

みほは、他人を気遣う持ち前の優しさからマドカを気遣い、自身にエネルギーを送ることを止めさせようとする。

マドカ「やっぱり優しいね…みほちゃんは……でも、僕たちがこんなにも体を張るのには…まだワケがあるんだ……。」

みほ「……え？」

果たして、マドカたちヒーローズが体を張る他のワケとは……？

一方、サボテグロンはというと、やはりゴキグモンの食料になる人間を集めるために、配下のショッカー戦闘員（黒骨戦闘員）軍団と共に人々を襲い始めていた。

逃げ惑う人々。それを嘲笑うようにサボテグロンたちは暴れながら余裕そうに歩きながら追い回す。

サボテグロン「フッハアッ！ショッカー戦闘員どもよ！たくさん捕まえろ！そして全員ゴキグモンの餌にするのだ！」

棍棒を振るってそこらの鉄塔などを易々破壊しながら高笑うサボテグロンの元に、ショッカー戦闘員がようやく捕まえた一人目が差し出される。
若いＯＬの女性であった。
女性は怯え、逃れようと必死にもがくが、無情にもサボテグロンの手に渡ろうとする！
サボテグロン「ヒィヒィヒィ……まずは一人目……」

〝ズガンッ〟

サボテグロン「!!?くッ、」

〝ズガガガガッ〟

すると突然、サボテグロンは何処からか飛んで来た弾丸が当たって怯み、続けて女性を捕えていた戦闘員たちもその弾丸が当たり倒れる。
その隙に自由になった女性は足早に逃げて行った。

サボテグロン「ッ！誰だ！」

サボテグロンは振り向き声を上げる。

丈司「そこまでだ！外道衆！」
暁人「女の子を醜い奴の餌にするなんて最低な奴だな。」

そこには、シンケンマルを肩に担いで決め台詞を言う丈司、そして、ウィザーソードガンを構える暁人の姿があった。
そして後ろには、あんこう、カバさん、ウサギさんチームの戦車が待機している。

さきほど弾丸を打ったのは暁人であった。
まあ、正確にはサボテグロンは外道衆ではないが（笑）
サボテグロン「貴様ら！また邪魔するのか！」
怒ったサボテグロンは、ショッカー戦闘員達と共に構える。
暁人「安心しろ。邪魔するのは今回で最後にしてやる……
つまり、お前を倒す！」
《ドライバーオン・プリーズ！》
〝スパンッ〟
《シャバドゥビ・タッチ・ヘーンシーン…》
丈司「ショドウフォン、一筆奏上！」
丈司はショドウフォンで『火』のモヂカラを宙に書く。
丈司「はっ！」
そして、ショドウフォンを振るって通話ボタンを押してモヂカラを発動させる。
暁人「変身！」
暁人はフレイムウィザードリングをウィザードライバーにかざす。
《フレイム・プリーズ！　ヒー・ヒー・ヒーヒーヒー！》
〝ザンザンザンッ〟（所謂シンケンレッド変身完了音）
暁人、そして丈司はそれぞれ仮面ライダーウィザード（フレイムスタイル）、シンケンレッドへと変身を完了する。

サボテグロン「俺様が貴様らを倒すんだ！行け戦闘員ども！」
サボテグロンの指示によりショッカー戦闘員たちは一斉にかかり始める。

暁人「さあ、ショータイムだ！」
丈司「いざ、参る！」

ウィザードとシンケンレッドも武器を構え颯爽と駆け始める。

二大ヒーローＶＳ戦闘員軍団との戦いが始まった！
大勢になって二人のヒーローに襲い掛かる戦闘員達。
だが、二人は動じる事無く次々と戦闘員たちを薙ぎ倒していく。

ウィザードはウィザーソードガンを手から手にと持ち替えつつの鋭い剣さばき、エクストリーム・マーシャルアーツを取り入れた華麗な跳躍をしつつの蹴り、斬撃、銃撃などで、
シンケンレッドは大胆かつ流麗な剣さばきを駆使し、前後左右関係なく戦闘員の動きを全て見切っているかのように全て弾きながら次々と斬り倒していく。

戦闘員達は、一部ではナイフを手に大勢でかかる者もいた。
だが、いくら束になったと言え雑魚は雑魚。ヒーローたちに次々と倒されていく。

梓「やっぱり凄いですね……お二方……。」
桂利奈「特撮番組を生で見てるみたい。」
あゆみ「いや……本物はそれ以上に凄いよ。」

沙織「やっぱ素敵だわ……
待っててね。必ず、私たちが助け出すから。」
みほの代わりに車長として上部から身を乗り出して観戦している

沙織は、暁人たちに感心しつつも救出の決意を新たにする。
だが、感心するのも束の間、なんとショッカー戦闘員たちは戦車女子たちにまで襲い掛かって手を出し始める！
まずは各戦車上部から身を乗り出している彼女たちを襲い始める！

ウサギさんチームはというと、
梓「ひゃっ!?　このっ！」
梓は前方の個体のナイフをビビりつつもしゃがんで避けると、その隙に両手でがむしゃらに無防備になった腹部を思い切り突いて突き落とす。
すると、今度は左右から二人が同時に攻撃を仕掛け始める！
梓「きゃっ！」
梓はそれぞれ左右の個体が同時に繰り出すパンチを、怯えるように耳を塞ぎながらしゃがんで避ける。
すると、それにより左右にいる二人の戦闘員は互いのパンチを喰らって怯んでしまう。
梓「はっ、今だ。　えいっ！　それっ！」
その隙に梓は、まずは右側の個体を足払いで転落させ、次に左側の個体を両手で突き落とす。
梓「ふぅ～…」
ひとまず上がって来た戦闘員達をなんとか全て落とした梓は一息しながら額の汗を一回拭う。

次にカバさんチームはというと…。
身を乗り出していたカエサルが、襲い来る戦闘員の攻撃をビビりつつも避けつつ、隙を突いて受け止める。
カエサル「今だ！左衛門佐！」
左衛門佐「了解！はっ！」
カエサルが押さえつけてる隙に、下から左衛門佐が弓で戦闘員を攻

撃する！
左衛門佐は戦国時代に詳しいだけあって、弓道が得意な一面もあるのだ。
弓が刺さった戦闘員はそのまま落下し始める。
このように、カエサルが攻撃を避けたり受け止めたりしている隙に左衛門佐が弓で次々と打ち落としていくというなかなかの連携で、自分たちの戦車に昇って来る戦闘員を次々と迎え撃つ。
更に、
おりょう「どけどけーい！ペリーの黒船来航ぜよ！」
操縦士のおりょうが、３突戦車を回転するように走らせ、上部に登った戦闘員を振るい落とすと同時に周りの戦闘員も吹き飛ばしていく。
と、カバさんチームは以外にも善戦していた。

そしてあんこうチーム。
沙織「わあっ！　きゃっ！」
沙織は戦闘員の攻撃を慌てて避けていく。
戦闘員は遂に沙織を捕まえるのに成功する。
しかし、
沙織「きゃっ！　エッチ！」
〝バシーン〟
どうやら掴みどころが悪かったみたいで、沙織は驚きもあって力ずくで振り払うと、戦闘員の顔にビンタをかます！
そして続けて両手で思い切り突いて突き落とす。
次の戦闘員が沙織に襲い掛かろうとするが、沙織は急いで中に入って上部のフタを閉める。
かと思えば沙織は思い切りフタを開け、覗き込むように顔を近づけていた戦闘員は思い切り開くフタに思い切り顔を叩きつけられ痛がる。
華「それっ。」
その隙に華が、戦闘員の足を掴んですくうことで地面に落下させ

る。
沙織「ふう、どんなもんよ。　華、ナイスアシスト。」
華「いえいえ。」
だがそれも束の間、次に上がって来た戦闘員が沙織に掴みかかる！
沙織「きゃっ！　ちょっと、放してよ…」

〝ズガーン〟
「！イーッ!?」

すると、沙織を掴んでいた戦闘員がどこからか飛んで来た弾丸を受けて落下する。

それは、ウィザーソードガンの弾丸であった。
ウィザードはあんこうチームの戦車の上に跳び乗り、残りの上がっていた戦闘員も瞬く間に蹴り落とす。

暁人「大丈夫か？沙織。」
沙織「（少し嬉しそうな表情で頬を赤らめて）……ええ……ありがとうございます。」
暁人「よく頑張ったな。こいつらは俺たちに任せろ。」
そう言うとウィザードは戦車から跳び下り、戦闘員の相手を再開する。

次々と倒されていき数が減っていく戦闘員。サボテグロンは遂に業を煮やし、直接ウィザードたちに襲い掛かる！
サボテグロンは棍棒を振って殴りかかるが、ウィザードはそれをウィザーソードガンで受け止める。

サボテグロン「貴様らぁ！絶対に許さんぞ！」
暁人「それ、こっちの台詞だ。　女の子をも襲いやがって。」

そう言うとウィザードは右手持ちのソードガンを目にも止まらぬ速さで数回火花が散る斬撃を決め、そして一回転しながら右ハイキックを頭部に決め、続けて左後ろ蹴りを胸部に打ち込んで吹っ飛ばす。
続いてシンケンレッドが吹っ飛ぶサボテグロンの反対側から跳び、そして空中ですれ違い様にシンケンマルでの一撃を決める！
サボテグロンは地面に落下するがすぐさま立ち上がる。
暁人「よし、こっから一気に決めるぞ。」
すると、シンケンレッドがシンケンマルをウィザードに突き出し、ウィザードは少し驚く。
丈司「暁人、この先端にコピーウィザードリングを填めろ。」
暁人「え？……わ……分かった。」
シンケンレッドの思わぬ要求にウィザードは少し困惑しつつも、コピーウィザードリングをシンケンマルの先端に填める。
《ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！…》
シンケンレッドはシンケンマルに填めたリングをベルトにかざす。
《コピー・プリーズ！》
すると、ベルトの前に赤い魔法陣が現れ、その中からシンケンマルが現れる！
シンケンレッドはコピーウィザードリングを応用して、新しいシンケンマルを召喚したのである！
暁人「おぅ！なるほど。」
ウィザードは驚きつつも理解する。

本家ウィザードも、かつてコピーウィザードリングを応用して、ウィザーソードガンのハンドオーサーに読み込ませることでもう一本ソードガンを召喚して幾度か二刀流で戦った事がある。
それを思い出したシンケンレッドは、シンケンマルに填めて読み込ませることで同じく二刀流が出来るのではないかと思い付いたのである！

シンケンレッドは現れたもう一本のシンケンマルを掴み、二刀流で構える。

丈司「見てろ。俺のちょっとしたショータイムだ。」

そう言うとシンケンレッドは、二本のシンケンマルにセットした秘伝ディスクを回転させる。
すると、二本のシンケンマルはそれぞれ青と緑に発光し変形し、やがて武器に変形する。

丈司「ウォーターアロー＆ウッドスピア！」

二本のシンケンマルが変形した武器は、弓状のウォーターアローと、長槍状のウッドスピアである！
本家ではウォーターアローはシンケンブルー、ウッドスピアはシンケングリーンの専用武器であったため、所謂シンケンジャー〝男性陣〟の使っていた武器の組み合わせである。

暁人「ははぁ、なるほどね。」

（ＢＧＭ：覚醒（ＲＩＤＥＲ　ＣＨＩＰＳ　ｖｅｒ．））

丈司「シンケンレッド・千葉丈司、参る！」

サボテグロン「そんなコケ脅しに負けるか！行け戦闘員！」
サボテグロンの指示でショッカー戦闘員たちはシンケンレッドに向かって行く。
シンケンレッドはモヂカラを込めてウッドスピアの柄を長くする。
そして片手にウォーターアロー、片手にウッドスピアで、回しながら時に持ち替えつつの打撃や斬撃で迎え撃つ！
二つの武器による攻撃は青と緑の光を走らせながら炸裂していき、戦闘員達を次々と吹き飛ばしていく。
そしてシンケンレッドは高く跳躍すると、ウッドスピアを矢としてウォーターアローの弓で引き絞る。
丈司「明鏡止水で大木晩成！」
シンケンレッドは引き絞ったウッドスピアを放ち、ウォーターアローとウッドスピアの合体技『明鏡止水で大木晩成』を放つ！
飛んで行くウッドスピアは無数の矢のように緑の光を纏って分裂し、戦闘員達を次々と射貫き爆破していく！
そしてあっという間に戦闘員達は全滅した。
サボテグロン「バカなっ!?大量の戦闘員達をこうも簡単に…!?」
サボテグロンが動揺している間にシンケンレッドは、ウォーターアローとウッドスピアをいったん二本のシンケンマルに戻し、別の秘伝ディスクをセットして回転させる。
すると、今度はそれぞれピンクと黄色の光に包まれ変形し、別の武器に変わる。
丈司「ヘブンファン&ランドスライサー！」

今度はそれぞれ、扇子状のヘブンファンと大型手裏剣状のランドスライサーである！
本家ではヘブンファンはシンケンピンク、ランドスライサーはシンケンイエローの専用武器であったため、所謂今度はシンケンジャー〝女性陣〟の武器の組み合わせである！

丈司「お前の棍棒を砕く！」

そう言うとシンケンレッドは再び跳躍する。

丈司「迫力満天な奮闘土力！」

シンケンレッドはランドスライサーを投げ、更にそれをヘブンファンのトルネードで加速させる合体技『迫力満な奮闘土力』を放つ！
ピンク色のトルネードにより速さを増したランドスライサーはサボテグロン目掛けて一直線に飛んで行く。
サボテグロンはそれを打ち返そうと棍棒を野球のバッターのように構える。

サボテグロン「こんなもん打ち返してやるぜ！
行けっサボテンホームラン！」
サボテグロンは思い切り棍棒を振る！

〝カキーン〟

…いかにも〝鉄の棒が固い球を打ち返したような音〟が鳴り響く。
ランドスライサーは打ち返されてしまったのか⁉？
サボテグロン「ヒィヒィヒィ…楽勝だぜ……
……？なっ！そんな馬鹿な⁉？」

余裕ぶっていたサボテグロン。しかし、その直後に自身の持っていた棍棒がいつの間にかバラバラに砕けて足元に散らばっている事に気付く。

更に、

〝ズガガーン〟

サボテグロン「⁉？ぐおあっ！」

ランドスライサーの斬撃を受けたいたサボテグロンの体が時間差で火花を散らして爆破した！

それと共に返ってきたランドスライサーをキャッチするシンケンレッド。

合体技は見事に決まったのである！

サボテグロン「くそっ……おのれっ！　おのれおのれ～！」

シンケンジャーの男性陣と女性陣の武器のコンボにより一気に劣勢になったサボテグロンは、やけっぱち気味に突撃し始める。

今こそ、奴を文字通り三途の川に落とす時だ！

暁人「そろそろフィナーレと行くか。」

《フレイム・シューティングストライク！　ヒ・ヒ・ヒ！……》

〝ズガガガガーン〟

サボテグロン「ぐおあああああっ！」

ウィザードは、ウィザーソードガンのハンドオーサーに指輪をかざ

してフレイムシューティングを放つ！
そしてそれにより自身の周りで起こった大爆発に巻き込まれたサボテグロンは上空高く吹っ飛び始める。

暁人「決めろ！丈司！」

《バインド・プリーズ！》

ウィザードはシンケンレッドにトドメを譲ると、バインドウィザードリングをリードして円を描くように魔法陣を複数出現させ、そこから出るチェーンを束ねてトランポリンを作る。

丈司「心得た！」

シンケンレッドはバインドの鎖のトランポリンを蹴って空高く跳び始める。そして、上空のサボテグロン目掛けて跳びながらシンケンマルの秘伝ディスクを回転させる。
シンケンマルは赤い光を纏って変形し、シンケンレッド専用の巨大な太刀・烈火大斬刀へと変わる！

丈司「烈火大斬刀！　百火繚乱！」

〝ズギャーン〟

シンケンレッドは、烈火大斬刀の刀先に炎を纏わせ、必殺の斬撃・百火繚乱をすれ違いざまに決める！

サボテグロン「グアアアアァァッ!!」

〝ズドーン〟

サボテグロンは空中で火の粉を散らしながら大爆発して消し飛んだ。
シンケンレッドは烈火大斬刀を手に着地して凛々しく肩に担ぎ、ウィザードはそんな彼の元へ駆け寄る。

丈司「…汚ねぇ花火だ。」
暁人「それな。　やったな、丈司。」

二人のヒーローがサボテグロンを撃破した事に、沙織たち戦車女子たちは喜び合う。

暁人「おーっと！喜ぶのはまだ早いぜ？」
丈司「次はいよいよ、マドカとみほの救出だな。」

暁人たちの言葉を聞いた沙織たちは、緊張からか息を飲む。

暁人「作戦は考えてある。今から君たちには、俺の言う通りにやってもらう。」

暁人は沙織たちに作戦の概要を説明し始める。
まず、最初はティガの状態で繭糸に包まれたのだが、今は既に3分が経過してマドカ（人間体）に戻っている。
そんなマドカの現在地はというと、いつの間にか向かわせていたガルーダたちによると繭にされたビルの12階目の真ん中という事が分かった。
一方でゴキグモンはというと、暴れずに繭にされたビルの側にいるのは餌を待っているだけではなく、同時に後に幼虫の巣になるその繭ビルを守るためという事も分かった。

暁人「そこで、今からやることはと言うと…
まずはカバさんとウサギさんがゴキグモンを攻撃して注意をそら

せ。二手に分かれてやればより効果的だと思う。」
梓「分かりました。」
おりょう「心得た！」
暁人「その間に、沙織たちあんこうチームが、マドカ目掛けて光を撃つんだ。それにより、一気に光エネルギーが満タンになったティガは復活。ゴキグモンを倒してくれるだろう。」
華「分かりました。でも…私たちの砲撃で力が溜まるのでしょうか…？」
暁人「君たちが撃つのは、ただの砲撃では無い。
光の砲撃だ。」
そう言うと丈司はショドウフォンで『輝』のモヂカラを宙に書き始める。
《ビッグ・プリーズ！》
丈司「はっ！」
そして暁人がビッグウィザードリングをベルトにかざして赤の魔法陣を出現させ、丈司がショドウフォンを振るうことで輝のモヂカラを魔法陣に通過させる。
すると、輝のモヂカラは3倍以上に巨大化し、それにより光量も増幅する。
更に丈司はそれに『縮』のモヂカラを注ぎ込むことで、光量はそのままで戦車でも撃てる大きさまでに縮小させる。
よって、光の砲撃の完成である！
暁人「よし！完成だ。これを打ち込め。縮小のモヂカラは弱めに注いであるから、戦車の砲撃の力なら、その衝撃で一気に広がりマドカ

の元へ届くはずだ。あとはそれをマドカかが掴めば、きっと光の力を取り戻せるはずだ。」
暁人がそう言うと、光の力の弾丸はあんこうチームの戦車の砲塔へと入っていった。
華「なるほど、それをピンポイントでマドカさんに打ち込むわけですね。」
優花里「光の巨人の力を戦車で打ち込むなんて…緊張感ありますがゾクゾクしますね～。」

あゆみ「でも、西住先輩の方はどうするんですか？ティガさんが繭を破って登場したとしても、その影響で落下する可能性もありますし…。」
暁人「（右人差し指を振ってチッチッチと言いながら）ドントウォーリー。みほの方は俺が助けるさ。」
華「了解しました。」
沙織「つまり、マドカさん復活に、華の1発がかかってるってワケだね。」
華「ええ、絶対に成功させます。」
優花里「我々も、引き金を引く五十鈴殿のために力を合わせましょうね。」
麻子「それに……早くこの戦いを終わらせて寝たい…。」
沙織「もお麻子ったら……はぁ～彼氏に告白するぐらいドキドキしてきたー。」
華「告白したことないのに？」
沙織「ぶー、いつか絶対するもんっ！……（小声で）いつか……絶対……。」
小声でそう呟く沙織は、どこか暁人の方を向いてるように見えた……。
カエサル「よし、賽は投げられた！」
佳利奈「絶対やったるぞー！」
優花里「あの時助けられた（第1話参照）お礼をする時ですね！」

暁人「よーし！みんな気合十分みたいだな……作戦名は、みほちゃんっぽく名付けて『ピカッと作戦』。
それじゃ、作戦開始！」
ついに、決死の救出作戦の幕が切って落とされる！

一方、繭ビルの中のマドカとみほはというと、
マドカは、みほたちを守るために命をかける他のワケを話していた。
その内容は驚くべきものだった！
みほ「……他の置いてきた人たちのためにも…？」
マドカ「ああ……前世界に残してしまった、弟や妹の事も思うと……余計にな。」
なんと、マドカには弟と妹がいたのだ！
それは、暁人と丈司も同じであった。
今頃、自分たちを残して逝ってしまった兄のことを思って悲しんでるかもしれない……。そう思えば思うほど、人々を守りたい気持ちが強くなるのである。
マドカ「この世界の人々まで…僕たちの弟や妹みたいに悲しませたくないから……だから、そのことを思えば思うほど、強くなるんだ……守りたいっていう気持ちがね。」
みほ「マドカさん…。」
マドカ「それに、この世界の悪を全て倒して…少しでも早く弟妹のもとに帰りたいという気持ちもある……だから……。」
自分たちの強い決意を話しているマドカだが、エネルギーがまだ少ない上にみほに光を与え続けているため、流石に限界が近づいていて話し方も途切れ途切れとなっていく。
みほ「分かりましたから……これ以上私のためにエネルギーを使わないでください……
いくら弟妹のためでも今ここで死んでしまったら元も子もないで

すよ。」

マドカ「死なないよ……僕らは……君たちを守り抜くまでは……

みほちゃん……君にも確か、お姉ちゃんがいたよね？……じゃあ尚更さ。……

君のお姉ちゃんも、君が死んだら悲しむと思う……。」

マドカの言葉にみほははっとなる。そして、かつて自分もいた黒森峰女学院の戦車道隊長でもある姉・西住まほの事を思い出す。

まほ（回想）「諦めないこと、そして、どんな状況でも、逃げ出さないことですね。」

そして、思い出したいつかのインタビューで西住流について答えていた姉の言葉がきっかけで、ある事も思い出す。

みほ「思い出しました。……私、家元のやり方に納得がいかなくて……一度戦車道が嫌になって、ここ大洗の学校に来たのです。……でも突然怪獣たちが現れて、大洗にも戦車道が復活した時、私、決めた方があったのです。

『家元やその流派に囚われず、自分たちのスタンスで頑張っていく』と…。」

マドカ「そうか……君たちも、強く決めた事で、頑張ってきたんだね。」

みほ「はい。そうやって自分たちなりに頑張っていけば、いつかお姉ちゃんも、それからお母さんも、認めてくれるかなと思いまして……。

そしてその日が来るまでは、何があっても戦車道を辞める気は無いし、死ぬ気もありません。」

マドカ「…それが…みほちゃんが戦車道を再開し始めた理由の一つ

か…。」
みほ「はい。それに、沙織さんたち仲間と一緒に、この大洗を守り抜きたいとも強く思っています。」
自分が最初に強く決めた事、そして、大洗を守り抜く決心を思い出したみほは、再び自信が戻ってきたのか、さっきよりも明るめに話していた。
マドカ「いいよ…その意気だよみほちゃん……志しが人と違っていても、それがあるのなら、それを強く持つことが大事だ……そうすれば、道は必ず開ける……。」
みほ「……ビー……アンビシャス……。」
マドカの言葉に、みほはそっと呟く。
マドカ「あとは、仲間を信じ続ける事も大事だ……。僕は今でも、暁人たちを信じている。
必ず、助けに来てくれると……。
〝ズドーン　ズドーン〟
その時、繭糸に覆われているため外はよく見えないが、その外から砲撃のような音が聞こえ始める。
それを聞いた瞬間、マドカは何かを察したのか、少し安心な笑みを浮かべる。
マドカ「ほら…やっぱり……。」
外では、カバさんチームとウサギさんチームがゴキグモンに攻撃を始めていた。
ピカッと作戦が開始されたのである！

優季「佳利奈、左に。」
佳利奈「アイ！」
優季「つぎは右。」
佳利奈「アイアイ！」
優季「頑張って！あなたはやればできる子よ！」
佳利奈「よっしゃーっ！」
あや「こんなにも燃える戦いは久しぶりかもね！」
梓「みんな、改めて気合い入れていくよ！」
ウサギさん一同「おーっ！」

ゴキグモンは砲撃を受け続けるが、基本的に反撃せず、時に弾きながら、幼虫の巣にするビルの繭を守る一方である。
カエサル「何が何でも自分のヒナの巣を守る気なのか…。」
左衛門佐「正に、弁慶の立ち往生のようだ。」
おりょう「いや、死ぬわけじゃ無いから多分違うと思うぜよ。」
エルヴィン「ここはベルリンの壁崩壊のようにいくぞ。」
カバさん一同「それだっ！」

作戦通り、ゴキグモンは防戦一方とはいえカバさんとウサギさんに気を取られている。
その間に、あんこうチームの砲手の華は、マドカの位置へと慎重に照準を合わせ始める。

沙織「…頑張って華。彼氏に最高のプレゼントを渡すつもりで。」

華「ええ。花を生ける時のように、集中して……。」

普段から生け花もしているが故か、華の集中力はなかなかのもので、やがてマドカに照準が合う。

一方そのマドカの位置付近には、暁人が変身した仮面ライダーウィ

ザード（ハリケーンスタイル）が飛んで来ていた。
暁人「まずはみほちゃんの救出…。」
ウィザードは、みほの現在地に着こうとしている。
作戦は順調で、みほはまもなく救出されるかと思われた。
しかし、
〝カキーン〟
暁人「！うおあっ⁉？」
ゴキグモンが爪で弾き飛ばした砲撃の弾丸が飛んで来て、ウィザードは直撃しそうになって思わず回避するが、そのはずみでバランスが崩れて数回下まで落下するがなんとか踏ん張る。
すると、ゴキグモンは巣に何かされそうだと気付いたのか、カバさんとウサギさんの攻撃を気に留めず巣の方へと進撃を始める！
状況は、一気にギリギリのとこまで追い込まれ、ウィザードも救出が間に合わない状況となってしまった！
ここまで来ると、もう華の砲撃のみに頼るしかない！
沙織「うわあっ！こっちに来始めたよ！」
沙織たちが慌てる中、華はしっかりと精神を集中させ、マドカへと狙いを定める。
ゴキグモンはもうすぐ近くまで接近しつつあった……！
華「……マドカさん……行きますっ！」
〝ズドーン〟

遂に、希望の引き金が引かれた！

暁人と丈司が作り、華がみんなの想いを込めて放った光の砲撃は、光って広がりながらマドカの方へと一直線に飛んで行く…！

暁人「マドカ…俺たちはお前を信じてる…！」

ウィザードは着地し、みほの方はマドカを信じ、マドカに任せることにした。

必ず、繭を突き破ると同時にみほを救出すると信じて……。

マドカも、そしてみほも、繭の糸の間から光が差して来て、それだ段々大きくなっていくのに事に気づき始める。

みほ「…マドカさん、これは…？」

マドカ「ああ……暁人たちが、遂にやってくれたんだ。」

丈司「マドカ……光をつかめ!!」

見守っている丈司の叫びが響くき、それがマドカにも届く！

やがて、光がマドカの元に届き、マドカたちの目の前を覆っていた糸が破れ始め、大きな光が差し込む！

マドカ「みんな、ありがとう。…今行くぞ！」

マドカはスパークレンスを前方に突き出す。

すると、スパークレンスに光が次々と吸収されていき、やがて光エネルギーが満タンとなったスパークレンスは眩い光を放つ！

マドカ「ティガーッ!!」

〝キャイイーン〟

マドカは光に満ちたスパークレンスを高く挙げ、それにより先端のティガのプロテクター状のパーツが展開して溢れる光に包まれる。
そして、光の中からウルトラマンティガ（マルチタイプ）が右腕を突き出して飛び出す！

（ウルトラマンティガ登場ＢＧＭ）

「チャーッ！」

〝ズドンッ〟

〝ギイィィィ⁉？〟

繭ビルを突き破りながら光と共に現れたティガは、そのまま右拳を突き出して飛び出るスピードを利用してゴキグモンにパンチを打ち込む！
ゴキグモンが地面に倒れると同時に、ティガは着地する。

カバさんとウサギさん、そしてあんこうチームは、復活したティガを見上げる。
おりょう「遂にやったぜよ！」
あゆみ「やったー！」
沙織「（華に抱き付きながら）やったね華ー！」
華「ええ。」

ティガはしゃがんだまま握っていた右の拳をそっと地面に下ろすと、ゆっくりと手を開く。

すると、そこには西住みほの立っている姿があった！
ティガは繭から脱出する直前に、みほを手中に掴んでいたのである。

沙織「！みぽりん！」
それに気づいた沙織たちチームメイトがみほの元に駆け寄る。
みほ「へへ…ごめんね……心配かけて。」
沙織「みぽりん大丈夫？怪我とかない？」
みほ「大丈夫。……（ティガを見上げながら小声で）マドカさんのおかげで……。」

自身を見上げるみほを見つめるティガはゆっくりと頷く。その様子は「もう大丈夫。後は任せろ。」と語りかけてるように見えた。

みほ「（ティガを見上げながら笑顔で）あとは任せますよ、マドカさん。」

華「西住さんも無事でなによりです。」
優花里「ですね！ではとりあえず、安全な場所へ移動しましょう。」
みほ「そうだね。」
みほたちあんこうチームは、戦車に乗り込む。
みほ「それでは全車両、一時後退！」
一同「了解です！」
復活したみほが指示を出し、全戦車安全な場所へと移動を始める。

そんなみほたちの戦車を見届けたティガは、後ろで身構えるゴキグモンの方へと振り向く。
そして、鋭く構えを取る！

（ＢＧＭ：ＴＡＫＥ　ＭＥ　ＨＩＧＨＥＲ）
遂に、ティガのリベンジ戦が開始される！

両者は激しく土砂や土煙を巻き上げながら駆け寄る！

ティガは駆け寄ると同時に一回転して右回し蹴りを繰り出し、ゴキグモンは駆け寄りながらそれをしゃがんでかわす。そして両者はすれ違う。

次に両者ともに振り向いて向き合うと、ティガは右脚でミドルキックを繰り出すがゴキグモンはそれを両手の爪で弾いて防ぐ。

ティガは怯まず、すかさず左脚の回し蹴りを頭部に打ち込み次に胸部にパンチを2発打ち込んだ後腹部に右足の横蹴りを打ち込む。

そして両手でゴキグモンの頭部の触覚を掴んで押さえ込むと、そのまま腹部に左脚の横蹴りを決め、跳躍して両脚でゴキグモンの頭部を挟んでフランケンシュタイナーの要領で地面に叩きつける！

すると、立ち上がったゴキグモンは地上戦は不利と見たのか背中の羽を羽ばたかせて飛び上がる。

〝キュビーン〟

〝トゥララララッ〟

「ヂャッ！」

ティガはスカイタイプにチェンジしながら上空に飛び上がる。

両者ともに目にも留まらぬ空中戦を開始する！

ティガは手先からハンドスラッシュを連射しながら飛んで追い、ゴキグモンはそれを避けながら飛び回る。

そして、一旦静止してカウンターのごとく腕の爪でラリアットを決めて叩き落とそうとするが、ティガは咄嗟に腕を掴んで数回振り回した後放り投げる。

そしてすかさず両足蹴りを叩き込んで遠くに吹っ飛ばす！

今度は互いに飛んで向かっていく！
ゴキグモンはティガ目掛けて飛びながら、口から弾丸状にした繭糸を連射するが、ティガはそれをかわしながらゴキグモン目掛けて飛んでいく。
そして、すれ違いざまにチョップを決めて後ろ向きに宙返りをする。
ゴキグモンの片方の羽はチョップにより火花を散らしながら切り離れ、ゴキグモンは地上に落下する。

〝キュビーン〟

〝トゥララララッ〟

ティガは着地しながら今度はパワータイプにチェンジする。
ゴキグモンは立ち上がり、再びティガ向かい接近する。
ティガはカウンターの右足の後ろ回し蹴りを胸部に叩き込み、次に跳躍しての右拳の一撃を顔面の左側面に叩き込む。
そして胸部にパンチを連打し、次にヘッドロックをかけてそのままフェイスクラッシャーで叩きつけた後、ウルトラリフターにより両腕でゴキグモンを頭上高く担ぎ上げて遠くに放り投げて地面に叩きつける。

〝キュビーン〟

「んーはっ！」

〝トゥララララッ〟

ティガは両腕をティガクリスタルの前でクロスして左右に振り下ろすことでマルチタイプに戻る。
そして上空に飛び上がると、両腕を胸の前でクロスさせてエネル

ギーを溜めた後、一気に広げて光の刃・ティガスライサーを発射する！

光の刃は地上のゴキグモンの胴体に直撃し、ゴキグモンは大爆発とともに吹っ飛び地面に転がる。

そしてティガは着地して体制を整えると、両腕を腰の位置まで引き前方で交差させた後、左右に大きく広げてエネルギーを集約し、L字型に組んで必殺の超高熱光線・ゼペリオン光線を放つ！

光線は勢いよく一直線に飛び、ゴキグモンを直撃する。

ゼペリオン光線を受けたゴキグモンは地面を削りながら後退した後、大爆発して消し飛んだ。

ゴキグモンを撃破したティガは、爆風を背に振り向き雄々しく立つ。

カエサル「来た、見た、…勝った！」

梓「やったー！」

華「やりました！」

ティガの勝利にみほたち戦車ガールズは喜び合う。

そんな中、みほはティガに向けて笑顔で無口でピースをする。

それを見たティガも、みほに向けてサムズアップを決めた。

仲間たちの共同作戦のおかげで、勝利して戻って来たマドカ。

暁人「ったくマドカ、心配したんだぜ？」

マドカ「ははは、ごめんごめん。でも、暁人たちのおかげで無事に戻ってこれた。ありがとう。」

丈司「それにみほも無事に戻って来れたし、これにて、一件落着！だな。」

暁人「しかし、ウルトラマンの力を持つマドカはともかく、何で生身のみほちゃんも傷一つつかず戻って来れたのだろうな？」

マドカ「え？…い、いや、それはその…。」
暁人「あ～、さてはマドカ、また無茶したな？」
マドカ「まあまあ、でもこうやって無事事態が終息したんだから、結果オーライ結果オーライ。」
そう言うとマドカは、戦車仲間と笑い合うみほの方を振り向く。
マドカ「それに……志高く持てば、必ず道は開けるさ。」
マドカの言葉に暁人と丈司は何かを察したのか、無口で頷いた。

すると、マドカに気づいたみほが歩み寄る。
みほ「マドカさん…本当に、ありがとうございました。」
笑顔で礼を言うみほに、マドカは笑顔でサムズアップを向け、後ろで見ている暁人と丈司もこっそりサムズアップを決めた。

マドカ「志は違っても、この世界を守りたい気持ちはみんな同じだ……
だから、これからも力を合わせて頑張ろう。」

みほ「…はい。」

そう言うとみほもサムズアップを向け、マドカとみほは互いのサムズアップを合わせた。

今回の件により、より団結力や決断力が増したヒーロー達と戦車女子達。
これからの活躍が期待できるであろう。

〈エピローグ〉
これからも志を高く持って頑張ろうと誓い合ったマドカたちとみほたち。
そんな様子を遠くから見つめている一人の男がいた。

数日前も姿を現した、黒と紫のライダースーツ風ジャケットを身に付けた冷たい表情の男である。

???「……志し高く……か……俺には無縁の事だな……。」

男は握った拳を見つめながらそう言った後、また何処かへ去ろうとする。

その時、

「イーッ！　イーッ！」

男の前に奇声を発しながら数人のショッカー戦闘員の残党が現れた！

???「……俺の邪魔をするな。」

男はクールにそう言うと、戦闘員目掛けて駆け寄り、手前の一人を前蹴りで蹴飛ばした後、その次の個体に跳躍して前転て跳び越えながらチョップを頭部に打ち込みダウンさせる。

前後の戦闘員が攻撃を加えようとするが男はそれを余裕でかわし、前方の一人を右足蹴りで吹っ飛ばした後後方の一人を左足の後ろ蹴りで吹っ飛ばす。

そして次に横から右手に持つナイフを突き付けてきた一人の攻撃をかわすと同時にその右腕を両手で掴み、一本背負いで地面に叩き付けた後そのまま左手で相手の右腕を掴んだまま腹部に右拳を叩き込む。

その隙に後ろから一人がナイフを振って斬りかかるが、男は先ほどダウンさせた一人の死体を台に側転してかわすと、跳躍しながら一回転しての右足蹴りを叩き込んで吹っ飛ばした！

男は残り数体を一掃しようと、バイクのハンドルグリップのような形状をしている拳銃型のツールを取り出す。

《ガン》

〝ズキューン　ズキューン…〟

〝スガガガガーン〟

野太い音声コールと共に拳銃型のツールから連射された弾丸により、ショッカー戦闘員の残党は瞬く間に全滅した。

ショッカー戦闘員の残党を一掃した男は、ツールを懐にしまう。

???「あのサボテン人間（サボテグロン）の残りカスか……つまらないな……

まあいい。いずれ大物の敵を倒せば、俺も認められる日が来るはずだ……。」

男はそう言うと、色は黒と紫で構成され、フェアリングには髑髏のモジュールが浮かび、黒をベースに紫の炎が燃え上がる毒々しいデザインのバイクにまたがる。

そしてそのバイクを駆って何処かへと去って行った……。

彼は一体何者であり、何処へ向かい、何を求めているのであろうか……？

それはまだ、誰も知らない。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

（ＥＤ：Ｅｎｔｅｒ　Ｅｎｔｅｒ　ＭＩＳＳＩＯＮ！）

〈次回予告〉

（予告ナレーション：千葉丈司）
（予告ＢＧＭ：ウルトラマンＸ（インストルメンタル）　サビ）

宇宙工作員ケリスの手によって、新兵器の実験台にされそうになるカメさんチーム。
俺の剣の流派でさえ、そのスピード攻撃を見切ることが出来ない！
だがそこへ、とてつもなく速い〝あの赤い戦士〟が現れた！

次回、ヒーローズ＆パンツァー、『バスター　駆ける時』